「近代日本におけるスポーツ文化の形成と学校教育」

２０１１年度山本ゼミ共同研究報告書

慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会

序

2011 年度の山本ゼミでは、「近代日本におけるスポーツ文化の形成と学校教育」というテーマの研究プロジェクトを立ち上げた。本冊子は、その研究成果報告である。

このプロジェクトにおいて期待されたことは、文字通り、近代日本において一般的に行われた各種スポーツが、どのようなプロセスを辿って導入され、普及するに至ったのかの諸動向を追うとともに、その動向に及ぼした学校教育の影響を探ることにあった。研究開始時点における私たちの着想には、日本において様々なスポーツが普及し、いわばスポーツ文化とも称し得るような社会的文脈を形成するに至るには、その背景に、学校教育の役割と影響とが相当程度に認められるはずだ、とする仮説的見通しがあった。

そして、この仮説の検証作業を通して、近代日本における各種スポーツの普及に果たした学校教育の役割を歴史的に明らかにするに留まらず、さらに踏み込んで、スポーツという視点から日本の学校教育に潜む何らかの特質を探り出すことが期待された。学校教育とスポーツとの何らかの親和性を探ることで、日本の近代教育に内在する一つの特質をあぶり出すための論点を引き出すことが目指されたのである。

この着想に基づき、プロジェクトでは、スポーツ種目として、野球・ラグビー・テニス・スキー・陸上競技の五者を取り上げるとともに、敢えてジェンダーの視点から、女子スポーツというジャンルからのアプローチを加えることにした。この六つの研究グループでは、執筆箇所の分担を明確に定めたものもあれば、まさに共同執筆という形をとったものもあった。ここでは、各グループのメンバー名のみ紹介しておく。

＜野球斑＞

奥田真佑子（４年）

高橋虎太郎、濱田悠佑、松本啓志、若菜良平（３年）

＜ラグビー斑＞

入江高史、吉岡杏奈（４年）

瀧口晃太郎、吉貝　穣（３年）

＜テニス斑＞

新井　碧、倉友　桐、鈴木麻衣子（４年）

神田昌代、木村　円、水谷公美（３年）

＜スキー斑＞

土門亜里沙、原健太郎、森本輝嗣、安田亮介（４年）

大下咲子、野見山実香、村岡佳菜子（３年）

＜陸上競技斑＞

奥山美香、原　聡、府川結香（４年）

＜女子スポーツ斑＞

嵯峨崎隼大、野崎まりか、山縣　麗、山口花奈（３年）

メンバー諸君は、実質十ヶ月足らずの短い研究期間にも拘わらず、精力的にこの研究プロジェクトを進めてくれた。そのことには心より敬意を表したいと思う。また各章での論考を通して、近代日本のスポーツ文化の形成に果たした学校教育の役割が、相応の輪郭をもって浮き彫りにされたことも評価したい。例えば、「野球は身体的な鍛錬のみにとどま

らず、精神的な鍛錬にもつながるとされたことで、武道と同じような効果が期待できるとして、その価値を高めていった。そのような野球のあり方は、言い換えれば、学校教育にとって非常に都合の良いものであった。野球は、勝利至上主義や精神主義、集団主義といったことを教え込むうってつけの教材だったといえる」（12 頁）や、「明治時代の日本の社会事情は、近代スポーツのような集団的な戸外の娯楽を楽しむほどの、社会的資本はまだ整っていなかった。その例外となったのが学校であった。学校はスポーツに即応することのできる年代の集団であるし、また競技場などの設備も持ち合わせていた。このように、近代スポーツの発展において、学校という存在は最高の土壌となった」（31 頁）などの知見を提示し得たことは、極めて重要な研究成果といえよう。

しかしながら、本研究成果報告書が十分に満足できる内容であるかといえば、率直にいって、筆者の心に内には少なからぬ不満が残されている。

何よりも、参照した先行研究の叙述が「スポーツ史」の関心に基づくものが圧倒的であったため、そうした先行研究の関心に引きずり込まれてしまう傾向が払拭されなかった。その結果、「スポーツ文化の形成に及ぼした学校教育の影響」と「スポーツという視点から探り得る日本の学校教育の特質」を捕捉しようとする本プロジェクト元来の関心に基づく論考の跡が、やや稀薄になってしまったことが残念である。

さらに、引用文や引用図表等の出所が必ずしも明記されていなかったり、引用文献の表記が未完成であったりするものも少なくなかった。論文としての形式を一定の水準に整えることが、研究の最も基本的な要件であることは論を俟たない。この点に関しては、メンバーたちに自覚的な反省を促しておきたい。

とはいえ、もとより学部学生の論文に、学術的観点から内容上・形式上の不備が生ずることは避けられない。本冊子では敢えて、メンバーたちから提出された完成原稿をそのまま掲載することにしたが（表記の形式については、統一をはかるため若干の修正を施した）、それはメンバーたちに、現時点での自分自身の学問的力量・態度について何が不足しているのか、を自覚してもらうことを意図してのことである。その意味でも、本研究成果報告書が、プロジェクト・メンバーたちの今後の学問的成長を反省的に促す契機となることを期待してやまない。

２０１２年３月１日　山本 正身

目　次

序 …… i 頁
第一章　野球 …… 1 頁
はじめに――研究動機と普及の定義 …… 1 頁
第一節　野球の日本への導入と普及 …… 1 頁
1．日本への野球導入の経緯　1 頁
2．内面・意識的側面における競技としての野球　2 頁
3．組織的側面における競技としての野球　4 頁
第二節　学校教育における野球 …… 5 頁
1．一高の野球　5 頁
2．慶應義塾、早稲田の野球　8 頁
むすび――学校教育の役割分析 …… 11頁
第二章　ラグビーフットボール …… 15頁
はじめに――研究動機と目的・方法 …… 15頁
第一節　ラグビーの発祥――特にイギリスに焦点を当てて …… 17頁
第二節　日本におけるラグビーの普及過程 …… 20頁
1．実質的普及の動向　20頁
(1)慶應義塾のラグビー導入から体育会公認蹴球部発足前後まで　20頁
(2)京都第三高等学校・同志社での蹴球部誕生、日本初の国内対戦実現まで　23頁
(3)早稲田の蹴球部誕生前後まで　24頁
(4)早慶戦の開始と関東ラグビー界の勃興　26頁
2．形式的普及の動向　27頁
むすび――普及動向における学校教育の果たした役割 …… 30頁
第三章　テニス …… 35頁
はじめに …… 35頁
第一節　テニスの日本への導入 …… 35頁
1．テニスの導入期　35頁
(1)横浜山下公園を中心とする居留地でのテニスの発祥　35頁
(2)リーランドによる体操伝習所への紹介　36頁
(3)２つの導入経緯のその後　37頁
2．東京高等師範学校を基点とした教育機関でのテニスの拡大　37頁
(1)東京高等師範におけるテニスの発展　37頁
(2)小学校・女子教育機関でのテニスの普及　38頁
第二節　協会の誕生とテニスの拡大 …… 39頁
1．学校間でのテニスの試合　39頁
2．慶應義塾の硬式球の採用　41頁
3．協会創立後の世界進出と戦争による中断　43頁

(1)協会の設立と世界進出　43頁
(2)早慶戦の中止、テニスの停滞　45頁
むすび　46頁
第四章　スキー　51頁
はじめに　51頁
第一節　日本におけるスキー導入の経緯―コラー・レルヒ・永井を中心に　51頁
１．コラーとレルヒによるスキーの普及　51頁
２．スキー普及における永井の活動　54頁
第二節　日本におけるスキー普及の動向　54頁
１．導入当初の普及の動向　54頁
(1)本研究におけるスキー「普及」の定義　54頁
(2)講習会や大会に見る普及　55頁
２．他県に見る普及　56頁
(1)長野県　56頁
(2)石川県　56頁
３．学校関連の組織に見る普及　57頁
４．日本でのスキー普及に関する考察　57頁
第三節　普及動向に与えた学校教育の役割　58頁
１．主に新潟について　58頁
(1)最初の民間人スキー講習会――明治44年・学校教師　58頁
(2)中等学校のスキー　60頁
２．主に北海道について　61頁
(1)北海道大学について　61頁
(2)名寄市について　63頁
おわりに　65頁
第五章　陸上競技　70頁
はじめに　70頁
第一節　日本における陸上競技の全国規模化　70頁
１．国際競技大会への参加とその後の影響　70頁
２．陸上競技における組織の動向　72頁
第二節　慶應義塾における陸上競技の普及　72頁
１．體育會と徒歩部の発足　72頁
２．運動会の開催から陸上競技会へ　73頁
第三節　東京大学陸上競技の歴史　74頁
１．ストレンジの運動会　74頁
２．第１回帝国大学運動会　75頁
３．運動会の変貌　76頁
４．陸上競技の近代化　76頁
むすび　77頁
第六章　女子スポーツ　81頁

はじめに　……　81頁
第一節　女子体育の展望　……　81頁
　１．女子体育の普及の流れ　81頁
　　(1)女子体育の芽生え――明治時代　81頁
　　(2)女子体育の普及――大正時代　84頁
　　(3)女子体育の定着――昭和時代　84頁
　２．女子体育と教員養成機関　85頁
　　(1)女子体育教員養成機関の誕生　85頁
　　(2)教員養成機関の特徴と果たした役割　86頁
第二節　女子体育の発展に伴う諸問題　……　87頁
　１．ジェンダーと体育　87頁
　　(1)明治30～40年代における女子体育をめぐる言説　87頁
　　(2)女子体育から女子スポーツの発展に向かう大正時代　89頁
　２．服装改善問題　90頁
第三節　競技別にみる女子スポーツの発展――水泳　……　92頁
　１．女子が登場するまで　92頁
　２．全日本選手権優勝者からみる教育機関の役割とは　93頁
むすび　……　94頁

第一章　野　球

はじめに――研究動機と普及の定義

日本においての野球は、プロ野球のみならず高校野球や大学野球においても、大きな注目を集めている。学生野球においては、春の選抜高等学校野球大会や夏の全国高等学校野球選手権大会、東京六大学野球などはメディアでもよく取り上げられる。注目を浴びる理由としては、観る者の母校や出身地を応援する気持ちや、際立った才能を持った選手の登場など様々な理由が考えられる。我がグループにも学生野球を経験した者が多く、その魅力についてはよく知ったところだろう。また、今や野球は、日本人が世界で活躍することの出来る競技の１つである。野球の世界大会であるWBC（WORLD　BASEBALL　CLASSIC）において連覇を達成したことや、メジャーリーグで活躍する日本人選手も数多く存在することは、世界に日本の野球が通用することの証明として充分だろう。そして、このような日本野球の土台は、学生野球によって培われている。このことから、日本の学生野球のレベルやその指導方法が優れていることなどが考えられるが、こういった土台はどのようにして培われて来たのであろうか。野球導入の経緯から、戦前までの普及の様子を見ながら探っていきたい。詳細は後述するが、本研究で主に取り扱う明治期から、日本の野球の主な担い手は学生達であった。その担い手達や人々の野球に対する熱意の由来を明らかにし、組織団体の成立や学校教育との関わりについて探ることが目的である。そこで、本研究では学生野球が普及していく経緯を、競技的認識の獲得時期とその要因、その過程で野球が果たした学校教育的役割を中心に取り扱っていくこととする。

なお、本研究における日本への野球普及の定義について言及しておく。「競技者の意識の中に、遊技から競技（スポーツ）としての認識が生まれた段階」（意識的側面）。また、「個々人ではなく、ある一定数の人数を揃えた組織が結成された段階」（組織的側面）の双方からその普及の動向を探る。尚、組織的側面については、競技としての認識の一般性への担保から体育協会などの統一的スポーツ組織を、本研究においての目的を学校教育との関連とすることから体育会・部活動などの学校体育組織を扱うこととする。

第一節　野球の日本への導入と普及

１．日本への野球導入の経緯

ベースボールの伝来については、大きく見れば２つのルートがあったと考えられている。1 つは、日本の学校等に招かれた外国人教師が学生に教え、さらにその学生が周囲に普及させていったルート、もう１つのルートはアメリカ留学帰りの青年が現地で覚えたベースボールを日本に持ち帰り、周囲に広めたというルートである[(1)]。

外国人教師が学生にベースボールを教えたのは 1872（明治 5）年頃、開成学校教師のホーレス・ウィルソンというアメリカ人が最初といわれている[(2)]。また、アメリカ留学からの帰国者では、1876 年、アメリカで鉄道技術を学んで帰国した平岡熙が友人たちにベースボールを伝えたことが知られている[(3)]。平岡は、翌 1877 年に新橋鉄道局に勤めると、その翌年に鉄道関係者や外国人技師を集めて、「新橋アスレチック倶楽部」を組織した[(4)]。十九世紀中期にアメリカで生まれたベースボールは、1872 年には日本に伝来していたが、

この「新橋アスレチック倶楽部」こそ、日本最初の組織的なベースボールチームであった[5]。

ベースボールはこの新橋倶楽部の影響を受けて都下の学校に広まっていった。実際には平岡の影響が大きく、平岡の評判を聞きつけた学生たちが本場直伝のベースボールに興味を持ち、習いに来ていた。まず 1882(明治 15)年に、駒場農学校（現・東京大学農学部）がベースボール部を創設し、1883 年には青山の東京英和学校（青山学院大学の前身）に、1884 年には虎ノ門の工部大学校（現・東京大学工学部）、神田一ツ橋の東京大学法学部（現・東京大学法学部）にもベースボール部が作られ、新橋倶楽部に挑戦していた。しかし、あまりに簡単に負かされてしまうので、各校は対等に試合をしようとせず、新橋倶楽部に教えを請うように変わっていった[6]。また、1885 年には築地の波羅大学（明治学院大学の前身）、三田の慶應義塾にもチームができた。この年、工部大学校が東京大学と合併するに至り、2 大学の予備生もまた合併され、東京大学予備門ベースボール会となった。そして翌 1886 年に、東京大学予備門が第一高等中学校（現・東京大学教養学部）と改称され、いわゆる「一高」のベースボール会が創設された[7]。

ここまで“野球”という言葉を使わず“ベースボール”という言葉を使ってきたわけだが、アメリカから入ってきた“ベースボール”を“野球”と初めて訳したのが中馬庚[8]である。一高時代は名 2 塁手であり、1893(明治 26)年に卒業する際に、ベースボール部史執筆を依頼された。そして 1895 年に『一高野球部史』が発行され、その中で“Ball in the field －野球”とした[9]。このようにして野球が学校、学生へと広まっていくわけだが、それは正規の授業として計画的に導入されたのではなかった[10]。正規の体育授業は兵式体操ぐらいで、大学当局は学生の体育活動に対し確固たる教育方針を持てないでいたところに学生の自主的活動が始まったのである[11]。また、スポーツを教えた外国人教師の動機についても対照的な２通りの説がある。1 つは、何らかの教育効果を考えてスポーツを教えたわけではなく、彼らは故国で楽しんでいたスポーツを日本でも楽しみたいために、周辺にスポーツを教えていったスポーツ好きの青年であったようで、学生たちも教師自らが楽しんでいるのを見たからこそ、関心をそそられ、ベースボールをやってみるようになったという説[12]と、もう 1 つは、日本人学生たちの体格が貧弱なのを心配し、どんなスポーツでもいいから、学生たちを教室の外に連れ出し、運動好きにさせ、外気に触れる機会を多くしようとしたといった説[13]である。もし後者の説が正しいとすれば、ウィルソンをはじめとした外国人教師たちが野球を学校に導入し指導したことは、教育的観点から見ても大きな影響を及ぼしたといえる。

次に、このように遊戯的な側面を強くして導入された野球が、「競技」としての認識を獲得していくまでの普及の動向を、内面・意識的側面と組織的側面の双方の視点から探ってみたい。

２．内面・意識的側面における競技としての野球

ここでは、人々の内面・意識的な側面において、野球が「競技」としての認識を得る要因についての考察を行う。

まず、明治期のスポーツ雑誌で紹介されているスポーツ信念、特には指導的立場にあった人々のそれを紹介し、スポーツ・運動への基本的な認識を確認したい。1897（明治 30）

年に初めて刊行された雑誌『運動界』の発行の趣意は以下のようにある。

> 智、徳、躰の三育は個人の教育に欠くべからざる三要素にして、其中の一の者を怠るときは、其他の二の者如何に周到に施さるゝも、遂に完全なる人物を得る能はざるは、何人もよく認むる所にして、今更事新しくこゝに贅説するの要なかるべし。此三育は實に鼎の足の如く、教育の據て立つ所にして、個人として、又国民として、其義務を盡すに足る有爲獨立の人物を得んと欲せば、過不及なく此三育を其人に施さずんば不可なり[14]。

「教育の據て立つ所」の１つとしてスポーツが捉えられており、当時まだ「智・徳」の教育に比べて十分に施されていなかった「躰」の教育の必要性が強調されている。尚、こういった学校教育との関わりについては後章にて詳述する。また、同誌では、あらゆるスポーツに関する規則、心得といったものを専門家の解説を掲載することで紹介し、広く普及、発達させていくことをその目的としている[15]。中でも野球に関する記述は多く、その大部分は技術、試合結果など実質的なものであるが、本節で注目すべき意識・心得といった点に関する記述もいくつかみることが出来る。1895 年から 1896 年にかけて一高の監督を務めた五來欣造は、

> 敢て技術の見るべきなく、敢て助言の取るべきなし。人は云ふ氏の斯技に對する一片の熱心は僅に撰手間に重きをなし得る一所以と蓋し「下手の横好き」なるものか[16]。

と語り、敢えて事細かに選手に対して助言を与えることを否定的に捉えている。そして、選手達が「下手の横好き」である可能性への否定からも、当時の選手たちの技術的な発達を望む熱心さや向上心をうかがうことが出来るだろう。また、選手間の団結心について触れている部分もあり、チームや仲間に対する意識も感じ取れる。スポーツ雑誌の記事の中ではあるが、野球に携わる人々の中に、少なからず競技的な認識の存在を確認出来る。

このような野球への認識を受け、これより、具体的な競技認識の獲得要因について探る。これまで見てきた事例は、何れも野球などのスポーツに対して肯定的なものであったが、野球に関しての認識は肯定的なものばかりではなく否定的なものもあった。しかし、「野球害毒論」、「野球排斥論」[17]などに代表される、野球に対する批判的な考え方が存在していることに野球への興味・熱意を見出すことができ、人々のそういった野球への興味が、「競技」としての野球を確立させた要因であると考える。それを物語る事例を以下に示す。

> 競技といふことの伴はない運動には興味といふものが少いから、如何に骨折つても盛になるものではない。今日各學校に行はれて居る柔道、撃剣、野球、庭球、蹴球、端艇、水泳などは何れも競技運動であるから盛んに学生に歓迎せられて居るのだ。然し運動に興味が加はつて來ると、茲に害毒の伴い來る恐れがあることを記憶せねばならぬ。若し弊害といふことを一々數へ來つならば、競技運動の中何れか其非難を免れ得るものがあらうか。然し弊害の伴ふ程の運動でなければ人々に興味を與ふることが出来ないのであるから、今日の學校は競技運動を許して居るのである[18]。

引用の『野球と学生』が出された 1911（明治 44）年当時、著者の安部磯雄は早稲田大学野球部長であった[19]。安部の競技としての「野球」に対する認識として、“人々の興味”という観点が用いられていることに注目したい。「競技運動の中何れか其非難を免れ得るものがあらうか」という部分から、人々に興味を与えることが出来る運動、つまり競技としての運動は批判的な意見も有するとの考えがうかがえる。加えて、「弊害」の伴わないものは人々に興味を与えることは出来ないと述べている。

安部は、同上『野球と学生』において、競技者の側に立った意見も述べている。

> 若し学校を代表する選手を設くる外に上記の如き方法を採るのであれば至極面白いことゝ思ふけれども、選手制度を廃して、此方法だけを用ゆることゝなれば、野球は決して盛んになるものではない。余は幾たびも選手制度を廃して野球の普及を謀つてみたいと思ふたけれども、長い經験は余が全く誤れるを示したのである。今日の競技運動には形式こそ異なれ、選手制度のないものはない。……如何なる運動家でも單に體育といふことだけで満足することは出來ない。彼等は何れもその技術に上達したいといふ熱烈なる希望を起すのである[20]。

これは、選手制度（現代でいうレギュラー選抜制）について語ったものである。ここでは、「今日の競技運動には形式こそ異なれ、選手制度のないものはない」とまで言い切っており、野球をはじめとするあらゆる競技運動において、選手制度というものが競技者の熱意や意欲を引き起こす一要因であることが述べられている。これを前述の“人々の興味”という観点から見れば、競技者に興味を与えるものとして捉えることができ、野球への競技として認識が存在していたと考えることが出来るだろう。

さらに、競技者の側に立った別の主張を近代スポーツ研究の中から紹介する。日下裕弘の『日本スポーツ文化の源流』（不昧堂出版、1996 年）では、スポーツの文化・制度の成立に関する研究が成されている。その中に、明治期から戦前期までのわが国の主なスポーツの担い手であった「エリート学生」達の競技者意識について書かれた部分があり、学業の余暇として導入された野球がどのようにしてその競技的側面を強くしていくのかについて、競技者たちの「夢中・上昇志向・競争意識」といった内的要因を中心に説明している。日下曰く、学問によって身を立てた学生達は「エリート」としての意識が強く、競争心や負けじ魂といったものを持っており、したがってスポーツの世界でも常にエリートでありたかった[21]。そのため、エリート学生達はスポーツを「遊びごと」として割り切って考えるようなことはしなかった[22]。

以上のような、一般、指導者、競技者といった視点や、複数の要因から考えても、確かに野球に対する内面・意識的な競技としての認識が存在していた。しかし、ここで述べたものはあくまでも個人的な見解が主であり、明確な年代の規定は困難である。そこで、次に述べる組織的側面における考察を通して、その目途をより確かなものにしたいと考える。

3．組織的側面における競技としての野球

本節では、前節における人々の野球に対する「競技」認識をより明確なものとするため、

具体的なスポーツ組織団体の成立を辿る。

日本における代表的なスポーツ統一組織として、大日本体育協会を取り上げる。同協会史において、その功績を「殆んど政府の助成指導を受けず、民間體育關係者の熱意によつて發達した」[23]ところにあるとしている。また、前掲『日本スポーツ文化の源流』において、日下は同協会を、日本における最初の「各競技団体を主体とし、わが国のスポーツ世界全体を統一する全国組織」[24]と位置付けている。スポーツの競技的発達に対する熱意や、スポーツ競技全体を統一する組織としての側面から、競技としての野球への認識について探りたい。

同協会は、1911（明治 44）年に創立された。創立の動機として、翌 1912 年にスウェーデンのストックホルムで開催される第 5 回オリンピック大会への参加を目指し、スポーツ競技全体をまとめる組織の必要性を認識したことが挙げられている[25]。また、初代の会長を務めた嘉納治五郎は、その趣意書において、国際オリンピック委員・国際オリンピック大会予選会長といった立場から、国民体育に対しての意見を述べている。

> 國民體育の事に至りては殆んど具案的の施設なく體育の事とし言へば僅かに學校體育の一部たる體操科及び課業外に秩序なき運動あるに過ぎず候[26]。

当時の嘉納の国際オリンピック委員という立場、そしてその嘉納が会長を務めていたという事実から、競技としてスポーツを捉えようとする組織的な構えが存在していたと言える。また、こういった背景要因を踏まえた、同協会創立当時の日本のスポーツ界及び野球の普及動向について、以下のような認識も見られた。

> 大日本體育協會が呱々の聲を擧げた明治四十四年頃の我が日本のスポーツ界は如何なる狀態にあつたであらうか。それでも當時既に野球、庭球、蹴球、陸上競技、水泳、漕艇、ホッケー、スキー及びスケート等の如き所謂る舶来のスポーツが或る程度には行はれてゐた。中にも野球と庭球とは相當に廣く普及し、從って其の技も幾分發達してゐた[27]。

近代スポーツ史研究において馴染みの深い競技が挙げられている中、野球の普及段階、技術的発達の優位がうかがえる。スポーツへの競技的認識への熱意と構えを持つ組織の見解であるだけに、既に野球は競技としての認識を得ていたと解釈できる。野球独自の自治組織成立は戦後を迎えてからとなるが、こういった要因からして、それを待たずして、競技認識を獲得したとするのが妥当であろう。

次節では、こういった競技認識の土台となった学校教育の中における、学生たちの野球活動を複数の実例から見ていくこととする。

第二節　学校教育における野球

１．一高の野球

第一節でも述べた通り、日本の野球はアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンが現在の東京大学の前身である第一大学区第一番中学で学生に教えたのが最初であった。ウィルソン

が野球を教えたこの学校は組織編制や名称の変更を重ねているが、現在の東大にある事には変わりない。つまり、日本の野球は当時からすでにそうであったエリート校の頂点から始まっていたのである[28]。

この野球導入から 10 年程経った 1883（明治 16）年には、駒場農学校、虎の門にあった工部大学校、一つ橋にあった東京大学法学部などにも野球チームが出来ていた。1885 年には青山学院の前身である東京英和学校や慶應義塾、明治学院の前身である波羅大学などの私大にもチームが出来ていた。その中でも、旧制第一高等学校（高等中学時代も含む）は、球界の盟主であった。これが俗にいう「一高時代」である。この間一高野球部は、近隣の諸学校に相次いで勝利をした。1890 年には一橋大学の前身である高等商業学校と試合をし、30 点もの大差で勝利を収めている[29]。またアメリカ人チーム横浜倶楽部と日本初の国際試合で勝利をするなど圧倒的な強さを誇っていた。すでにエリート校の学生として日本国家の将来を担う者としても気位があった上に、野球においての卓越もあり、一高は一段とその誇りを募らせた。

彼らの強さの理由の 1 つと言えるのが、施設面での充実である。駒場農学校や工部大学校、東京大学法学部などの野球チームは十分なグラウンドを持っている事が彼らの強みであった。一高は 1888（明治 21）年にチームが作られてから、1890 年に本郷に新築移転した際、球場の設備を整えた。自前の野球場を持っているところから絶対の優位にあって、日本野球の主人公の立場を確保した。また、この時期に一高の強打者である主将塩谷益次郎の縁続きにあたる堀尾次郎がミシガン大学の留学から帰ってきて、ミットやマスクを持ち帰った。服装に関しては、1890 年に行われた試合の時点では青い体操服を引き出して来て使っていたが、あまりに不体裁なので、それ以降からは色はまちまちであったが当時流行の編み上げシャツに半ズボン、黒のきゃはんに足袋はだしという軽装になった。また、一高の技術面においては、1896 年に行われた横浜倶楽部との試合が行われた頃から、攻撃と守備の双方において一大革新が行われている。攻撃においては、猛打一方であった打法を改良して科学的打撃術を加味した。また、守備においては、捕手以外はことごとく素手であったのを、初めてベースマンミットを使用する事になった。素手では投手の牽制球等の強球を受けるのが不便なので、技の発達を思えば素手よりミットを使用する事がその能率を向上させた。

しかし、一高は 1896 年に黄金時代の生徒を全部送り出すと、選手難に陥り不振の時代となった。一高の猛練習はここに始まったといえる。その時に投手となったのが独逸教会中学出身の守山恒太郎であった。投手としての責任を自覚した彼は、雨の日も風の日も自分の肩が悪かったので負けたのだと感じ、校庭の隅にあった理化学教室の煉瓦塀に 300 球ずつピッチングの稽古を続け、コントロールをつけ、その煉瓦一枚に穴をあけ、それは球界の逸話が残っている。腕が曲がれば桜の枝にぶら下がって心魂を傾注したという話を残っている。1898 年には試合前に 1 週間の「スプリング・パーティー」を、1899 年には 4 週間の「サンマー・パーティー」を行い、技術を補強している。これは合宿練習の始まりであると言える[30]。この結果、1900（明治 33）年に行われた第 6 回横浜外人との試合は 14 対 7 の大勝をし、再び一高の黄金時代となった。1902 年には一高野球部歌が出来たのだが、その中に「弥生ヶ岡の春の夕、ノックの響雲に入り、向ヶ台の冬の朝、霜を砕きて球競う、雨に嵐に練習に、苦心に積みし年月や」とあり、この一節からも一高の猛練習が伺

えるだろう。

しかし、一高の時代も次第に新興の勢力に圧倒され、1903 年には慶應義塾との試合に 13 対 10 でかろうじて勝つ事は出来たものの、翌年の試合では早大と慶應義塾に敗れた。これ以降、野球の花形は早慶の対立時代に移行していった。

野球が日本に導入された当時は、現在のルールとは異なっていた。キャッチャーの捕球は、ワンバウンドしたあとに素手で受け止めるというものであり、また、バッターは自分の好みの高さの投球をピッチャーに要求でき、ボールも 9 つまで認められていた。得点は両チームとも 20 点以上とるのが普通だった[31]。この様子から今の野球の様子とは大きく異なることがよくわかると思う。その当時の野球は現在と比べ、遊戯的な要素が強いといえるだろう。

一高は、1890 年に新ルールを採用する。バッターがボールの高さを要求するルールが廃止され、キャッチャーが投球をダイレクトで捕球するようになった。また、9 つまで認められていたボールが 5 つまでになった。また、同年、明治学院野球部との対校試合に一高は敗北する。この敗北を重く受け止めた野球部員たちは、一高の威厳を傷つけたことを恥じ、校友たちに謝罪した[32]。このころから野球部員たちは、対校試合は一高の威厳、名誉をかけているものだと認識するようになった。これらのルールの変化や対校試合への意識の変化から、それまでの遊戯的な野球とは徐々に変わっていったことがわかる。また、野球には、剣道や柔道などの武道に通じる部分があるとされた。伝統があり、肯定的にしかとられなかった武道に対して、野球は否定的にとられることが多かった。否定的な意見として、野球は学業の阻害、遠征などによる時間と金銭の浪費、疾病や障害、勝敗を重視するため公徳を害し、紛擾の原因となることが挙げられた[33]。野球に対する弾圧をよく表わした例がある。それは、東京朝日新聞の野球害毒キャンペーンである。野球害毒キャンペーンとは、1911（明治 44）年 8 月 20 日から合計 26 回にわたって東京朝日新聞が連載したものである。このなかで、各界著名人や教育家らが、野球の害毒をつぎつぎとならべたてた[34]。そういった批判に対して、野球には武道などと同じように精神的鍛錬などの効果があるというような主張がなされた。

野球は精神的な鍛錬になるという、そのような主張は、苦しいトレーニングや苦しい練習につながっていく。一高野球部は、その盟主たる地位を保持するため苦しきトレーニングを責任として選手に課していった。選手は、必勝をめざして自己鍛錬しなければならなくなったのである[35]。一高の練習ではないが、当時の野球の練習の様子を表わしている例がある。

> 鉛の芯の入った石のように硬いボールを捕手と一塁手以外は全員素手で強烈なノックを食った。それよりもつらいのが、１３、４メートルの距離で力いっぱい投げあう素手対素手のキャッチボールで、暖かいうちはまだいいが、大根畑に霜柱が立ち、越後境の連山の樹木が血で染まったようになるころには、紫色に腫れあがった左の手の平とムチャクチャに投げきったあとの右肩の針を刺すような痛みに眠れぬ夜が多かった[36]。

これは、長野県下の小学校での例である。そのレベルにまで野球というスポーツが自己

鍛錬につながるという意識が浸透していたのである。努力忍耐の修養野球が、武道との対等平等な価値を主張する根拠となっているのである[37]。

ただの遊戯であった野球が、学校のプライドや精神的修養といったものを通じて、その様子が大きく変わっていった。そして、それは多少の変化はあるものの、日本の野球に現在も受け継がれているといえるだろう。

２．慶應義塾、早稲田の野球

野球の普及動向に与えた学校教育の役割分析をするにあたって、慶應義塾大学及び早稲田大学野球部を実例として用いる。ここでは、慶應義塾に野球が導入された頃から早慶戦が始まり、中止になるまでの動向をまとめて、この期間での、野球の普及動向による学校教育的役割を明らかにしていく。

慶應義塾において初めて野球が試みられたのは 1886（明治 19）年頃のことで、村尾次郎らが、新橋アスレチック倶楽部を組織した平岡から野球を教わったことが始まりとされている[38]。また、当時のアメリカ人語学教師のストーマーから野球を教わる塾生も出てきた。その頃の塾内では、「キング殺し」[39]という遊びが流行していて、この遊びを通じて「ボール(球)を投げること」に慣れ親しんでいたことから、塾生はすんなりと野球をすることが出来たと考えられる[40]。そして、青山英和学校と初めて試合を行い、その他にも高等商業学校や明治学院と数回試合を行っている。1888 年には、アメリカから帰国した岩田伸太郎が野球を推奨し、「三田ベースボール倶楽部」が発足した[41]。

慶應義塾野球部の歴史は、正式には 1892（明治 25）年の体育会創設に始まる。同会は、福沢捨次郎[42]が会長となり統括をし、塾生の体育を奨励する目的として、剣道、柔道、弓術、野球、端艇、水泳、兵式体操の 7 部門を設置した。つまり、各自で費用を出さずに活動をすることが出来るようになった。当時の野球部の状況を選手であった平沼亮平が語っていて、グラウンドは塾内で使用していた場所が非常に細長く、2 塁と本塁の距離が長いものであった。また、道具は練習用のボールは修理して使い回していて、バットも頑丈な木で出来ていたので取り替えずに済んでいた。その結果、慶應義塾体育会からもらう毎月 4 円の部費が余り、それを年末度に行われる卒業選手の送別会に当てていた[43]。

その後、同野球部は 2 つの国内遠征を行う。1 つ目は、1901（明治 34）年に第一回修技旅行（東海遠征）であり、これが全国で初の国内遠征となった。この遠征の費用は、当時の体育会から貰っていた 12,3 銭ほどでは足りなかった[44]。そこで、体育会長の福沢捨次郎や塾生出身の政治家や実業家へ費用をもらい、最終的には塾生同士で費用を出し合って遠征を行った[45]。2 回目の遠征は、1903 年の第二回修技旅行（関西遠征）である。この遠征について、当時の主将であった宮原清によれば、「名誉ある慶應義塾の野球部のために凡てを純化一致すべし」という精神を重んじ、野球部の一致団結を目指し、日々の行動は他の運動選手の模範となるように努めなければならないとしている[46]。また、「戦えば必ず勝つ、不幸にして敗れんか共に悔、純情涙を以て奮起再起を誓う」という心構えを中心に据えて野球部の団結を完成させたことが、1903 年の関西遠征を 6 戦 6 勝と大成功で終わることができ、その後の早慶戦の進展にも繋がったとしている[47]。

同野球部は、第 1 回と 2 回遠征を連戦連勝で終え大成功したこと、また、その 2 つの遠征の間で一高からも勝利している。さらに、第 2 回遠征のころには、体育会費が 50 銭で

授業料と一緒に納めるようになり、野球部の予算は 300 円位で柔道部、端艇部に次ぐ金額であった[48]。予算の割り当てからも慶應義塾野球部の勢いが増していたのだろうか。一方で、1901 年に早稲田大学の前身である東京専門学校に野球チームがつくられる。部長には安部磯雄[49]が就任し、翌年の早稲田大学創立記念の野球大会にて、彼は「卿等若し宜しく日本の強チーム（慶應義塾、一高、学習院の意。引用者註）に打ち勝たんには、本場所の米国に遠征を快諾せんと約されぬ」[50]と選手に檄を飛ばしていた。

続いて、早慶戦について述べていく。早慶戦の申し出は早稲田側からであった。それに対し、慶應義塾はすぐさま挑戦を受けると返事を送った。その理由は、早稲田の野球部はできて間もない新参者で、軽く一蹴して年季の違いを見せつけてやろうという自負心からであった[51]。そして、1903（明治 36）年 11 月 21 日、「早慶戦第一戦」が行われた。会場は、慶應義塾綱町球場[52]で、慶應義塾の部員たちは朝から入念にグラウンドを整備し、早稲田の到着を待ち受けた。一方、早稲田の選手と応援学生は早稲田から三田までの約 12 キロの距離を 3 時間かけて歩いてきて、用具を運ぶマネジャーだけが人力車を使って三田に到着した[53]。

この「早慶戦第一戦」の当時の盛り上がりは、現在のような早慶戦の華々しさとは違い、極めて微温的な雰囲気の中に行われた 1 試合で、一般世間の視聴を惹くこともなく、単なる体育会の一部の試合という認識で、両校とも対校意識は燃えていなかった[54]。また、新聞の報道もなく、わずかに当時の時事新報[55]に小さな記事として載せられているだけであった。その理由として考えられるのが、世間一般の野球に関する常識は、「まず一高ありき」「野球といえば一高」に凝り固まっていたことである[56]。第一戦を終えた両校にも、「一高を破らない限り、日本の野球界の覇者にはなれない」という思いがあった。そして、翌年の 1904 年に、春の対抗スケジュールが発表され、6 月 1 日に早大対一高、2 日に慶應義塾対一高、4 日に慶應義塾対早稲田の 3 試合が行われることになった。この対抗試合で、早慶双方はついに一高を破ることができた。そして、この連日にわたる一高の敗戦によって、4 日の「早慶戦第二戦」は、事実上この年の覇者を決めるようなものになっていった。この試合には、早慶戦第一戦の記事すら載せなかった東京日日新聞や東京朝日新聞が慶應義塾綱町球場へ取材記者を派遣した[57]。したがって、一高を倒すことはそれほど注目されるべきことだったのではないだろうか。試合の結果は早稲田が勝利し、さらに、同年 10 月の対抗試合も早稲田が勝利を収めている。

その後、1905（明治 38）年 4 月、早大野球部は安部磯雄の創立時の約束通り、日本初のアメリカ遠征へと出発した。この遠征の壮行試合として、慶應義塾と早稲田は再び試合を行い、慶應義塾が勝利している。早稲田がアメリカから帰国し、同年 10 月、早慶戦がおこなわれた。この試合から 3 戦制で行われるようになった。その理由は、早稲田が「アメリカでは三回試合をして二勝したチームを勝者としている。一つ早慶戦も毎年この方式で試合しようではないか」[58]と提案したからである。この試合で観衆の注目を集めたのが、早稲田のアメリカ遠征後の変貌であった。これまでの武骨と打ってかわって、新調したユニホームにはやや赤みがかったうす茶地に海老茶色の WASEDA のマーク、アンダーシャツにスパイクシューズ、黒色のグローブというスタイルであった[59]。また、投球スタイルも今日ではワインドアップと呼ばれるボディ・スイング投法が注目を浴びた。そして、1 勝 1 敗で迎えた第三戦では、応援合戦も盛んになった。慶應義塾側は、8 回に突然上着を

脱ぎ、「KO」の 2 文字を白くスタンドに浮き出させた[60]。一方、早稲田側も WU と記した海老茶色の小旗数 100 本をもっての応援と応援歌を歌い出した[61]。

1906（明治 39）年の 4 月には、京都の第三高等学校野球部が初めて上京し、一高と三高の定期戦が始まるようになった。三高は、その際に慶應義塾と早稲田とも試合を行った。その結果は、三高の 3 連敗で終わった。そして、5 月になると、早慶両校が一高に挑戦することになり、一高は 1904 年につづいて早慶に敗れてしまった。さらに、同年の 10 月に早慶戦が行われた。しかし、この早慶戦を最後に 1925（大正 14）年まで中止となってしまう。中止に至った経緯は、試合前の球場を占領しようとの応援団の徹夜騒ぎや警察からの忠告などが多くあり、不測の事態が起こることを危ぶみ万一のことが起こりそうな状態では教育者の職責上、中止を命ずるほかないとの見地から中止を取り決めた[62]。

では、当時の応援の過熱ぶりはどのようなものであったか。実は、応援学生同士の衝突を未然に防ぐために、両校の主将は話し合いを行っていて、「応援団の数を双方 250 人とする」と約束を結んでいた[63]。そして、第一戦を迎えた。当時の時事新報の記事で、観客の数は、最大でも 2 万人収容が精一杯である戸塚球場に 4 万人が殺到したと記されている[64]。主将同士の約束どおりに、慶應義塾は三田から応援学生を 250 人にしてやってきたのに対して、早稲田の応援席には、500 人もの応援学生が来ていが、第一戦は慶應義塾が勝利を収めたので、そこまで大きなこじれ合いには至らなかった[65]。しかし、試合終了後、大隈重信邸にさしかかったところで、その目の前で「慶應、万歳！」と叫んで勝利の余韻に浸っていた。このことは、すぐに早稲田の学生たちにも伝わってしまった[66]。このようなことがあり、第二戦が行われる前に慶應義塾が「慶應の応援人数を 500 人にして、早稲田を 250 人にしよう」と提案し、早稲田もそれを一応了承した。ところが、当日になると、早稲田側には約 800 人もの学生がやってきていた。早稲田には慶應義塾学生が大隈邸の前で「万歳」を叫んだことに恨みがあり、慶應義塾には 2 度も約束を破った早稲田への憤りがあった。そんな中、第二戦が行われて早稲田が勝利を収めた。しかも、試合の後、早稲田の学生たちは慶應義塾への仕返しでもあるかのように、福澤諭吉邸前で「早稲田、万歳！」と叫んでみせた[67]。

以上のように、第一、二戦を通して応援学生が過熱していったことが分かる。第三戦になると、さらに両校学生の動きが過激になった。慶應義塾側は、前日から学内に泊り込んで早朝から応援席を占拠しようとしたり、柔道着を着て試合後の乱闘に備えるも者も出てきていたという[68]。このような状況に対して、とうとう警察が動き出す始末になってしまった。そして、試合当日の朝に、当時の塾長であった鎌田栄吉[69]と早稲田の大隈重信が試合中止に関する面談をし、中止が決定された。鎌田は、中止に至った理由を「我慶應義塾は五十年來福沢先生に育てられたものにして知育のみならず、徳育躰育に於いても完全を期せんとする家庭學校、即ち獨立自尊的人格を養成すべきところなり」[70]としている。つまり、慶應義塾としては応援が過熱する中で、独立自尊からはずれ、騒ぎに付和同雷して、自らの気品をそこねる行為をいましめたのであった[71]。

もちろん、選手達は試合の実施を要請している。当時の早大の押川主将は慶應義塾の桜井主将をたずねて応援者は 1 人もこれを場内に入れることなくして試合を行おうと協議したが、慶應義塾側の中止の意志がひるがえることはなかった[72]。さらに早慶戦が中止と決まった後も、学生たちの不満はつのるばかりで、寄宿生たちは塾長を非難していた[73]。

しかし、それでも慶應義塾の態度は変わることなく、1925（大正 14）年まで早慶戦は中止されることになる。

むすび――学校教育の役割分析

学校教育において運動することの目的とは何だったのだろうか。まずは、それを良く表した以下の記述から見ていきたい。

> 文に偏するものは文弱に流れ、運動に熱するものは、ややもすれば粗暴放逸に陥る、之れ現今の青年學生社會に於ける通弊たり、文事あるものは必ず武備ありとは孔聖の至言にして、文武相待て併行せざる可からざるは、児童走卒と雖も古より之を知る……体育は知育の根底なり、智育の重んずべきと同時に体育の重んずべきは人既に之を知る……運動は身体を鍛錬し士氣を發輝し、事に當りて百折不撓の勇氣と之れに堪ゆるの体格とを修養すれば即ち足る[74]。

運動することは身体の鍛練といった点において重要であったといえる。学問だけといった状況、または運動だけといった状況は好ましくなく、その両者のバランスがうまくとれていることを好ましいと考えていたようだ。それらは現在でも似たようなことが言われているので我々にも理解しやすいことである。現在で言えば、例えば、部活動の勝利至上主義体制の問題や部活動の過熱から生じる練習過多、学業の問題などが挙げられる[75]。以上のような運動をする目的は、かなり理想的な状態であるといえるだろう。前節でも触れたとおり、人々はその目的以上に野球に熱中していった。野球は、学校教育において期待される運動以上のものを担おうとしていた。

野球はベースボールという外来文化として日本に取り入れられ、その後、野球という日本独自のものとして普及を見せた。日本の近代化の中で、外来文化を取り入れながら日本独自のものとして鋳なおそうとする動きは常にあったが、野球もその中の 1 つである。そしてこの日本の野球は、導入された一高において、エリート的国家主義を身体化する文化として形成されていった。当時は遊戯として取り入れられたベースボールも、次第にその楽しさは私的レベルに閉じ込められ、公的レベルでは野球は楽しみというより「己にうち克つ自虐的な苦難」[76]が求められた。一高式野球では、勝利至上主義、精神主義、集団主義が重視されたのである。明治末期の野球界は、一高全盛時代から地方の中学校、商業学校、私立大学等に普及拡大を見せ、野球は大衆化していった。

既に述べた様に、野球界では一高時代は終わりを告げたが、野球への注目は下がるどころか、早慶時代に入ってからはその過激化のあまり、試合が中止されるほどであった。早稲田と慶應義塾においても早慶戦が過熱になったのには、学生たちにエリート同士の「学校同士の覇権争い」というライバル意識が出てきたからではないだろうか。それは、学校側にとっても都合の良いことであって、学校側が野球部の活動を認可したのは、「野球で勝つことが学校の地位やその学生たちの優秀さを表す」といった風潮を生みだそうとしたからではないだろうか。そのため、慶應義塾側が早慶戦の開催を「学校教育にそぐわない」として中止を決めたのも、世間から塾生の評判が悪くなることが学校側の不利益になると考えたからであろう。以上のことをまとめると、学校側が野球部の活動を認めたいたのは、

「健全な野球部が日本一になることで、学生が優秀であるということを示そうとした」からではないだろうか。つまり、学校教育において野球は「健全な精神を育むため」ではなく、学校の地位や学生間のエリート意識を高めるために都合が良かったということになる。

このような野球の普及の中で、野球の技術は一高や早慶の学生などによって教えられたのであるが、その中で受け継がれたのは野球の技術だけでなく、「一高式野球の精神」も含まれていた。また、一高の学生が、卒業後指導者となり、全国に展開していったということも「一高式野球の精神」が広まっていった要因といえる。

野球は、単に運動のなかの１つという立場から、一高や早慶の時代を経たことで徐々にその意味合いを変えていった。野球は身体的な鍛錬のみにとどまらず、精神的な鍛錬にもつながるとされたことで、武道と同じような効果が期待できるとして、その価値を高めていった。そのような野球のあり方は、言い換えれば、学校教育にとって非常に都合の良いものであった。野球は、勝利至上主義や精神主義、集団主義といったことを教え込むうってつけの教材だったといえる。本来の運動することの目的からは大きく異なっているが、そういった点で、野球は非常に便利だったといえる。

外国から取り入れられ、ただの遊戯として人々に楽しまれていた野球が、エリートたちの学校のなかで徐々に変化していった。ルールが変化していくことで以前よりもプレイする難易度が増し、試合をするためには、ある程度上達しなければ難しい状況になった。ただの遊びという感覚ではなくなったといえるだろう。また、野球が普及していくにつれ、対外試合も盛んに行なわれるようになった。対外試合を行うとき、選手たちは、自分たちの学校の誇りや名誉といったものを意識するようになった。野球界をリードしていく存在だった一高、慶應義塾、早稲田にとってその思いは他校に比べ、より強いものだっただろう。現在でも伝統校や強豪校といった呼び方が存在することから考えても、野球と学校との結びつきは大きなものがあるといえる。絶対に負けられないという思いや学校の名に傷をつけられないといった思いは少なからずあっただろう。ましてエリートたちの集まりにおいて、それらの気持ちがなかったはずがない。それらの要因が、ただの遊戯だった野球の様子を変化させていくことになった。厳しい練習が行われるようになり、とても遊戯とは呼べないものになった。

〔註〕

（１）有山輝雄『甲子園野球と日本人』吉川弘文館、1997年、17頁。
（２）同上。
（３）同上、18頁。
（４）菅野真二『ニッポン野球の青春』大修館書店、2003年、2頁。
（５）同上。
（６）同上、2-3頁。
（７）同上、3頁。
（８）読み方は、「財団法人野球体育博物館・殿堂入りリスト」によると「ちゅうま かのえ」。
（９）城井睦夫『″野球″の名付け親 中馬庚伝』ベースボール・マガジン社、1988年、23頁。
（10）1876年に開成学校に入り、1883年に東京大学を卒業した三宅雪嶺は、「当時体育というやう

な語がなく、言へば言語のまゝにフィジカル・エデュケーションといひ」、文部省等も外国の例によって身体の健康を重視していたが、「如何にすべきかが判明せず、へいたい上がりにオイチニイで教へさせることが一般に行はれた」と述べている。

(11) 前掲『甲子園野球と日本人』、20頁。

(12) 同上、20-21頁。

(13) 佐山和夫『ベースボールと日本野球』中公新書、1998年、50頁。

(14) 日本体育大学体育史研究室監修『運動界』第1巻第1號、大空社、1986年、1頁。

(15) 同上、2頁。

(16) 同上、5頁。

(17) 野球害毒論」や「野球排斥論」といった用語は、1911年に東京朝日新聞が「野球とその害毒」と題して、教育者や識者の意見を掲載したことが起こりとされる。

(18) 安部磯雄・押川春浪『野球と学生』広文堂書店、1911年、3頁。

(19) 飛田忠順『早稲田大学野球部百年史〈上巻〉』早稲田大学野球部、1950年、40頁。

(20) 前掲『野球と学生』、33 - 34頁。

(21) 日下裕弘『日本スポーツ文化の源流』不昧堂出版、1996年、212頁。

(22) 同上。

(23) 大日本體育協會編『大日本體育協會史 補遺』第一書房、1983年、1頁。

(24) 前掲『日本スポーツ文化の源流』、192頁。

(25) 前掲『大日本體育協會史 補遺』、1頁。

(26) 同上、2頁。

(27) 大日本體育協會編『大日本體育協會史 上巻』第一書房、1983年、1頁。

(28) 前掲『ベースボールと日本野球』、54頁。

(29) 同上、55頁。

(30) 前掲『日本スポーツ文化の源流』、88頁。

(31) 坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001年、26頁。

(32) 同上、36頁。

(33) 同上、137頁。

(34) 同上、138頁。

(35) 同上、158頁。

(36) 同上、170頁。

(37) 同上、178頁。

(38) 慶應義塾野球部史編集委員会編『應義塾野球部史』上巻、慶應義塾体育会野球部、1989年、1頁。なお、塾生で初めて野球を試みたとされる村尾次郎は、新橋アスレチック倶楽部を創設した平岡と知り合いだったことから野球を教わることが出来たのであった。

(39) 当時、塾内で流行していた遊びで、これを通じて「球を投げる」ことに慣れていた。一人の大将を球除けの竹棒を持って取り巻いて守る。敵は、キングに向かって球を投げ、キングは大将の旗印を持って防ぐ遊びであった（同上、2頁）。

(40) 同上、2頁。

(41) 同上、1頁。

(42) 1865年～1926年。時事新報社社長、慶應義塾体育会初代会長。福沢諭吉の次男（慶應義塾史事典編集会偏『慶應義塾史事典』、慶應義塾出版会、2008年、733頁）。

(43) 前掲『應義塾野球部史』上巻、3頁。

(44) 同上、『應義塾野球部史』上巻、6頁。

(45) 同上。

(46) 同上、13頁。
(47) 同上。
(48) 同上。
(49) 早稲田大学野球部初代部長。世界的な視野から野球を学ぶことを目標とし、日本野球チームとして初めての米国遠征を行う。創業当初から「知識は学問から、人格はスポーツから」という「文武両道」の精神を掲げていた（早稲田大学野球部ホームページ「早稲田大学野球部について」)。
(50) 庄野義信『六大學野球全集 上巻』改造社、1931年、28頁。
(51) 富永俊治『早慶戦百年 激闘と熱狂の記憶』講談社、2003年、10頁。
(52) 同上、12頁。それまで練習していた同じ三田にある稲荷山グラウンドが長方形で野球場の体を成していなかったので、大学側が買い取っていた峰須賀候の敷地を整地して同年に完成させた。
(53) 同上、12-13頁。
(54) 前掲『慶應義塾野球部史』上巻、12頁。
(55) 福沢諭吉が1882年に創刊した日刊新聞（前掲『慶應義塾事典』、41頁)。
(56) 前掲『早慶戦百年　激闘と熱狂の記憶』、18-19頁。
(57) 同上、22頁。
(58) 島田明『明治44年慶応野球部 アメリカ横断実記』ベースボール・マガジン社、1995年、59頁。
(59) 同上。
(60) 同上、61頁。
(61) 同上、62頁。
(62) 前掲『慶應義塾野球部史』上巻、27頁。
(63) 前掲『早慶戦百年 激闘と熱狂の記憶』、26-27頁。
(64) 同上。
(65) 同上、28頁。
(66) 同上。
(67) 同上、29頁。
(68) 同上。
(69) 1857年～1934年。1898年4月塾長に就任。在任期間は歴代塾長の中で最も長い。海外留学生派遣開始、商工学校や医学科(医学部の前身)の設立、慶應義塾創立50年記念式挙行などを手がけた（前掲『慶應義塾史事典』、645頁)。
(70) 慶應義塾編纂『慶應義塾百年史 中巻(前)』慶應義塾、1960年、429頁。
(71) 前掲『明治44年慶応野球部 アメリカ横断実記』、77頁。
(72) 前掲『慶應義塾野球部史』上巻、27頁。
(73) 同上、26頁。
(74) 前掲『運動界』第4巻第1號、3-5頁。
(75) 杉本厚夫編『体育教育を学ぶ人のために』世界思想社、2001年、262頁。
(76) 前掲『甲子園野球と日本人』、31頁。

第二章　ラグビーフットボール

はじめに――研究動機と目的・方法

2011（平成 23）年、ニュージーランドにおいてラグビーワールドカップが開催され、下馬評通り、地元ニュージーランド代表オールブラックスが圧倒的な強さで優勝し、幕を閉じた。ラグビーワールドカップはサッカーワールドカップ、夏季オリンピックに次いで 3 番目に規模の大きなスポーツイベントとして知られている[(1)]。地域は限定されてはいるものの、ラグビーフットボール[(2)]（以下、ラグビーと表記する）は世界的に普及しているスポーツの一つといって差し支えないだろう。本大会において日本代表は優勝チームであるニュージーランド代表オールブラックスと予選リーグで対戦し、83 対 7[(3)]と大敗を喫した。今大会は日本ラグビーの競技レベルが国際的なトップチームと比べると大きな差があることを露呈する結果となった。2019（平成 31）年には日本でのラグビーワールドカップ開催が決定しており、競技レベルの強化が急がれるのは明らかである。日本におけるラグビーの普及という観点で見るなら、実はニュージーランドと日本における競技人口はほとんど変わらず、日本は世界で 5 番目に競技人口が多い国なのである[(4)]。国全体の人口が大きく異なる為、比較しても意味がないという議論もあるだろうが、国技がラグビーであるニュージーランドと競技人口がそれほど変わらないのだから、今日、ラグビーは日本において十分に普及していると言って差し支えないだろう。その普及の初期段階において重要な役割を果たしたのが、慶應義塾を始めとする教育機関であった。

日本ラグビーフットボールの普及の歴史は、1899（明治 32）年からはじまる。この年、慶應義塾の英語教師として新任したイギリス人、E・B・クラーク（Edward Bramwell Clarke）が、ケンブリッジ大学でみずから体験したラグビー競技を、同じ頃に同大学でやはりラグビー・プレーヤーであった田中銀之助の協力のもとに、塾生に直接指導したのが、その最初である[(5)]。

このようにラグビーを初めて日本に紹介、導入したのが高等教育機関であることから、本研究ではラグビーの普及における学校教育（特に高等教育機関）の果たした役割の重要性を認め、その関係性（ラグビーの普及と学校教育の関係性）について研究を進めたい。その前提として、「（特定の）スポーツ文化の成立」と学校教育との関わりを明らかにする上で、スポーツの「普及」をどのような状態とみなすかについて、ここで指摘しておく必要がある。スポーツの「普及」は、当然のことながら、まず第一にそれを実際に行う人々が現れ、練習や合宿、試合等が行なわれなければならない。スポーツを担う人々の集団として社会人集団（非学生）も考えられるが、本研究ではスポーツの普及と学校教育との関係を明らかにすることを目的としているため、学校における集団の取り組みに特に着目する。またその学校とは、高等教育段階に限定する。各学校の OB や中等教育段階の動きについても、スポーツの「普及」を追っていく中で必要に応じ取り上げていくが、本研究において記述する動向の主眼は、高等教育段階の学校及びその学生たちの動きへと向けられる。しかし、スポーツの「普及」を述べるためには、実際に全国各地でそのスポーツが行われているという事実を挙げるだけでは不十分であり、各地の学校でのスポーツの取り組みを全国的に取りまとめる統括機関の成立も重要な要素と考えられる。なぜならそうした統括機関の成

立以前の各学校の交流はいかに地域をまたぐものであろうと、個々の単発的なあるいは自発的な取り組みに過ぎず、管理され統一された取り組みとは言い難い側面があるからである。

したがって、スポーツの「普及」とはそのスポーツを担う学生（学校）の規模の拡大、（地域をまたいだ）試合・大会の実施といった実質的側面と、そうした各方面のスポーツの取り組みを一律にまとめ管理・運営する連盟や協会の成立といった形式的側面の両方を考慮しなければならない。それでは、本研究で取り上げるスポーツであるラグビーでは具体的にどのような状態を「普及」とみなすことができるか。

前述のように 1899（明治 32）年に初めて慶應義塾にラグビーが導入されるが、それ以来外国人チームとの試合を経験しつつ、徐々にラグビーに取り組む学生の規模が拡大していく。最初は関西（京都の第三高等学校、同志社など）を中心に広まり、慶應義塾との交流が増えていき、1918（大正 7）年に早稲田でラグビー部が創設される。関東における蹴球部として 2 番目の成立である。これを皮切りに関西のみならず関東の各学校においてラグビーが部活として行なわれるようになる。各学校単位の取り組みではあるものの、関東内・関西内及び東西の学校同士の定期戦も頻繁に行われるようになり、また地域的な取り組みとして 1918（大正 7）年に「第 1 回日本フートボール大会」が開催[6]されるなど活発に試合が実施されていった。一方で、そうした実際面の取り組みを支える機関・機構の基礎も徐々に生まれていく。1919 年には主に慶應義塾 OB で構成される「関西ラグビークラブ」が、続いて 1920 年には関東の OB 倶楽部として「A.J.R.A（All Japan Rugby Association）」が結成される。これらは「みずから楽しみ且指導することに目的があり、最初からその名称を示唆するような、全国統御の意志はもっていなかった」[7]ものの、これら 2 つの地域的組織が後に地域的統括機関として、それぞれ「西部ラグビー蹴球協会」（1925 年設立）および「関東ラグビー蹴球協会」（1924 年設立）へと発展的に改組されていくのである。そして 1926（大正 15）年 11 月、両協会の理事合同会議で、全国的な統一機関として「日本ラグビー蹴球協会」が設立される。1928（昭和 3）年には同協会の主催による初めての東西対抗戦[8]が実施されることになった。さらに同年、「関東ラグビー蹴球協会」の主催により現在の関東大学ラグビー対抗戦の前身となる五大学対抗戦がスタートした[9]。

こうした動向を踏まえ、ラグビーというスポーツの「普及」の区切りを、本研究では 1926 年の「日本ラグビー蹴球協会」の設立および 1928 年同協会主催「第 1 回東西対抗戦」のスタート、「関東ラグビー蹴球協会」の主催による「五大学対抗戦」のスタートにみることにする。「日本ラグビー蹴球協会」の設立は全国統制機関の整備を意味し、「第 1 回東西対抗戦」はそれに基づく実際的活動の象徴と捉えることができるからである。また、「関東ラグビー蹴球協会」の主催による「五大学対抗戦」のスタートも同等に考えることが出来よう。なお 1927（昭和 2）年は、1911（明治 44）年の第三高等学校との対戦以降無敗を誇っていた慶應義塾がついに早稲田と京都帝国大学に敗れた年である。「対早大といい対京大といい、ともに勝敗の予断を許さぬ接戦であって、けっして慶應義塾の下降を示したものではなかった」[10]のであり、「このような経過こそは、まさに進歩の典型といわねばなるまい」[11]。特定の一校のみにおいてラグビーが独占的に実施されていた時代から、全国的に各学校でラグビーが行なわれるようになりレベルが向上したことを示す良い例で

あろう。したがって、本研究では 1899（明治 32）年の慶應義塾のラグビー導入から 1926（大正 15）～ 1928（昭和 3）年の動向を取り上げ、併せてその普及動向における学校教育の関わりを見ていく。なお、第一章ではイギリスにおけるラグビーの発祥について焦点を当て考察をする。ラグビーがイギリスで普及する段階でどの様な歴史的背景、思想的背景があったのかを明らかにし、日本のラグビー普及における思想的背景（たとえばフェアプレー精神）との関係性を明らかにしたい。

第一節　ラグビーの発祥――特にイギリスに焦点を当てて

フットボールそれ自体の起源には諸説あるものの、その真実は未だ解明されていない。しかしながら、多くの文献において、ラグビーが英国でフットボールから派生し、普及していったものであることは間違いないと主張されているため、ラグビーの源流をフットボールと捉えるとき、英国におけるフットボールの歴史をたどることには、妥当性があると言える。ラグビーの発祥を語る上で、その起源であるフットボールの歴史を振り返るということと切っても切り離せない、非常に重要なことである。本章では、原始のフットボールとは一体どういったものであったのか、そして、どのようにしてラグビーに派生し、今日の形に変化していったのかを探って行きたい。なお、年号の表記は、便宜上この節内のみ西暦とした。

フットボールの起源には本当に様々な説がある。ギリシャのゲーム、エピスキロをから出たものと考える学者もいれば、ローマのゲーム、ハルパストウムに由来するものと主張する学者もいる[12]。ほかにも、フットボールはケルト人のゲームから発達した、アングロ・サクソンやノルマン系の祖先によってもたらされた、またあるいは、イギリス諸島の土着民族が侵入軍の撃破を祝うために始めた儀式から発達した、さらには、古代の豊作祈願と関連しているとされる[13]など、議論の内容は多岐にわたっている。現在、「フットボール」というゲームが 14 世紀以降の英国でプレイされていたというはっきりとした証拠はなく、現在も議論が続いているため、フットボールそれ自身の起源には重きを置かず、フットボールがラグビーへと派生していく過程を、資料の存在する 14 世紀以降に焦点を当てて探っていきたい。

14 世紀、書物における最初のフットボールという言葉の記載は、王や官憲が発令した、禁止令の一覧に見受けられる[14]。この禁止令は 1314 年にエドワード 2 世によって発令されてから、31 回に渡り発令されている。理由としては、王宮所属の兵士たちが、弓の鍛錬よりも、娯楽であったフットボールを優先させてしまったことに対しる警告であったと推論されている。また、1608 年にマンチェスターで発令された命令では、「わが町マンチェスターにはひどい無秩序が横行しており、この街の街路上でフットボールをやるという不法の挙に出て、多くの人家のガラスを壊したり、無法なふるまいをする一段の下劣で狂った人々の為に、毎年ガラス窓が壊されて台無しになっている」[15]と言及されていることから、当時のフットボールの人気、影響力、そして、いかに現代の形からかけ離れていたかということを察することができるだろう。

また、当時のフットボールの形態についても触れなければならないだろう。前述の禁止令の内容を見ればように、当時フットボールは、今日のサッカー、ラグビーとはかけ離れた内容であった。民族スポーツとして各地方の因習や祭事に基づいた独自のルールがあっ

たため、統一ルール等存在しなかった。イギリス中部で広く行われた、「マスフットボール」[16]を例にあげよう。当時行われていた「マスフットボール」は、足だけでボールを扱うのではなく、時には数百人の住民が二つのチームに分かれて、特定の地域全体を競技場にし、互いに一個のボールを奪い合いながら、道路を駆け回り、農地や林を横切り、垣根を越え、小川を渡る等して、決められたゴールにボールを運んでいくものであったとされている[17]。そのルールも、競技開始の場所や方法、ゴールの位置、武器の携行禁止などを決めた極めて簡単なものであり、同じ地域に住む者なら子供のころから見なれた、誰でもよく知っているものであった。後代の人は、この「マスフットボール」を、「ストリートフットボール」、あるいは「モッブ（暴民）フットボールボール」とも呼んだ[18]。フットボールをラグビーの源流と考える時、このような粗野な民族スポーツと、今日の、厳格なルールのもと行なわれるラグビーとの共通項を見出すことは非常に困難である。では、この後、どのような経緯で今日の形をなすようになっていったのであろうか。そこには、民衆の近代化による民族スポーツの衰退、場所が学校という教育現場に移ったこと、そして、対抗戦の始まりによる統一ルールの成立、という三つの要素がからんでくる。以下に順に説明と考察を加えていきたい。

まず、民衆の近代化による民族スポーツの衰退についてである。英国の慈善実業家であったジョゼフ・ストラットは、1801 年に「フットボールというゲームは、一般大衆の間で大変流行していたが、近年は評判が悪くなってしまい、ほとんど行われなくなった」[19]と述べている。これには、産業革命により、民衆の労働時間が増加し、娯楽に時間が割けなくなっていったこと、また、フットボールを行うような空き地そのものが減っていったことが理由として挙げられる[20]。また、英国の社会学者、ハロルド・パーキンはこう述べている。「1780 年と 1850 年の間に英国人は、世界で最も攻撃的で下品、乱暴で無遠慮、騒々しく残忍かつ血に飢えた国民では無くなり、最も抑制された、丁重で規律正しく、柔和で慎み深い偽善的な国民になった」[21]と。民衆の労働環境、社会的地位を大きく変容させた産業革命は、無秩序で粗野な民族スポーツとしてのフットボールと相いれなかったのではないだろうか。このような社会背景の中で、フットボールも近代化を迎えていくこととなる。

次に、場所が学校という教育現場に移ったことに言及しよう。産業革命の影響で、“近代的な市民”が増え、民衆の間でのフットボールが衰退していった一方で、学校（パブリックスクール）においては、その後も盛んにプレイされていたとされる[22]。地域に決められたルールは、学校ごとのルールという形に変容していったのである。パブリックスクールで盛んにフットボールが行われた要素の一つとして考えられるのが、学校内における階級社会である。そもそも、英国のパブリックスクールは「貧乏人の子弟」の教育の為に、富裕な慈善家から送られた基本金によって設立された財団学校だった[23]。たとえば、ウィンチェスター校の財団設立証書には、「学寮内に住む貧乏で生活の苦しい７０人の学生や書記に無料の教育を施す」と述べてある[24]。しかしながら、この証書によれば、「本校は主として貧しい学徒の訓育を意図するものであるが、校長は、限られた数の富裕で勢力のある家庭の子弟を入学させるのを許される。ただしその授業料、宿泊・食費は支払うものとする」[25]とあった。当時（18 世紀以降）の英国には、土地所有階級がそれまで頼りにしてきた個人家庭教師制度はもはや流行遅れになった、という信念が強まっていた。

というのも、家庭で教育された少年たちは、仲間との交際や幼時における独立心の養成、すなわち家庭を離れて同じクラスの子供たちと交際することによってのみ得ることのできる経験に欠けていたという事実があったのである[26]。富裕層の子供の増加により、貧困層との比率が逆転し、パブリックスクールという小さな社会の中で、階級社会が形成されるようになると、フットボールは、一部の上級生が下級生に対する支配権を主張する手段の一つとして使われていくこととなる[27]。

ラグビー式フットボール（ラグビー）という名称が誕生したのも、パブリックスクールにおけるフットボールの発展が起因となっている。ラグビー式フットボール（ラグビー）は、1823 年、ラグビー校にて誕生した。つまり、ラグビー校式のフットボール、それがラグビーだったのである。ラグビー校に現存する、ラグビー誕生記念碑には、「1823 年に、ウィリアム・ウェッブ・エリスという少年が、ボールを持って走ってはいけない、というルールをすっかり忘れてボールを持って走ったことから、ラグビーというゲームが生まれたことを記念する」[28]と記している。これは、「エリス伝説」と呼ばれ、ラグビーの歴史を検証する上で重要な、「ラグビーの特徴の一つであるボールを持って走るというプレイが、いつごろ、どうして起こったのか」という疑問に対しての一つの回答であると考えられている[29]。

最後に、対校戦の始まりによる統一ルールの成立について触れよう。先にも述べたが、民族スポーツから学校スポーツと形を変え、エリス少年の行動により、ラグビーが誕生した訳であるが、各校には様々なルールが点在し、対校戦の実施は困難を極めていた。また、各校に定められたルールも、表現が曖昧なものが多くある等、問題を抱えていた。その典型的な例として、ウェストミンスター校に存在した独自ルールを引用したい。

(1)ボールは、地面に落ちないうちなら蹴ってもよいし、受け取ってもよい。また最初のバウンドのあとでこのようなプレイをしてもよい。
(2)相手に脚をかけて倒すこと、脚を蹴ること、体をぶつけることは許される。
(3)ボールを持って走ることは絶対に許されない[30]。
(4)ゴールは、２本の木の間をキックでボールを通過させることで得られる。
(5)ボールを手で打つことは許される。
(6)ボールがグラウンド外に出た時、プレイはグリーズかスクラムで開始される。
(7)アウトサイディングやオフサイドは良くない行為であるが、反則ではない[31]。

このように、ルールの制定は各校の裁量に任されていたことが分かる。初めての統一ルールが作られたのは 1863 年のことであり、これが近代サッカーのルールの成立であると言える。同年、フットボールアソシエーション（FA）が設立された。では、ラグビーはどうなってしまったのか。この統一ルールであるが、成立までに 4 回もの会議を擁した。「ボールを手に持って走る」という行為、つまり、現代に生きるラグビー的要素を統一ルールに盛り込むか否かをめぐって大いに論争が繰り広げられたのである[32]。ルール設立後も、ラグビーは非公式という形で行われていたが、遂に 1871 年、FA を脱退した勇士たちにより、ロンドンでラグビー協会（RFU）が創立されるに至った[33]。

以上が現代のラグビーに至るまでの大まかな経緯である。RFU 設立後の連盟の変遷に

ついては本章では割愛する。このように、英国におけるラグビーは、民族スポーツからはじまり、学校内での発展、対校戦実施による統一ルール設立により、形をなしてきたと言える。「ラグビーは教育的要素が多い」と言われるが、それは、①そもそもの起こりが粗野で野蛮なスポーツに、従うべきルールを適用したこと、②それが、独立心やエリート養成が望まれた環境で発展していったこと、の 2 点が大きく作用していると考える。「フェアプレイ精神」とは「然るべきルールに則る」ということではないだろうか。死人が出るほどの粗野で野蛮なスポーツにルールを適応し、それが奇跡的に受け入れられたこと、そしてそこには、産業革命やエリート養成などの社会的、教育的背景があったこと、こうした様々な要因が関係し合っていた英国においてこそ、ラグビーという奇跡のスポーツは誕生し得たのではないだろうか。

第二節　日本におけるラグビーの普及過程

１．実質的普及の動向

(1)慶應義塾のラグビー導入から体育会公認蹴球部発足の前後まで

日本のラグビーの歴史は、1899(明治 32)年、麻布仙台ヶ原における慶應義塾の塾生から始まる。この年、慶應義塾理財科[34]に英語教師として赴任した E.B.クラークが田中銀之助の協力のもと、塾生に直接指導したのがその最初である。彼らはともにケンブリッジ大学で学びながらラグビーに親しんだ同窓生であった[35]。当時の状況についてクラークは 1931(昭和 6)年に慶應義塾宛ての書簡に記している。以下にそれを引用する。

> I introduced Rugby to the man of then classes at Keiogijuku because they seemded to have nothing to occupy them out of doors in the after summer and winter days. Winter baseball had not yet come in, and the young fellows loitered around wasting the hours and the lovely autumn weather. I thought if I could get them interested in rugger, their hours during their free afternoon would not be so long and wearisome My Japanese was too rough & ready, vocabulary far too scant to explain the pin point of the game, so I asked my friend Tanaka Ginnosuke to come to my help, which he did with great readiness and enthusiasm, and so the game was started.[36]

この追想から日本ラグビーは、無味乾燥な生活を送る学生たちをなんとかより豊かな学生生活へと導きたいという一外国人の想いから始まったことがうかがえる。また、クラークにとって、当時の田中の存在は、単に言葉の不自由を補うのみでなく、田中自身がラグビープレーヤーであったこともあり、「相並んでラグビーの創始者」[37]とみることができる。

では、クラークと田中によるラグビーの伝授はどのように塾生に広がっていったのだろうか。まず、クラークの提案に最初に飛びついたのが「ハイカラ」と呼ばれる学生たちであった。慶應義塾蹴球部編の『ラグビー式フットボール』第 3 章「日本におけるラグビーの歴史」の「ハイカラ」という項目には、「クラーク教授一日英文学教授の際、談たまたまラグビーに及ぶ、ときはきたれりハイカラ諸君はたちまち教授を戴いて練習を開始せり、

練習といわんよりもむしろ新奇なる靴、新奇なるユニフォームを作りて吾人にみせびらかせりというを適当と信ず、しかもこれ吾国における男子遊戯ラグビーフットボールの濫觴なり」と記述されている。しかしながら、それに続く「ハイカラ遂わる」の頁で「ハイカラはこの激烈なる練習に堪ゆべきものにあらず。……蛮カラ入門以来練習はさらに猛烈を加えクラーク氏は喜色満面さらに溢れぬ。ハイカラのユニフォーム破れ靴汚れ彼らは日一日その跡を絶つに至れり」とあり、ラグビーに最初に飛びついたハイカラの学生たちが、蛮カラと呼ばれる学生たちによって追い出されてしまったことがうかがえる[38]。

クラーク・田中の直系として慶應ラグビーの源流として位置づけられているのが、森五郎兵衛、山崎不二雄、松岡正男、伊藤重郎、浜田精蔵、猪熊隆三、鈴木四朗、小倉和一、岡本謙三郎、その他有志ら蛮カラ学生により結成された「バーバリアン・クラブ」である。松岡の記述、『蹴球部六十年史』「1899 年度・発祥の年」によると「クラーク教授室に呼ばれて当時ではすこぶる珍しい砲弾投げに用いる弾丸を撫でたり、英国や豪州の運動競技界の話を聞くことは、誠に楽しいことであった」[39]とあり、こうした記述からも彼らとクラークが接触していたことがわかる。

バーバリアン・クラブに次いで登場したのが「敷島クラブ」である。敷島クラブは海江田準一郎、北田内蔵司、吉武吉雄、福長永太郎らを中心に組織され、さらに安藤復蔵、田宮弘太郎、太田直巳、宮沢恒治、村瀬末一、菅谷隆良、高橋忠松、山田久司らも加わり、ラグビーという新興スポーツは塾内で俄然にぎやかな存在となっていった。後に、時期は定かでないが、バーバリアン・クラブと敷島クラブ合体して「ラグビーフットボール・クラブ」が生まれ、塾内で優にラグビーゲームをすることが可能になった。

その後のラグビーの発展を語る上で忘れてはならないのは、寄宿舎の存在である。三田山上に新しい寄宿舎ができたのは、1900(明治 33)年のことであった。当時三田の山には 6 寮の寄宿舎があり、新入生は大学部・普通部を問わずほとんどが入寮することになった。当時の寄宿舎での生活について、岡野豪夫[40]は、

> 私が沼津中学を卒えて塾の予科に入学し、三田の寄宿舎に入ったのは、明治 40 年の 4 月であった。4 寮の 62 番という部屋で、室長の岡崎惣太郎(ボート、ラグビー)、鎌田政秋(ボート、ラグビー)という人と 3 人。隣の部屋には菅谷隆良、杉本貞一(ともにボート、ラグビー)がいた。4 寮は運動部の連中の合宿のような感じがして、食堂の近い方に野球部の連中、遠い方にラグビー、ボートの連中がいた。……いずれにしても私は何も知らずこの寄宿舎に入れられたので、好むと好まざるとに関わらず、ボートとラグビーをやらざるを得なかった[41]。

と記していることから、寮生活を通して学問の修得と同時に、ラグビーをはじめとする外来のスポーツに親しんだことがうかがえる。また、ラグビーが慶應義塾に導入され、絶えることなく日本に根付いていったことについて『日本ラグビー史』においても、

> 塾生が寄宿生活をしていたことである。あえて比較するならば、この条件こそ最優位に位するであろう。……仲間を引き入れるにもその脱落を防ぐにも非常に好都合な条件を備えていた。寄宿舎に入ったということだけが動機で、その生涯をラグビーに生

き抜いた人の好例に田辺九万三がいるし、岡野豪夫、井上寧、横山通夫、大市信吉など、歴代のキャプテンがみな同じ道を歩んだことを告白している[42]。

と論じており、寄宿制度をその理由としてあげている。当時の練習場所については、三田の山にあったグラウンドは狭い上、野球部の専用で使用できなかったというところから、麻布の仙台ヶ原であったが、そこは一面の原っぱでラグビーを練習するには格好の場であった。

1901(明治 34)年になると、慶應義塾は田中の斡旋により、YC&AC(横浜外人倶楽部)と初の対外試合を行った。結果については、5 対 35 の大敗となったが、すでに 2 つのチームを持っていた慶應義塾ラグビーフットボール・クラブにとって、この初の対外試合は歴史的に大きな意味をもつ一戦となった。またこの敗戦はそれまでの「倶楽部といったような気分」[43]の集団の意識を一変させた。慶應義塾にラグビーチームが発足して約 2 年半となる 1903(明治 36)年、猪熊、松岡、森、山崎らの努力により、「ラグビーフットボール・クラブ」は、正式に慶應義塾体育会への加入が認められ、ここに慶應義塾体育会蹴球部が誕生した。

こうしてラグビーが慶應義塾に導入されてから 4 年で正式に体育会として認められたラグビー部（蹴球部）であるが、ここで体育会の加入の意義を整理する。まず、体育会の加入によって上述のように塾内（学校内）の大会に取り入れられるようになった。つまり学校組織に部として認知されることで、ラグビーが改めて 1 つのスポーツであることが確認されたのである。そしてそれと並行して、毎年部費が支給されるようになった。経済的余裕を持たない、スポーツの担い手としての学生にとって「公的に」支援を受けられたことは、その後の学校ラグビーの発展を支える 1 つの要因になったと考えてよいだろう[44]。

さて、慶應義塾のラグビー集団が蹴球部として成立したことで、ラグビーを学生間に普及させる機運が改めて高まった。1905（明治 38）年 5 月 20 日付の『時事新報』に、「この競技は目下余り広く行われおらざれども、学習院、第一高等学校はすでに昨年頃より練習しおるといい、横浜アメチュア倶楽部には現に一騎当千の強さえ多しとのことなれば追々学生間に流行するに至るべし」との記載がある。学習院は田中銀之助の母校であり、また第一高等学校はクラークが 1903 年から 1911 年まで教鞭を執っていた事実から、それらの学校の生徒たちにラグビーを教える機会は十分あったと考えられる[45]。しかし結局この時期に行われた普及活動は実を結ぶことはなかった。

参考までに、群馬県太田中学における慶應義塾蹴球部の普及活動について、田辺九万三の遺稿からの引用を紹介する。

明治 40（1907）年の暑中休暇に竹野敬司、福山荘平の両選手が北関東に旅行した時に、群馬県太田中学が福島君の出身校であるので、同校長サンを訪ねたことがあった。……校長サンは両君のラグビーの話を聞いて非常に興味を持たれた、というのは群馬県は冬季になると有名な上州の空ッ風が連日吹き荒んで、体操なんかは寒くってできないくらいなので体操の代わりにラグビーをやったらよかろうということであった。この報告を聞いて蹴球部の人たちはこの話が実現すれば、初めて自校以外に日本人のチームができるというわけなので非常な気の乗り方で、シーズンがはじまると早速 4、

5 人がコーチに出かけた。中学生にはじめから装備なんかやかましくしては普及の妨げになると思って装備はできるだけ簡単にすることとし、……この冬の正月休みには太田に合宿をしてこの学校をコーチかたがた練習しようということになり、……毎日中学のグラウンドで中学の学生を交えて練習をした。この努力の結果ついに実を結んで同校の技術はメキメキ上達をし、その年の春の休暇には東上して、慶應普通部と試合をした。……これは前にもいったとおり慶應にはじめて（「慶應についで」の誤り）できた日本人チームなので、その前途は非常に嘱目されたのであったが、いつの間にか消滅してしまった。後で聞くと適当な指導者がなかったので、ラグビーは学生間の制裁をするときに利用されることになってしまったということであった[46]。

上記からわかるように、慶應義塾蹴球部の選手の母校というつながりをきっかけとして始まった普及活動であった。慶應義塾蹴球部からコーチを派遣し、中学生と一緒に練習をこなしていくという熱心な活動の結果、慶應義塾普通部と太田中学の交流試合が実現した。しかし慶應義塾との関わりが減っていくと、「適切な指導者」が太田中学にいなくなってしまったために、ラグビーがスポーツから学生間の制裁手段へと変質してしまった。

(2) 京都第三高等学校・同志社での蹴球部誕生、日本初の国内対戦実現まで

慶應義塾蹴球部はその後も外人チームとの試合や合宿を通じてその力を着々とつけていった。1905（明治 39）年には YC&AC を初めて東京日比谷公園に迎えて試合を行い、ホーム＆アウェー方式の端緒となった。また同年の夏初めて蹴球部の合宿が三浦の大津で開かれたと田辺九万三は述懐する[47]。翌年は神戸在住の外国人チーム KR&AC との定期戦を行うことが決定し、1908 年 2 月に第 1 回が実施された。これが初の関西遠征である。神戸遠征は横浜遠征よりさらに費用が必要となったが、無論個人負担の増加は部員たちを悩ませた。こうして経験を積んだ慶應義塾蹴球部はついに 1908 年 11 月に YC&AC に初勝利を収めた。この背景として、クラークから送られてきた『Complete Rugby Football』というイギリス本国の原書が果たした影響も大きい。同書に説明されていたフォーメーションのシステムを基に慶應義塾蹴球部独特の「セブン・システム」を考案し、実戦に生かしたのである。

『Complete Rugby Football』は実戦のみならず、その後のラグビーの普及に大きな影響を与えた。すなわち、この書と経験を基にして、慶應義塾蹴球部員によって日本で初めてのラグビー解説書が発刊された。『ラグビー式フットボール』と題されたこのラグビー教本には、「ラグビーの普及と後継チームの出現をただひたすら待ち望む蹴球部員たちの心情がこめられている」[48]。技術論にとどまらず、ルールからラグビーのスピリッツ、さらには歴史と広範、多岐にわたる内容であった[49]。

こうして発刊された『ラグビー式フットボール』は、1910（明治 43）年に京都第三高等学校で蹴球部（正式には嶽水会蹴球部）が創立されるにあたり実際に活用された。三高での蹴球部誕生のきっかけも、同校生徒と慶應義塾蹴球部員の「偶然」のつながりである。すなわち、三高学生の堀江卯吉と、その従兄弟である慶應義塾のバイスキャプテン真島進である。三高への慶應義塾蹴球部の普及の様子について、当時の記録が残っているので、ここで引用しよう。

明治 43 年の暑中休暇に慶應のバイスキャプテン真島進君が郷里京都に帰った時に、ボールを持参して言って糺の森というところでキックの練習をした。その相手を仰せつかったのが同君の従兄弟で、当時三高の学生であった堀江卯吉君であった。……堀江君もこのお相手でだんだんと楕円のボールに魅力を感じはじめたと同時に真島君からラグビーの精神とあり方を聞かされた。人一倍熱情家であった同君すっかりラグビーの礼賛者となって、ぜひ三高でもはじめようということになり、……同好の士を集めたり、学校当局と折衝したり非常な努力の結果、ついに官立の学校でラグビー部なるものを創設したのであったが、その苦心は並大抵のものではなかったようで、しばしばその折衷のほどを真島君に伝えたり、意見を求めたりしてこられたものであった[50]。

慶應義塾蹴球部の真島進と血縁関係にあった三高の堀江卯吉が、三高蹴球部発足の中心人物であった。三高にラグビーが普及するにあたり、慶應義塾と同様寄宿舎での勧誘活動がそれを支えたようである[51]。蹴球部発足後も練習方法からボール等の備品の相談まで、慶應義塾と手紙による連絡をとっており、またこの際に前述したラグビー指南書『ラグビー式フットボール』が活用された。普及のきっかけそのものは生徒間の（ある意味偶然の）関係によるものであるが、三高蹴球部発足まで至る上では学校という組織がもつ特徴が大きな役割を果たしたと言ってよい。そして 1911（明治 44）年、三高と慶應義塾との定期戦がはじまった[52]。試合結果は「慶應義塾 39 対 0 三高」で一方的な試合であったが、日本人チームとして初めて慶應義塾蹴球部に戦いを挑んだ、ラグビー史における大きな節目といえる。ただし、三高はその後一挙に最上級生が卒業したため選手の補充が困難を極め、また経済的にも行き詰まり、対外試合ができなくなるような状況になってしまう時期もあった[53]。

三高の蹴球部誕生と同じ時期に蹴球部が創設されたのが、同志社である。1911 年 11 月に創設されたとされ、その事情を以下に記す。

明治四十四年秋、三高ラ式蹴球部諸兄の熱心なる勧誘に依り、我松田三沢木原若月の諸兄はラ式蹴球を同支社に紹介せんと遂に其が卒先者となられたり。殆んど毎土曜日には神楽岡を遠しとせず、三高先週の指導を受けんものと、余輩の如き余り有難からざる考へを存するものをも無理矢鱈に引張り出し、……時には慶應旧選手若山氏等を招きてルールの研究をなしたる事などあり[54]。

同志社への普及活動の中心的担い手は三高蹴球部員達であり、ルール等の技術面の援助を慶應義塾蹴球部が担った。同志社でラグビーが普及しえた理由として、1989（明治 22）年同志社でサッカーを競技として導入した経緯が考えられる[55]。似たような競技をあらかじめ学生が経験していたため、比較的円滑な普及が行なわれたと推察される。

同志社ははじめ三高とテストマッチを行い、1912（明治 45）年 1 月慶應義塾と正式に試合をした。三高とは同年 2 月に正式に対校試合を行った。これら 2 つの試合が定期戦の始まりとなる。

(3) 早稲田の蹴球部誕生前後まで

ここでは早稲田で蹴球部が体育会として正式に発足する 1918（大正 7）年前後のラグビー史を概観する。慶應義塾でラグビーが創始してから 10 年以上たったが、依然関東での対戦相手は横浜外人の YC&AC のみであった。その中ではじめて関東で日本の学生によって組織されるチームが生まれる時期である。また、東京と京都の両帝国大学でも蹴球部が創始される時期でもある。

早稲田でラグビーが普及するきっかけをつくったとされる人物は、1917 年に慶應義塾で主将を務めた脇肇である。早稲田ラグビー誕生に脇肇が果たした役割とその時の状況を引用する。これは慶應義塾蹴球部 OB 塩川潤一（1918 年度主将）が脇肇へ送った追悼文である。

> シーズンオフの夏から秋のはじめにかけて有力選手は端艇部の学内対抗レースの各部科選手として向島で合宿生活をし、他の学校の選手も同じく合宿しているので、自然顔を合わせる機会はあったのですが、なかなか話をするまでにはならないのに脇さんはわれわれの知らぬ間に早大端艇部の選手、しかも早大スポーツ界に絶大の力を持っている喜多壮一郎さんと仲良くなっており、大正 6 年秋のシーズンには脇さんを訪ねてこられた。スポーツ関係の人、早大出のスポーツ記者をされる人を連れて綱町のグラウンドにラグビー見学にきてくだされたのです。われわれは皆で心から歓待、練習が終わってから、三田の山の萬来舎で夕食、当時われわれ得意のイギリス式エールから、“白皚皚の歌”、また、神戸外人から直伝の軍歌”It’s A Long Way”をイギリス風に前歌をキャプテン・ソロで、本歌を一同合唱でといった歓迎振りをもってもてなしますと、早大の人々もくるたびに喜んでくだされたらしくこれが早大ラグビー発足の礎となったことは確かかと思います[56]。

当時を振り返る形で書かれたこの追悼文から、脇肇が先導をきって早稲田ラグビー誕生のきっかけをつくったことがわかる。彼が早稲田に普及させようと明確な目的意識を持って早稲田の学生や記者たちと懇意になったかどうかは明記されていない。しかし、慶應義塾以外関東に日本人学生チームがない状況下で、野球や端艇で交流が深かった早稲田にラグビーを芽吹かせようという意識は働いていたのではないかと推察される。ここでの普及の形態は、他スポーツを目的とした学生間の交流である。

こうして 1918（大正 7）年に早稲田で蹴球部が結成される。結成の主役となった人物は磯部秀景、角屋定政、小原兵蔵である[57]。ちなみに前年度には大阪毎日新聞社主催の第 1 回フートボール大会が大阪で開かれている。関東の慶應義塾でラグビーが始まったにもかかわらず、同地の教育機関ではラグビーがなかなか普及せず、むしろ後発の関西の地で三高、同志社などを中心に広まっていた。しかしここにようやく関東に蹴球部が発足したことによって、「すでにはじまりつつあった日本ラグビーの全国展開を加速し」[58]ていった。

初めて早稲田と慶應義塾がラグビーで対戦したのは 1919（大正 8）年である。しかしこの時期は、1906（明治 39）年以降早慶野球戦のもつれが原因で早慶間のスポーツ対抗戦が中止されていた時期である。したがって非公式な試合であり、早稲田は GB（グレートベア）

倶楽部、慶應義塾は普通部チームが対戦した。やがて 3 年後の 1922（大正 11）年に開かれる正式な早慶対抗ラグビー戦へと展開していった。

さて、ここまで早稲田の勃興と慶應義塾との関わりを見てきたが、この時期に蹴球部が生まれたのは早稲田だけではない。1921 年に創設された東京帝国大学ラグビー、翌年 1922 年に創設された京都帝国大学ラグビーについても言及しておく必要があろう。

関西ではいち早く三高においてラグビー部が成立した。その部員たちのほとんどが同校での 3 年間を過ごした後帝大へ進学していくが、その帝大にはラグビー部がいまだ存在していない[59]。そこで三高から東大に進んだ香山蕃を中心に柔道・端艇各部から同志を勧誘し、東大にラグビー部が創設された。東大で比較的順調にラグビーが普及した理由として、地元の本郷に一高グラウンドを持っていたこと、ラグビー経験が深かった香山の主導性が挙げられている[60]。またその翌年、天狗倶楽部という非公認チームを母体として京大にもラグビー部が誕生した。

東西両帝大が初めて対戦したのは 1922 年であり、まだ準備が整っていなかった京大が敗れた。

(4) 早慶戦の開始と関東ラグビー界の勃興

1922 年、ラグビー早慶戦が初めて実現した。慶應義塾蹴球部の対外的なラグビー普及活動は群馬県太田中学を嚆矢とし[61]、その後慶應義塾蹴球部の働きかけに応じたのは東京から遠く離れた京都の第三高等学校であった。その理由として、親戚関係が縁でチーム創設に発展したこと、また早稲田大学とのスポーツ交流断絶があげられる。

1906(明治 39)年、早慶野球応援のトラブルに端を発し、それ以降、両大学間のスポーツ交流は途絶えていた。早慶ラグビー実現の出発点となった関係者の最初の接触には諸説あり、慶應義塾、早稲田両蹴球部に残る記述には、仲介役の氏名、場所、日時などの点で食い違いがみられる。

早慶ラグビー実施に当たっては、試合日の決定、キックオフの時間、ハーフタイム、レフリーなどゲームの細則について早慶両校間で打ち合わせの会合が重ねられたようだ。また特筆すべき点のひとつとして、試合日を 11 月 23 日に固定したという点が挙げられる。試合の実施日が毎シーズン決まっていた定期戦としては他に、毎年元旦に行われた慶應・京大定期戦があるが、これは 1964（昭和 39）年に大学選手権の新設とともに試合日の固定は崩れ、現在まで伝統を守り続けているのは早慶戦のみである[62]。慶應義塾対早稲田のラグビー初戦は、1922 年 11 月 23 日午後 2 時 40 分から三田綱町運動場で行われた。試合の結果は、14 対 0 で慶應義塾が勝ったが、前半 1 ゴール、後半 3 トライという内容から、早稲田の善戦とみることができる。早稲田のラ式蹴球部は 1918 年に創部されながら、無為のシーズンを過ごして 4 年が経っていた。つまり、このラグビー早慶戦は、慶應義塾にとって待望久しかった東都に仲間を迎えることとなり、早稲田にとっても創部以来無為に過ごした 4 年間から解放されるできごととなった。ラグビー早慶戦の開始は両校のスポーツの活性化を促したほか、その後、明治、立教、法政等各大学にラグビー部の設立の気運を高める役割を果たした。

ラグビー早慶戦開始の年には東京商科大学、その翌年には明治大学と立教大学、2 年後には法政大学にラグビー部が創設された。

明治大学ラグビー部の創設者は能美一夫である。能美は、元来柔道部、馬術部の選手であったが、ふとした機会に綱町での慶應義塾のラグビーの練習を見てから、魅せられたように暇さえあれば、わざわざ見物に出かけるようになった。そのうちに自分でもやってみたくなり仲間を集め始めたが、創設者も未経験という状況であり、先行的好条件は持ち合わせていなかった。しかし能美は、早稲田大学を訪ね、当時の主将、大町の快諾を得て手ほどきを受けたり、手近な柔道部や相撲部の部員を引き込んでは、駿河台から日比谷公園まで駆け足で通って練習した。そして翌 1923（大正 12）年には、まだ 1 度も試合をしていないにもかかわらず、学友会の 1 部として公認されることとなり、将来への基礎を固めていった。慶應義塾との定期戦がスタートしたのも、この年であった。

立教大学ラグビー部は、早川郁三郎が 1922(大正 11)年のラグビー早慶戦を見物したことをきっかけに、明治大学と同様、初心者により、仲間集めからスタートした。早稲田や明治に比べ学生数が少なく、勧誘には苦労したようであるが、サッカー部員や水泳部員、野球部員らをうまく引き入れ、1923 年には大学の体育会に公認された。

法政大学では、当時すでに卒業生であった倉谷安二郎が麻布歩兵連隊でラグビーを経験した。そこでラグビーに引き込まれた倉谷は母校である法政大学にラグビー部を創設した。

上記の大学のほか、東京高等師範学校、中央大学、青山学院[63]、日本大学、第一高等学校、成蹊高校で、ほぼ同時期に立て続けにラグビー部が創設された。

ラグビー界の急速な発展によりさまざまな問題も発生した。たとえば、ルール解釈の相違、あるいは試合の日程調整が主たるものであったが、早慶定期戦の入場料徴収問題もそれに含まれていた。そこで 1924 年に、関東エリアのラグビー統括機関として「関東ラグビー蹴球協会」が設立された。母体となったのは、A.J.R.A(All Japan Rugby Association)で、初代会長には田中銀之助、副会長に田辺専一(慶應義塾 OB）、理事長に橋本寿三郎(慶應義塾 OB)が選ばれた。理事会の下には委員会を置き、委員には学生を起用していることは、特筆すべき点である。理事会、委員会はすべて甲種会員とする、慶應義塾、早稲田、東大、商大、明治の 5 校関係者で構成され、①協会発行の会報の配布、②レフリー派遣の便宜、③協議の主催および監督[64]、を主たる業務とした。その翌年には、関西、九州、朝鮮半島、台湾を統括する機関として「西部ラグビー蹴球協会」も設立された。

関東、西部両地域協会に続いて、1926(大正 15)年 11 月 30 日、「日本ラグビー蹴球協会」が設立された。名誉会長には田中銀之助が選ばれた。同協会では、英国の 5 か国対抗にならって選抜チームによる東西対抗戦を設け、この試合への秩父宮杯ご下賜の内意を得た。しかしながら、協会設立から 1 か月を待たない、同年 12 月 25 日大正天皇崩御のためラグビー界も喪に服し、第 1 回東西対抗戦は 1928(昭和 3)年 2 月 12 日まで持ち越されることとなった。

1928 年、それまで慶應義塾を中心に定期戦形式で行われてきた大学ラグビーが定期戦を兼ねたまま 5 大学対抗戦へと移行した。加盟校は、慶應義塾、早稲田、東京帝大、明治、立教。初年度は慶應義塾が 4 戦全勝で初代チャンピオンとなった。なお、1933(昭和 8)年から東京商大、法政の両大学も加わり、7 大学対抗戦として、1942(昭和 17)年まで続いた。

２．形式的普及の動向

前述したが、スポーツの「普及」とはそのスポーツを担う学生（学校）の規模の拡大、(地

域をまたいだ）試合・大会の実施といった実質的側面と、そうした各方面のスポーツの取り組みを一律にまとめ管理・運営する連盟や協会の成立といった形式的側面の両面が存在する。本節ではラグビーの普及における形式的な側面に焦点をあてる。ラグビー普及の取り組みを管理・運営する連盟や協会の発生から本研究において「ラグビー普及の区切り」とした 1926 年～ 1928 年までの実際面の取り組みを支える機関・機構の動向を探りたい。

前述のように各地にラグビーチームが起こるようになり、ルールの解釈に多少の相違が見られ、権威のある統制機関の設立の必要性が迫られていた。幸いそのような要望に添うような組織化の母体が都合よく順調に発展しつつあった。すなわち任意につくられていた OB の倶楽部組織として 1919（大正 8）年に「関西ラグビークラブ」が、続いて翌 1920 年には関東の OB 倶楽部として「A.J.R.A（All Japan Rugby Association）」が組織された。これらふたつの倶楽部がそれぞれ、「西部ラグビー蹴球協会」と「関東ラグビー蹴球協会」とに、発展的に改組されたのであった[65]。

「関西ラグビー倶楽部」はニックネームを「オールホワイツ」と称し[66]、1919 年に関西で慶應義塾の OB を中心として結成された。この年の何月に発足したのか定かではないが、慶應義塾の OB が中心となって結成されたことは次の記述からもうかがえる。『慶應義塾蹴球部百年史』の記述によれば

> 最初の呼びかけは大正 7（1918）年秋のことで、神戸郊外須磨浦にあった脇肇（慶應義塾蹴球部 1917 年度主将）の家で発起人会が開かれ、発起人として杉本貞一（慶應義塾蹴球部 1913 年度主将）、井上寧（慶應義塾蹴球部 1912 年度主将）、脇肇（前述）、竹上四郎（三高 OB）、石倉謙二郎（三高 OB）が名を連ねた[67]。

とある。また、発起人の一人として名を連ねる杉本貞一は、次のように述べている。

> 三高、同志社（ラグビー部）が関西に生まれて、次第に関西にラグビーが普及されていったのだが、大正 8 年に脇、中野、石倉、佐々木等の諸君が集まって倶楽部チームを作って、三高、同志社の発展に備え、関西にラグビーを普及してはいかがかとの相談を受けた。私は大賛成だと人を集めた。竹上理学博士や、和田氏（川崎）、大脇、美濃部、上野等の同志社出身の諸氏と会合してそのとき初めて関西ラグビー倶楽部を創設したのである。ユニフォームの純白は、われらラガーマンは常に純真であることを意味し、ガイコツのマークは無欲淡々で一切は『空』だ。私等は真直にラグビーに精進するという理由から出ている。で一名『オールホワイツ』と称して、神戸外人と最初のゲームをやったのが倶楽部チームのゲームのはじまりだと思う。以来各学校にラグビーの精神を高調してチームを組織させることに成功し、日に月に盛んになってきた[68]。

上記のように、「関西ラグビー倶楽部」はラグビーを普及させることが目的の慶應義塾 OB 中心の親睦団体であったと言えるだろう。ラグビーの普及と言っても、競技としての普及のみならず、ラグビー精神を伴ったラグビーの普及を目的としていたのであった。もちろん、倶楽部発起の目的がラグビーの普及であったとしても部員たちがラグビーを競技

として楽しまないはずはなく、精力的に試合をおこなっていたようで、「ダブルヘッドを行うことも度々」[69]であった。また、『慶應義塾蹴球部百年史』に「創立以来の 20 年間に試合 145 を算しているが、その間、1926（大正 15）年には関西首位の三高、京大をも破っている。勝敗にこだわるような野暴なところがなく」[70]とあるように、「競技面での実力」のみならず、ラガーマンらしさも備えた倶楽部であったことがうかがえる。

「A.J.R.A」は東京在住の慶應義塾 OB を中心とするプレーヤー本位の倶楽部チームで、チームとして試合をすることを目的としていた。設立の動機、いきさつについての詳細については主な事務的処理を行った慶應義塾 OB である橋本寿三郎が『慶應義塾体育会蹴球部六十年史』に書き残しているが、要約すれば、①春秋２回の塾内大会と OB の参加、②大正中期に入って塾 OB の激増、③前年設立の「関西ラグビー倶楽部」に刺激された、④日本経済の好況、の 4 点となる[71]。前述したが「みずから楽しみ且指導することに目的があり、最初からその名称を示唆するような、全国統御の意志はもっていなかった。また実際に統御すべき客体もなかった」[72]とあるように、地域的組織としては機能していたものの、全国的な統制機関として機能する意志はなかったことがうかがえる。また、橋本寿三郎が遺稿の中で次の様に記している。

> (A.J.R.A は)『ラグビーを愛する紳士の集まり』という競技中心の集まりで、ラグビーの行政面を指導担当する意図などはもちろんなかったが、実際は当時指導的立場にあった慶應の出身者が多数であるのと、これに三高、同志社出身者を加えた団体であるから、関東にあったラグビー界の中心機関化し、早慶試合を主催するなど、ラグビー協会の前身と見做されるような立場にあった[73]。

上記から分かるように、「関西ラグビー倶楽部」と同様に、A.J.R.A はもともとラグビーを競技として楽しむことを意図した慶應義塾 OB 中心の親睦団体であったのである。指導的立場にあった慶應義塾の出身者が多かったことで、結果として関東ラグビー界の統括に A.J.R.A が指導的、中心的機関として機能し「関東ラグビー蹴球協会」の設立につながったものの、そのような意図は存在しなったことがうかがえる。また、A.J.R.A には「ラグビーを普及させる」といった意図は存在せず、その点は「関西ラグビー倶楽部」との相違と言えるだろう。

A.J.R.A が母体となり、関東エリアのラグビー統括機関として「関東ラグビー蹴球協会」が確立したのは、1924(大正 13）年 6 月のことである。ラグビー界の急速な発展による様々な問題が発生しており、ルール解釈の相違、あるいは日程の調整などがその主たるものである。その要請に応える形で「関東ラグビー蹴球協会」は設立された。「関東ラグビー蹴球協会」の初代会長に田中銀之助（慶應義塾 OB・A.J.R.A 会長)、副会長に田辺専一（慶應義塾 OB）らが就任した。そのほかの新協会で特筆されるのは理事会の下部機構として委員会を置き、委員に学生を起用していることであった[74]。『日本ラグビー史』に「学生委員は単なるお飾りでなく、協会の運営について各自が自分の見識に基づいた意見を存分に吐露し、先輩の理事もよくこれに傾聴して、オーバーな表現だが、維新直後の明治新政府もかくやと思わせる清新発剌の気がみなぎっていた」[75]とあるように学生や OB といった身分や上下関係の垣根を超えた活発な意見交換が行われ、協会運営に役立てていた

ことがうかがえる。

協会規約によれば、組織単位は甲種会員と乙種会員が存在し、甲種会員は大規模組織であり、乙種会員は協会の運営に関与するだけの実力が不備で、また運営にたずさわる時間的余裕を持たないチームで、小規模の大学、高専、中学、実業団などが該当した。会員として登録されたチームは、甲種は 20 円、乙種は 5 円の年会費を納入した[76]。協会は、①協会発行の会報(競技規則もこれに記載)を配布する、②レフリー派遣の便宜を計る、③競技の主催又は監督をする、などを主たる任務とした[77]。また、『日本ラグビー史』に「入場料については実費の計上、残額の保管配分率の決定、交付の方法などにつき厳密な規定を設けて、プロ的感覚の侵入を防いで、アマチュアリズムを守るための配慮に特に熱意を見せた」[78]とあるように、ラグビー精神の根本であるアマチュアリズムが当時から協会内に根づき、協会運営における主たる原理の一つとなっていたと言える。

西部ラグビー蹴球協会設立総会が 1925（大正 14）年 9 月に開かれた。同総会の決定を以って、「西部ラグビー蹴球協会」が 1925 年 9 月に設立されたのであった。同協会は関西、九州、朝鮮半島、台湾を統括する機関として正式に発足し、初代理事長に杉本貞一（慶應義塾 OB）を選出した。一年前にスタートした関東協会の母体が A.J.R.A だったように西部協会も大学 OB の親睦団体としてスタートした「関西ラグビー倶楽部」が協会組織の基盤となった[79]。協会の名称を“関西”とせずして“西部”としたことは、九州、朝鮮までをふくむ統轄地域からみて、関西の名がふさわしくないとされたからであり、関西の名称が用いられるようになったのは、戦後に九州協会が成立してからのことである。関西ラグビー倶楽部のチームの存在は、依然旧名のままで維持された[80]。

このように、協会組織が関東そして西部と成立して行く過程を見ると、対抗意識が内在していたように感じられるが、西部協会の設立趣意書に「関東ラグビー蹴球協会の趣旨にそって」[81]とあるように、対抗意識は存在しなかったと言える。むしろ「将来の統一機関を生む便宜として、合意的に計画された」のであって西部協会の設立趣意書の末尾に「本邦斯界の統一機関たるべき全日本ラグビー蹴球協会の設立を期せむとする所以なり」とあるように[82]、全国的な統制機関の成立を期した地域的な統制機関として西部協会は設立されたのであった。関東、関西両協会はお互いに協調的な立場にあったため、「見苦しい勢力争いや役員の争奪などのことは毛ほどもなく、きわめて和気藹藹の中に順調」[83]であった。そのため全国的な統制機関設立向けての障壁はほとんど存在せず、きわめて順調であったと言える。

そのような流れを追い風に、西部協会設立の一年後の 1926(大正 15 年)には「日本ラグビー蹴球協会」が成立した。同協会は地域的統制機関を統括する全国的統制機関として機能した。前述したが、1928（昭和 3）年には同協会の主催による初めての東西対抗戦が実施されることになった。さらに同年、「関東ラグビー蹴球協会」の主催により現在の関東大学ラグビー対抗戦の前身となる五大学対抗戦がスタートした。このように、初期の協会運営について『日本ラグビー史』に「まことに見事な統一ぶりであり、しかもそこには一片の強制的因素をふくまなかった」[84]との評価があるように、十分にその全国的統制機関としての役割を担っていたことがうかがえる。

むすび――普及動向における学校教育の果たした役割

ここまでの論述で、日本におけるラグビーの導入、発展・定着について概観してきた。まずこの流れにおいて無視できないのが、時代的背景である。ラグビーがクラークによって慶應義塾に紹介された 1899(明治 32)年といえば、文明開化の潮流が一段と高潮し、洋館、洋装、洋食と、欧米風のものが積極的に取り入れられる時代であった。ラグビーといったようないわゆる近代スポーツもこの潮流に乗って移入されてきた[85]。しかしながら、明治時代の日本の社会事情は、近代スポーツのような集団的な戸外の娯楽を楽しむほどの、社会的資本はまだ整っていなかった。その例外となったのが学校であった。学校はスポーツに即応することのできる年代の集団であるし、また競技場などの設備も持ち合わせていた。このように、近代スポーツの発展において、学校という存在は最高の土壌となった。

しかし、ラグビーに注目すると学校であるということだけでは、発展のための条件は整わない。前節でも触れたように、ラグビーは比較的経費を要するスポーツであった[86]。そのため、ラグビーの発展のためにはある程度の経済的基盤がなくてはならない。この点で当時の慶應義塾が優れていたことが当時の活動の様子からうかがえる。ラグビーは導入から 3 年と比較的早い段階で体育会の一部として認められ学校当局からも部費が与えられるようになった。体育会に認められるまでの 3 年間は田中銀之助が経済的援助を与えたり、学生個人でも負担していたようである[87]。

初めて部になったとき支給された部費は約 80 円、翌年は 220 ～ 230 円、その次の年には 300 円と増加している[88]。当時の国民ひとり当たりの名目所得が 41 円 90 銭であったことと比較すると、それがいかに大金であったかを想像することができる。また「神戸行も自弁で、常に金の問題でも苦労はした。」、「ラグビーを拡めるために部員は自腹を切って骨を折ったものです」[89] といった述懐から、学生も苦労しながらではあるが「自腹を切る」だけの財力があったことがわかる。このように、学校当局が多額な部費を支給したこと、部員がある程度の財力を持っていたことなど、慶應義塾という学校の全体的な豊かさもラグビーの発展に影響したと考えられる。

また、寄宿舎の存在もラグビーが学生に取り組まれるために大きな役割を果たした。この寄宿舎での生活は、今日でいう合宿を年中行っているようなものであった。第 2 節でも触れたように、当時の部員の述懐からも、当時の塾生が寄宿舎での生活を通してラグビーに親しんでいった様子がうかがえる。

以上のように、日本におけるラグビーは、施設の充実という面での学校の存在と、慶應義塾の特異性によって、定着、発展していったのである。

〔註〕

（1）Official RWC 2011 Site「Rugby World Cup - The Origins」(最終閲覧日：2012 年 2 月 4 日)。
＜ http://www.rugbyworldcup.com/home/history/origins.html ＞

（2）ここでのラグビーフットボールはラグビーユニオン（15 人制ラグビー）を指す。日本でラグビーフットボールと呼ばれているものは基本的にはラグビーユニオンのことである。ラグビーリーグ（13 人制ラグビー）も存在するが、日本ではほとんど行われていない。

（3）前掲 HP「Official RWC 2011 Site」。

（4）2006 年の IRB（国際ラグビー評議会）の調査によればニュージーランドのラグビーの男性の競技人口が 130,723 人であるのに対し、日本の男性の競技人口は 124,813 人であるとされた。最も多いのがイングランドで 657,634 人（男性）となっている（松崎伸一『ラグビー人口について』愛媛県ラグビーフットボール協会、2007 年、1 頁）。

（5）慶應義塾体育会蹴球部黒黄会編『慶應義塾蹴球部百年史』慶應義塾大学出版会、2000 年、54 頁。

（6）大阪毎日新聞主催。1918（大正 7）年 1 月 12 ～ 13 日に大阪・豊中グラウンドで開催。ラ式（ラグビー）とア式（サッカー）の 2 部門で構成される。大会名に「日本」とついてはいるものの、全国規模の大会というわけではなく、ラ式の出場校は三高、同志社、京都一商の 3 校に限られているように、関西限定の取り組みと見る必要がある（前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、141 頁）。

（7）日本ラグビーフットボール協会編『日本ラグビー史』財団法人日本ラグビーフットボール協会、1964 年、201 頁。

（8）東西対抗戦そのものは、「A.J.R.A」が組織された 1920（大正 9 年）より年 2 回ずつ開催されるようになった。

（9）前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、204 頁。

（10）前掲『日本ラグビー史』、198 頁。

（11）同上。

（12）日本体育協会『スポーツ大辞典』大修館書店、1987 年、「サッカー発展史」より。

（13）リク・タニンド/ケネス・シャド著、大西鉄之助/大沼賢治訳『ラグビーとイギリス人』ベースボールマガジン社、1983 年、27 頁。

（14）同上、29 頁、表 1-1。

（15）同上、29 頁。

（16）前掲『スポーツ大辞典』大修館書店、1987 年、「サッカー発展史」より。

（17）中村敏雄『中村敏雄著作集８、フットボールの文化論』創文企画、2009 年、234 頁。

（18）同上。

（19）前掲『ラグビーとイギリス人』、48 頁。

（20）同上、49 頁。

（21）同上、49 頁。

（22）同上、57 頁。

（23）同上、59 頁。

（24）同上。

（25）同上、60 頁。

（26）産業革命期の英国、特に土地所有階級には、支配下級としての権力を次第に強化し、他方で国王からの独立自尊を固めていた。これが階級によるエリート意識の萌芽と考えられる。

（27）道具の準備等を下級生に行わせ、学校生活における保護を約束する制度、ファギング制度が成立する学校も少なくなかった。パブリックスクールにおけるフットボールは、支配階級（上級生）と被支配階級（下級生）の構造とともに発展していった。

（28）前掲『中村敏雄著作集８、フットボールの文化論』、175 頁。

（29）ラグビー校のフットボールのルールでは、手を使う事は容認されていた。“ボールを持って走った”ということがルール違反であり、ラグビー誕生の瞬間だったと考えられる。

（30）このことからも、エリス少年により偶然生誕したラグビーは、あくまでもラグビー校式のフットボールであり、周りからの理解はなかったことがわかる。

（31）前掲『中村敏雄著作集８、フットボールの文化論』、237 頁。

(32) 同上。
(33) 同上、242 頁。
(34) 慶應義塾に大学部が発足し、文学・理財・法律の 3 科を設置したのは、明治 23 年(1890)1 月のことであった。修業年限は 3 か年（慶應義塾大学 HP「慶應義塾の豆百科〈大学部の発足〉」＜ http://www.keio.ac.jp/ja/contents/mamehyakka/47.html ＞、最終閲覧日：2012 年 2 月 4 日）。
(35) クラークはコーパス・クリスティー、田中はトリニティーホール（前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、54 頁）。
(36) 同上。
日本語訳：「わたしが、慶應義塾の私のクラスにラグビーを紹介したのは、彼らが晩夏から冬にかけて屋外では何もすることがないように見えたからです。冬の野球はまだ行われていなかったし、若者たちは時間と秋の素敵な天気を無駄にしてのらくらしていたのです。わたしは、もし彼らにラグビーの興味を覚えさせられたら、午後の自由時間を、あんなに退屈しなくて済むだろうと思いました。わたしの日本語は間に合わせ程度のものであり、知っている言葉の数もごく少ないので、ラグビーの細かい点まで説明するわけにはゆきませんでした。そこでわたしは、友人の田中銀之助に援助してもらうように頼みましたが、彼は喜んで非常な熱意をもってことにあたってくれ、こうしてゲームが始められたのです。」
(37) 前掲『日本ラグビー史』、12 頁。
(38) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、59 頁。
(39) 同上。
(40) 岡野が入寮したのは、創部から 8 年が経った、1907(明治 40)年であるが、ここに引用する。
(41) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、61 頁。
(42) 前掲『日本ラグビー史』23 頁。
(43) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、69 頁。
(44) ただし、体育会から支給される部費で最初からすべての経費を賄うことができたわけではない。例えば慶應義塾の場合、体育会に加入した 1903（明治 36）年の部費は 80 余円であったが、「ボールひとつ買うにも相当苦労した」ようである（同上、80 頁）。実業家たる田中銀之助や OB からの支援、及び比較的恵まれていた慶應義塾生の潜在的経済力なしには、経費を要するラグビーが慶應義塾で普及することはなかったであろう。
(45) 田辺九万三のメモに、「学習院から 4 名習いにきたる。三島、柳谷、外 2 名。一高へエキシビジョンゲームをやりに行く。つぎは太田中学、三聯隊等。田宮は三高、同志社等い宣伝す」という具体的な普及活動が綴られている（前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、98、99 頁）。
(46) 同上、99 頁。
(47) 同上、91 頁。
(48) 同上、108 頁。
(49) 同上。
(50) 田辺九万三の遺稿による（同上、110 頁）。
(51) 同上。
(52) 三高が東上したそもそものきっかけは、三高と一高の野球の定期戦の応援団として三高蹴球部が同行したことによる（前掲『日本ラグビー史』、45 頁）。
(53) 同上、46 頁。
(54) 大脇順路の手記による（同上、48 頁）。
(55) 同上。
(56) 前掲『慶應蹴球部百年史』、137 頁。
(57) 同上、142 頁。

(58) 同上。
(59) ただし、京大については、京大柔道部のメンバーを中心に 1916（大正 5）年天狗倶楽部という非公認チームが存在しており、多少なりともラグビー活動をすることが可能であったようである。（前掲『日本ラグビー史』、94 頁。）天狗倶楽部は京都一中のラグビー部を創設した香山蕃の声掛けで結成され、京大ラグビー部の母体となった。なお香山蕃本人は、三高を卒業後東大へ進学している。香山が天狗倶楽部結成に携わったのは、京都一中を卒業し三高へ進学するための浪人生活を送っている最中であった。なおこれについては、京都大学ラグビー部 HP「過去の記録」＜ http://www.kiurfc.com/records/history/c01_1_06.html ＞を参照した（最終閲覧日：2012 年 2 月 4 日）。
(60) 前掲『日本ラグビー史』、96 頁。
(61) 同上、98 頁。
(62) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、158 頁。
試合日として 11 月 23 日が選ばれたのは、中村元一氏が東京近くの測候所を歴訪して、もっとも雨の少ない日を調べ上げこの日を提案したからであるといわれている。
(63) 1924(大正 13)年当時、青山学院はまだ大学ではなく専門学校であった。
(64) 前掲、『慶應義塾蹴球部百年史』、182 頁。
(65) 同上、201 頁。
(66) 同上。
(67) 同上、144 頁。
(68) 同上。
(69) 同上。
(70) 同上。
(71) 同上、148 頁。
(72) 前掲『日本ラグビー史』、201 頁。
(73) 同上。
(74) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、182 頁。
(75) 前掲『日本ラグビー史』、202 頁。
(76) 同上。
(77) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、182 頁。
(78) 前掲『日本ラグビー史』、202 頁。
(79) 前掲『慶應義塾蹴球部百年史』、192 頁。
(80) 前掲『日本ラグビー史』、203 頁。
(81) 同上、202 頁。
(82) 同上、203 頁。
(83) 同上。
(84) 同上、205 頁。
(85) 野球(1873 年創始)、庭球(1878 年創始)、サッカー(1905 年創始)、バスケットボール(1908 年創始)、バレー(1913 年創始)。
(86) 当時、赤皮の特製の靴が 4 円、ボールが 30 円であった。
(87) 前掲『日本ラグビー史』、28 頁。
(88) 同上、28 頁。
(89) 同上、29 頁。

第三章　テ ニ ス

はじめに

テニスは日本に限らず世界各地で多くの人に親しまれているスポーツである。テニスは競技人口が 750 万人と非常に多く（スポーツではスキーに次ぐ２位）[1]、日本には 300 以上のテニスクラブがある[2]。大学の授業等でのテニスは生涯スポーツの導入として行う見方もある[3]。テニスは明治期に日本に導入された。他にも同じ時期に導入されていたスポーツはあるが、何故、テニスはこんなにも日本国民に親しまれるスポーツになったのだろうか。

オリンピックで日本人として初めてメダルを獲得したのも、1920 年（大正９年）のアントワープオリンピックのテニス競技で銀メダルを獲得した熊谷一弥選手である[4]。彼のメダル獲得が大きく取り上げられ、これ以降更にテニスをプレイする人が増えた[5]。日本の教育機関で最初にテニスをプレイしたのは東京高等師範学校であるとされているが、熊谷選手自身は慶應義塾出身であり、当時の三菱銀行の行員だった。私達は、日本人選手がオリンピックでメダルを獲得するまでに我が国でテニスが熟成されたということを１つの普及の定義とする。テニスの導入期から、どのようにしてテニスが普及し、オリンピックでメダルを獲得する選手が現れるまでに至ったかを教育との東京高等師範学校・早慶の私立学校の取り組みを中心として探っていきたい。

又、テニスは明治 30 年頃には既に女子や子どもにも親しまれていた。その経緯を調べると共に、上記のオリンピックメダリストが育つまでの経緯と連続性又は関わりについても考察していきたい。

第一節　テニスの日本への導入

１．テニスの導入期

(1) 横浜山下公園を中心とする居留地でのテニスの発祥

テニス発祥の歴史を遡ると、近代テニスの始まりはイギリスのウィングフィールド少佐によって始まったとされている。1864 年に、二十位フィートの間隔で二本の支柱を立て、その支柱の間に長方形のネットを張る、という砂時計型のコートを使った「ローン・テニス」を行った。現在のようなテニスコートの形になったのは、1877 年にヘンリー・ジョーンズが全英クラブにローン・テニスを追加採用した時である[6]。

日本へのテニスの導入時期、場所については諸説ある。時期は 1870（明治 3）年頃～ 1878（明治 11）年頃であり主に外国人居留地で行われていたとするもの、又、体操伝習所の講師として招聘されたアメリカ人講師リーランドによって紹介されたとするもの等だ。

外国人居留地発祥説についても発祥の地については横浜、神戸がある。他にも築地、長崎のグラバー邸等の説があるが、この２つの地については明確な史料はないとされている[7]。ここでは、日本初のテニスクラブが結成されたとされる横浜でのテニスの実施について述べたい[8]。

横浜は、1859（安政５）年に開港されて以来、山手居留地にはイギリス人、アメリカ人が住んでいた。居留地では射撃、ボート、競馬、フットボール等あらゆるスポーツが行わ

れていた。開港から 11 年後の 1870 年に外国人によって山手公園が作られた。この公園は我が国最初の洋式公園とされている[9]。こうした時期に、故郷イギリスで流行し出したローンテニスというスポーツが居留地にも伝えられ、1878（明治 11）年に初めて横浜の山手公園でプレーされたとされている。外国人居留地には多くの外国人婦人も暮らしていた。当時、イギリスでも女性が行っているスポーツはクリケット程度しかなかった[10]。しかし、ローンテニスは本国イギリスでも女性がプレーするスポーツとして紹介され、居留地の外国人婦人もローンテニスに興味を持ったとされている。そして、1884 年には「レディス・ローンテニス・アンド・クリケット倶楽部」が創立された。当時は七千坪の土地にローンコートが十面、クレーコートが二面、合計十二面と花園があった。当時のメンバーは英国人女性のみで、山手公園の管理もこのクラブで行っていた。このクラブには日本人のハウスキーパーが雇われており、このハウスキーパーが人数が少ない際にラケットを握ったのが、この地における最初の日本人によるテニスのプレイ時期とされている[11]。

(2) リーランドによる伝習所への紹介

1878 年、リーランドが田中不二麿によって招聘された。彼が外国人講師の招聘を構想した背景は、アメリカでの体育視察の際により優れた体操を目の当たりにし、日本に導入しようと考えたと解釈される。彼は 1875 年にアメリカ百周年記念におけるフィラデルフィア博覧会を視察するために渡来し、アマースト大学での体操視察を行っていた。「余の渡来の際、アームスト大学付属体操学校の整備せるを目撃し、幸いに大学長は曾識の人なれば、是と商議する所あり、竟に該校出身のドクトル・リーランド氏を聘することとなれり」[12] との証言が残されている。リーランドは競技を広めるためではなく、アメリカの新しい体操を教える目的で招聘されたのである。

体操伝習所では 1879 年 4 月に第 1 回伝習員が入学し、カリキュラムに従い授業が始められた。同年の伝習所教則に書かれたカリキュラムは、体操術、英学、和漢学、数学、理学、図画となっている。さらに「但体操伝習所ハ、体育学ヲ教授スルヲ以ヲ本旨トス。故に英学以下ノ諸科は其大要ヲ学ブニ止ル者トス」と明記されているように、授業は体育学中心で、他の学科は大要を学ぶ程度であった。また、カリキュラムにある「体操術」の内容は「男子体操術・女子体操術・幼児体操術・美容術及び調声操法」[13] と書かれているように、まだ現在のスポーツと呼ばれるものは教えられていなかったと考えられる。その後、1880 年、1882 年のカリキュラムも残っているが、どちらもあくまで「体操」重視であった[14]。

1884 (明治 17) 年のカリキュラムで初めて今日のスポーツと呼ばれる科目が現れ始めた。そのカリキュラムで体操術は軽運動、歩兵操練、重運動、戸外運動、操櫓術に分けられ、その中の戸外運動の中で「ベースボール」が紹介されている[15]。けれども、テニスが授業内で行われたという資料は見当たらない。リーランド博士がアメリカから用具をとりいれて、体操伝習所で教えたという説が一般に広く知られているがこれとてそれを決定づける確たる証拠はないと考えられる。

しかし、1885 年に体操伝習所の教員であった坪井玄道と田中盛業が『戸外遊戯法』の中で「『ローンテニス』ハ、男女老幼巧拙ノ如何ヲ問ハズ、二人ニテモ三人ニテモ又四人ニテモ之ヲ演習シ得ルノ遊戯ナリ」と定義し、ローンテニスのルールや用具についても紹

介している[16]。よって、授業内かどうかはわからないが、リーランドによって何かしらの形でローンテニスが伝えられたことが推測できる。

(3) 2つの導入経緯のその後

第1項で述べたテニスの伝来地とされる横浜の外国人たちは、それ以後も硬球を使用した。1887（明治 20）年、英国外交官代表部の邸内にテニスコートが設けられ、テニスを通じで内外の人々の親睦を図ろうという気運が高まった。それが 1900（明治 33）年に現在の国会議事堂の敷地にコート建設用の土地が宮内庁を介して供給され、東京ローンテニス倶楽部が設立された。当時多くの国際親善試合がこのコートで行われたという[17]。この東京ローンテニス倶楽部では外国人との交流があったため開設当初から硬球が使用されていた[18]。外国人が行っていた硬球使用のローンテニスは、外国人と交流のあるごく一部の日本人に行われていたと考えられる。しかし、その硬球使用のローンテニスがテニスの全国的な普及に貢献したとは考え難い。

一方、第2項で述べたように体操伝習所に伝わったローンテニスは、硬球ではなく、当時の日本では安く手に入りやすい軟球を使用するようになった。軟式を導入することによってローンテニスが日本人により身近なものになり、全国に普及したと考えられる。よって、以下では前者の居留地から始まる硬式ではなく、後者の体操伝習所から始まる軟球を使用していたローンテニスについて研究していきたい。

2．東京高等師範学校を基点とした教育機関でのテニスの拡大

(1) 東京高等師範学校におけるテニスの発展

ａ．授業

リーランドが 1881（明治 14）年に帰国した後、彼の通訳を務めていた坪井玄道はリーランドの体育の知識や技術を受け継ぎ、体操伝習所の教師となった。体操伝習所は、1885年 3 月、実質的に東京師範学校付属体操伝習所となり、同年 12 月、省令をもって体操伝習所を東京師範学校付属体操伝習所と改めた[19]。既に明治 16 ～ 17 年頃から坪井の指導の下でテニスは行われており、ラケットやコートがすでに備えられていたという[20]。

そして 1886（明治 19）年、師範学校令に基づき「高等師範学校」として改編された。高等師範学校での体操科の学科（1899 年）は、国語、数学、理科、体操（普通体操、器械体操）[21]である。文化兼修体専修科でも運動系の科目は「柔道、又は撃剣」であり、テニスが授業内でカリキュラムとして組み込まれていたという記録はない[22]。

1902（明治 35）年、「高等師範学校」から「東京高等師範学校」へと改称。1915（大正 4）年には「東京高等師範学校規則」も改正され、その中で「学科ヲ分チテ文科理科トシ更に分チテ各三部トス前項学科の外特科トシテ体育科ヲ置ク」[23]と規定し、体育科が開設されることになった。その体育科に学科目については第 3 条で「体育科ノ学科目ハ修身、教育学、体操教練及競技、柔道、剣道、体育理論、解剖生理衛生及救急療法、心理学及倫理学、国語及漢文、英語、歴史トシ体操教練及競技、柔道及剣道ハ其一ヲ主トセシム」[24]と規定されている。その後、何度か規則改正があったが、体育関係の科目に大きな変化はみられなかった。1932（昭和 7）年の改正で「体操競技及教練」が「体操」「遊戯及競技」「教練」の 3 つの学科目に分かれた[25]。当時、「遊戯」としての意味合いが強かったロ

ーンテニスは、「遊戯及競技」の授業内で取り扱われたのではないかと推測することもできるが、実際に授業内で行ったという記述はない。

ｂ．部活

1896（明治 29）年、高等師範学校で嘉納治五郎校長によって運動部を統括する「運動会」が結成された。当初はローンテニス部を初め 7 部が存在し、生徒はその一部または数部に属し、毎日 30 分以上必ず所属部の運動をなす事が規定されていたという。当時の庭球部の生徒たちは、テニスに異常なまでに熱中しており、それらの様子は東京高等師範学校ローンテニス部によって書かれた『ローンテニス』(1902 年)を見てみても、垣間見ることができる。彼らは「ローンテニスの如き遊戯は其躰育の中の而かも一小部分と考へられて居るが余輩の見解では之は單に躰育の一小部分としてのみ考ふべきものでないと思ふ、」[26] と述べ、身体の健康のためだけでなく、テニスをすることで感じる「幸福」を得ることがテニスをする所以であると考えていたようである。つまり、プレーヤーたちの間では精神面の強化がテニスをすることの大切な要素の一つであったのではないだろうか。

以上のことから高等師範学校では授業でテニスを行っていたというよりも、部活動が活発であったことがうかがえる。そして、東京高等師範学校はテニス普及の基点であり、日本のテニス発祥の地でもあったと考えられる。

(2)小学校・女子教育機関でのテニスの普及

第 1 項で述べたように、東京高等師範学校はテニス普及に大きな役割を果たした。前掲の同校ローンテニス部『ローンテニス』において、

> 今やローンテニスは、欧米各国に於て非常にもてはやされて居ると同時に、我邦に於ても到る所に歓迎せられ東京では男女諸種の學校に行われ、倶樂部では紳士青年の間にもてはやさるゝと言ふ有様である、又地方でも師範、中學、高等女學校は言ふに及ばず、普く小學校にも採用せられんとし、現に採用して居る所も少なからざる次第である[27]。

とあり、テニスが様々な教育機関に普及していたことが伺える。当時は、東京の小学校より地方の小学校の方にテニスが普及していたようである[28]。理由は「こは一に教師其人を得さると、他は東京市の小學校は、地方に比すれば、其設備割合に不完全にして、充分に生徒の遊戯すべき運動場を有せざるによらずんばあらず」[29] というように、教師の力量に加え、設備の面で問題があったようである。実際に、地方の小学校では長野県、栃木県、奈良県、愛知県、秋田県等でテニスが行われており、長野県では特に松本地方に於いて女子生徒の間でもテニスが盛んだったとされている[30]。愛知県の小学校では、1897（明治 30）年頃には「山間僻地でもコートの設けラケットの備へのない學校は殆どない様になった」[31] という記録が残っている。

このように全国にテニスが広まった経緯としては、東京師範学校の卒業生が教師として地方に赴き、テニスを教えたことが考えられる。東京師範学校は、『ローンテニス』の他にも卒業生がテニスに関する書物を出し、テニスを教えることを奨励している。川上清一

[32]『実験ローンテニス』では「危険なく、面倒なく、男にも適し、女にも適し、男女混同して不可なることなき此ローンテニスの如く便利なるもの、外に存するか」[33]としてローンテニスが如何に優れた遊戯であるかを述べ、師範学校の生徒にローンテニス身に付けることを奨励している。学生が余暇に行うのに有効な遊戯であることに加え、「ひろく之を小學校に及ぼさしめんとするにあり、小學校に及ぼさんとするは、以て普く國民に及ぼし、我國人の運動嫌ひの風潮を矯め、以て國民の元氣を増すのに一助とならしめんとするにもあり、此目的を達する決して難きにあらず」[34]と、全国民の基礎体力を上げるため、テニスが有効であったという考えがあった様子が伺える。

又、もう１つの経緯として、東京師範学校の生徒が地方の師範学校に赴いてテニスを教えたこともあった。愛知第二師範学校庭球部編纂の『小学校の庭球』によれば、「偶々明治三十五年の四月東京高等師範學校の選手諸君が研究の爲め來校せられたるの好機があって、よき手本を示されたので大に庭球の方法も明かになり、興味も増し」[35]と、東京高等師範学校の生徒からの紹介で学校でテニスが盛んになった。又、地方の師範学校同士の対決も行われていて[36]、師範学校から師範学校へテニスが伝わり、発展して小学校でもプレイされるようになったのではないかと考えられる。

次に女子への普及について述べたい。高等女学校においては、週に３時間体操を課するのが定められていたが[37]、それ以外には運動をする機会があまりなかった。しかし、東京高等師範学校から赴任してきた教師等の出現によって、1895（明治 28）年頃から東京女子高等師範学校、又付属の高等女学校、華族女学校に於いてテニスが行われるようになり、1897 年頃からは栃木女学校、長野女学校、京都師範の女子部等の地方でもテニスが行われるようになった[38]。

女子に普及した要因の一つとして考えられるのが、当時テニスは体全体を用いるスポーツである上に、容態を優美に且つ高尚にするものと考えられていたことである。前掲の『ローンテニス』には、「ローンテニスの特色は全躰の筋肉を自由自在に運用し、関節を圓滑に回轉せしめ身躰を輕快ならしむると同時に其様態を優美に高尚にすると言ふ點である。正しき姿勢をとる様に勉めさへすれば、四肢の屈伸が自在で身躰が一般に優美になり、高尚にして雅致ある品格を作ることが出来る」[39]とある。当時の日本社会において、女性は男性とは違って家庭の中だけで生きるべきであり、若いうちに外で他の人と交わることははしたないという考えが広く広まっていた。しかしその一方で、国民義務の一部を女性も負担するべきであり、そのためには体力・気力を兼ね備えた高雅な女子を育成するように教育するべきであるという風潮が女子教育においてあったのも事実である。あまりにも派手になり過ぎて古くから続く日本人特有の女性らしさを失うことなく、かつ快活さも身につけることができるスポーツとして奨励されたのがテニスであったのではないだろうか。

第二節　協会の誕生とテニスの拡大

１．学校間でのテニスの試合

東京高等師範学校が日本におけるテニス流行の一端を担っていたことは第１章で述べたが、一方で神田一ツ橋の高等商業学校の存在も忘れてはならない。この二校を中心に庭球熱は高まっていったと言える。高師と高商が初めて対校試合を行ったのは、1898（明治 31）

年のことである。試合の方法は 5 回勝負、2 組抜き優退であった[40]。双方 7 組ずつの選手を、順番を決めて出し、5 回ゲームで 3 ゲーム先取した組を勝つとする複試合だった。2 組に勝つと優退組とされ、次の番が変わって試合を行った。こうして 7 組が最後まで試合を行った後、相手方に優退組がなければそのまま勝ちとなった。もし、双方に優退組があれば、優退組同士が試合をし、勝った方が優勝校となった[41]。第一回の高師対高商の対校試合はのちに学習院教授となった石井国次を大将とする高師方の圧勝であった。第二回の試合は翌 32 年の 3 月に行われたが、高師方は振るわず、高商の勝利となった[42]。高商には優秀な選手が沢山おり、高師は太刀打ちできなかった。その後何度か高師対高商の対校試合は開催され、明治 36・37 年頃までは高師高商の全盛時代であった。

一方で、それまでは高師対高商の対校試合しか行われていなかったが、1902（明治 35）年から高師と慶應の試合が行われることになる。最初の試合は、同年 5 月 7 日に大塚の高師のコートで行われ、高師の勝利に終わった。第 2 回の高師対慶應の試合は翌 1903 年 9 月 27 日に行われ、慶應義塾は普通部から小泉信三等を加え大いに実力を増していたが、勝利には至らなかった。次いで、同年 10 月 11 日に、高師が早稲田を迎える形で初めての試合が行われ、これが早稲田にとって最初の対外試合となった。結果は、高師の大勝であった[43]。しかし、1904 年を契機に高師・高商時代が終わりを迎え、早慶が台頭することとなる。高師対早稲田の試合は、1904 年 5 月 21 日午後 1 時から大塚コートで高師方の応援の中で行われた。早稲田は、岩田飯田組の活躍により、この試合で初めて高師に勝利した。同年秋には、初めて高商は早慶両校と一ツ橋の自校コートにて対面し、まず高尚対早稲田の戦いが 10 月 2 日に一ツ橋コートで行われたが、結局高商は早大の 7 組を破り高商の圧勝に終わった。次いで、慶應義塾との試合が 10 月 9 日同コートにおいて行われ、小泉信三率いる小泉組の活躍により高商 5 組を破り快勝した。これは慶應義塾にとっても思わぬ勝利であった。その後、1904 年 10 月 29 日から早慶第一回庭球試合が三田台上に位置していた慶應義塾のテニスコートで行われ初めた[44]。1905 年に入ると、高師・高商同伝統校は新興の早慶の力を抑えることができなくなり、しばらくの間高師・高商・早稲田・慶應義塾の四校の混戦が続くこととなった。

その他の高等教育機関でのテニスの普及に関しては記録が乏しいが、第三高等学校については、クラブ雑誌『岳水会』第一号(1900 年 3 月)において、

> 物に盛衰あるは自然の常、我ローンテニス部も基数を免るる能はずして、一射衰運に属せしも、幾多の人々の協力をえて再び盛況を致すをえたり。今や風寒く地凍るの時と雖も、場裏人影絶えることなく、技に於ても亦巧なる者少なからず。練習月を積まば造詣計るべからん。前途頗る多望といふべし。人或は此技を見て婦女子の戯となし喜ばざる者ありと雖も、皆皮想の見に誤られし者のみ、諸君もし炉辺に踞座して喃々空論に費すの時あらば、乞ふグラウンドに出てラケットを握れ。球を追うて至る時快いふべからざるべし[45]。

とあり、明治 20 年代の末期において三高ではローンテニスは盛んであって、その後少し衰退したが、1898（明治 31 年）の秋には再び盛況を呈するにいたったと考えられる。また、ローンテニス部は明治 1900 頃までは運動部[46]の内で最も人気があったらしく、1899

年 4 月 5 日には通学生対寄宿生のテニス・マッチも行われたという記録が残っている[47]。また、神戸高等商業学校においては、1902（明治 35）年が開校とされているが、1905 年には庭球部ができ、数々の有力選手を擁するようになった。これにより、神戸高商は関西地方の覇者となり、1906 年春に上京し 4 月 21 日、まず東京高師と戦い、24 日慶應義塾、26 日早稲田、28 日東京高商と相次いで戦ったが全て大敗に終わった[48]。このように、この当時関西の覇者であった神戸高商であったが、その技量は東京の四校と比べると微力なもので、当時の関東と関西のテニスの実力には大きな差があったことが、この結果から読み取ることができる。

２．慶應義塾の硬式球の採用

明治時代には日本のテニスというのはほとんど軟式化し、東京では早稲田と慶應義塾が主軸となっていたものの、まだまだ高等師範学校・高等商業学校・早稲田・慶應義塾の四校が覇権を争っているという状態であったというのは第一節でも述べた通りである。軟式庭球は関東だけでなく関西地方、そして全国各地で全盛を誇っており、大正に入ってからもこのまま軟式庭球の勢いは衰えないと思われていた。しかし、1913（大正 2）年に慶應義塾庭球部が突然硬式球を採用すると発表し、軟式庭球から硬式庭球へと転向してしまったのである。

この慶應義塾庭球部の突然の決定は、庭球を知る者たちの間ではとても衝撃的なものであり、軟式庭球界にとっても非常に大打撃であった。そもそも、最初に日本に庭球というものが入ってきたときは硬球で紹介されており、外国人居留地や東京ローンテニス倶楽部[49]、軽井沢[50]などでは明治時代から硬球が採用されていたところも存在したようである。だが、硬球を使うと用具面で費用が掛かりすぎるということで学生たちの間では軟式の庭球が行われるようになり、そちらが主流となっていったのである。慶應義塾が硬式庭球を採用する前に、早稲田出身の三神八四郎という人が米国のシカゴ大学での経験を元に硬球の採用を強く主張していた。大正元年の冬に『武俠世界』誌(1912 年)に載った一文には、外国から輸入したスポーツであるのに外国と試合ができないのは庭球ばかりであり、世界と戦っていくために、近い将来硬球を使用するようになるのは明白であると書かれている[51]。だが、当時は世の中がこの主張に耳を貸さず、実行にまで至らなかったようである。では、慶應義塾庭球部の硬式庭球への転向はどのような経緯を辿ったのだろうか。

当時の日本は、国家全体で明治時代に開国してから海外の国々に追いつき、追い越すということを目標に掲げていた。軍事力、文化、経済力などが世界の国々と互角に張り合えるような国になることを目指していたのである。こういった世の中の風潮が慶應義塾の庭球部の者たちにもかなり影響を与えていたのであろう。慶應義塾の庭球部の者たちは、慶應義塾を卒業し、のちに庭球の国際試合にも数多く参加することになる熊谷一弥は自身が著した『テニス』(1923 年)という著作において慶應義塾の硬球採用のことを以下のように述べている。

> 凡そ近世の風潮は萬事に國際的となつて文明開化の度が進むに連れて、地球上各地間の距離は時間的に短縮される。従つて其の國特有のものも漸時に國際化され、之に適應せざるものは衰亡に至る可きである。故に現今の理想としては、單に一州一國を目

的とせずして、全世界を目標として進まねばならぬ。此の意味に於て、畸形的庭球たる軟式を捨て、硬球に入らねばならぬ[52]。

つまり、文明開化が進んだ大正期において、国際化の流れに乗って世界にフィールドを広げていかないと庭球は衰退していってしまうと彼は述べているのである。また熊谷は、日本人は外人に体格や力でも負けているのだから、「性質上他の競技に較べて力を要する事少く、技術上に重きを置く事の多い點から考へても、兎も角も外國人に對して立派に對等に對抗し得るものは今日の處庭球より他にはない」[53]とも考えていたようである。このような有利な庭球であるにも関わらず、未だに世界で通用するような素晴らしい選手が現れないということは、「一に硬球の使用の日淺きと、他方に於て未だ軟式の勢力盛にして、硬球の普及が行はれて居ない」[54]からであると熊谷は述べている。世界の国々とも互角に戦い、それ以上に勝利するスポーツとして庭球はふさわしく、そのためにも国際的な球である硬球を使用すべきであると主張しているのである。これらが慶應義塾が硬式球を採用しようとした主な流であろう。

慶應義塾の学生には海外留学をするものも多くいた。世界に留学し、世界の庭球のプレーを見たり実際に対戦してきた慶應義塾庭球部の者たちにとって、世界と戦いたい、日本の庭球を世界に通用できるものにしたいという思いはかなり強かったであろうと考えられる。たとえば、慶應義塾庭球部の旧選手でありのちに部長になった小泉信三は、英国留学中に 1913（大正２）年のウィンブルドン大会を見て、慶應義塾の硬球採用は喜ばしいことであり、日本のテニスはぜひとも国際的にしなければならないという内容の便りを送ってきたとの記録が残っている[55]。このように、慶應義塾は硬球の採用を進め、国際化に向けて硬式庭球を練習するようになっていった。

しかし、当時の世論はこの転向に厳しく、雑誌などではかなり批判もされていたようである。当時の日本では、軟式庭球で世界を統一しようと騒がれるほど軟式は庭球とイコール関係にあり、軟球を使わないということは、あり得ない考えだとされていた。軟式庭球は日本が独自に開発し発展させてきたスポーツであるから、プライドというものもあったのであろう。1913 年に発行された雑誌『武俠世界』第二巻五号において、「此歴史と、然して日本独自の技術と、さらに其興味を捨てて、一朝にして硬球の使用を実行せんとする」[56]慶應義塾の庭球部に対して疑問と反論が書かれている。この著者は、慶應義塾が当時の東都における一リーグを形作る早稲田・高商・高師に何も通知せずに、突然硬球を使用すると発表してしまったことに遺憾の意を表明しており、硬球を使って好打した先例を聞いたことがないが、慶應義塾はきちんと硬球を研究したのかと疑問を呈している。また、軟式庭球にもまだまだ探究すべきところがたくさんあるにも関わらず、それを途中でやめてしまうことにも疑問を呈し、外国人と試合がしたいからといって硬球を使用すると言うのならば軟式を外国で流行させれば良いのではないかとまで述べている[57]。

このように、雑誌ひとつ見ても世間の驚きや戸惑いが感じられる。慶應義塾庭球部の熊谷も、自分の所属する部が硬球へ転向することに対して 4 つの問題点(費用の増加・軟式への愛惜の念・興味不徹底・奨勵機關の不十分)を挙げているが[58]、費用に関しては「個々に對する價格には七倍の相違はあつても、耐久力の如何によつて相殺されることを考えなければならぬ」[59]と述べ、愛惜の念に関しても、「軟球にせよ硬球にせよ、要領は同じであ

るから、硬球採用の初頭に當つては皆一様に見えても暫くすると、軟球の名手はやはり硬球の名手たり得るものである、従つて此點の懸念もさまで重大視す可きではない」としている[60]。

興味不徹底に関しては、「軟球を捨てゝ硬球を専心に練習すること三ヶ月に及べば、必ず軟球の庭球が小見らしくつまらぬものであると云うことがはつきり解る」[61]と述べ、奨勵機關がなくても有志者相互に直接努力して硬球普及に努力すれば良いと考えていたようである[62]。このように世の中で賛否両論のあった慶應義塾の硬式庭球の採用であるが、硬球採用から数カ月後に行われた慶應義塾のマニラ遠征、その他海外での数々の試合を経て、世論が次第に変わっていき、硬球を採用しようとする学校が増えていくのであった。

1913（大正 2）年 12 月 16 日に慶應義塾は庭球の試合に出場するためマニラに遠征をする。硬球を採用してから 8 か月しか経っていないにも関わらず、熊谷・野村・市川・三嘴の 4 人で海外遠征を行ったのである。4 人とも優勝することはできなかったが、熊谷－野村組のダブルスは決勝まで駒を進め、熊谷はシングルスでもセミファイナルまで進むことができた。たった 8 カ月しか経っていないのにも関わらずここまで世界と互角に戦えたという事実は、日本の硬式庭球界にとって大きな自信になった。このマニラ遠征を経験した熊谷は、技術面で研究を続けていけば近い将来必ず世界先進国になれると、世の中の懸念を一掃したのである[63]。

3．協会創立後の世界進出と戦争による中断

(1) 協会の創立と世界進出

このようにして硬球を採用し、海外でもその実力を見せつけた慶應義塾庭球部であったが、それ以後、日本の庭球界はどんどん海外に進出を果たしていくのである。その理由の一つとして、慶應義塾の選手などが海外で活躍する姿を見た他の学校が、徐々に硬球を採用し始めたことが挙げられる。早稲田は 1919（大正 8）年には硬球を採用し、高商も 1920 年には硬球を採用すると発表した。その他の各大学専門学校も 1920 年の秋を期に一度に硬球を採用するようになり、こうして日本中の学校が世界進出を視野に入れた庭球を始めるようになったのである。この節では、高等教育機関での庭球の発達によって日本庭球界がいかに世界進出をなし得たかについて見ていきたいと思う。

1915（大正 4）年に上海で行われた第二回極東オリンピック大会では、慶應義塾に在学中の熊谷と東京高等商業学校卒業の柏尾両選手が代表として参加し、熊谷はシングルスで優勝、熊谷－柏尾組のダブルスも優勝するという華々しい成績を残すことができた[64]。熊谷はその後、大正 5 年にもマニラで行われた東洋選手権大会で優勝し、1916 年に芝浦で行われた第三回極東オリンピック大会でも早稲田出身の三神とダブルスを組んで優勝した。また、1920 年にベルギーのアントワープで行われた国際オリンピック大会にも何人かの代表選手とともに出場し、熊谷はシングルスで準優勝、ダブルスでも柏尾と組んで準優勝を果たし、日本は合計 2 個の銀メダルを獲得した[65]。テニスは、日本が初めてオリンピックでメダルを獲得した競技であり、そのオリンピックがこのアントワープ大会だったのである。今挙げた熊谷や柏尾は早い段階から世界で活躍をした高等教育機関出身の日本人選手であるが、その他にも有名な選手として慶應義塾出身の野村、神戸高商出身の岡、東京高商出身の清水などがおり、高等教育機関で庭球を学んだ者たちがプロとして世界へ

羽ばたいていった様子がうかがえる[66]。

1921（大正 10）年、日本テニスの基礎を固めるために日本庭球協会が創立された。この年に創立された理由としては、日本庭球協会を創立することで正式に国際庭球連盟に加入し、同年のデビスカップ試合(以後デ杯)[67]に出場するためであった。この前年、1920 年には清水善造が日本人初のウィンブルドン出場を果たしており、日本人の世界大会への進出が行われ始めていた時であった。1921 年、日本はデ杯に参加し、初出場でありながらも熊谷・清水両選手の活躍によりチャレンジラウンドに進出する。チャレンジラウンドでは米選手チルデンと清水が対戦した。当時英米仏のチャンピオンであったチルデンが容易に勝利すると思われていたが、この試合は接戦となり、最終的に負けはしたものの清水のテニスは観客を驚かせた。このデ杯は当時の日本にとって驚異的な戦績であり、日本の庭球が世界に認められる存在になった一つの契機にもなったのである[68]。しかし、デ杯出場のために形式的に創設された日本庭球協会は、表面上だけの役割しか果たしておらず、実質的なものは何もなかった。

同じ 1921 年の秋に、東京の大学、専門学校と主な倶楽部に対して、デ杯の来歴と協会成立の急務である趣意書を送り、協会に加入することを求めた[69]。また、一方で各学校、倶楽部の有力者と会合を行い、協会規約やその他の草案の立案を急いだ。この節の冒頭で述べたように、1913 年に慶應義塾庭球部が突然硬式球を採用すると発表してから東京の各大学専門学校が続々と硬球の採用を行っていた。東京での協会成立の見込みがついた後、西下し、当時の大阪ローンテニス倶楽部の首脳者と手を携えて協会の創立に努力するよう提議した。これによって、関東支部、次いで関西支部も成立し、協会成立まで至った。この頃、関西の各大学専門学校も硬球を採用し始めており、日本庭球協会は実質的に日本の庭球(硬球)を統一する代表機関となった。創立当時の組織は、本部を東京に、大阪、福岡に支部を置き、学校、倶楽部を一会員として支部を作った。各支部から委員を出し、本部の事務を取り扱い、その委員から会長を互選した。委員は各倶楽部、各学校から一名とした。これらの協会組織構成からも分かる通り、当時の協会にとって各学校や倶楽部の存在は大きく彼らなしには協会は創立さえ難しい状況だった。よって、当時協会と各学校や倶楽部は別個のものとしてではなく、相互に密接に連携しながらテニス普及へと尽力していたと考えることができるだろう。

日本庭球協会創立と同年の 1922（大正 11）年には全日本選手権(男子)が開始される。初代単優勝は福田雅之助であった。翌年には全日本ランキング制度が開始された。1924（大正 13）年には、パリ五輪で原田武一がベスト 8 進出を果たし[70]、協会創立と共に日本人の世界大会の門戸も着々と開かれるようになった。同年、今度は全日本選手権女子が開始され男女共に日本における全国的な試合が行われるようになった。その後も、1926（大正 15）年、1927（昭和 2）年に行われたデビスカップにおいてインターゾーン決勝まで進出し、慶應義塾出身の原田が活躍をしている。

このように見ていくと、高等教育機関での庭球の発達というものが、日本の庭球界の世界進出に大きな役割を果たしていることが分かる。プロとして世界大会に出場する選手のほとんどが、庭球が有名な学校を卒業しており、高等教育機関での庭球の普及なくして世界レベルで戦えるようなテニスの発達はあり得なかったのではないかと考える。そして、高等教育機関の中でも鍵となってくるのが、硬球をいち早く採用した慶應義塾だろう。慶

應義塾が硬球を採用し、世の中が世界に目を向けたことで、発展がより加速したのではないだろうか。

(2) 早慶戦の中止、テニスの停滞

テニスの早慶戦の歴史は、1904（明治 37）年に始まる。同年に三田コートにて、第一回早慶戦が開催され、接戦の末中止となった。しかし、2 年後の 1906 年に早慶野球部の紛擾[71]が原因となり、全ての競技の両校の対校試合が中止となった。その後、1922（大正 11）年に早慶戦が復活し、毎年春秋の年 2 回開催されている。大正末期は、早稲田が慶應義塾を圧倒し続けるが、1927（昭和 2）年は春秋ともに早稲田に勝利し、早稲田の黄金時代に終止符を打つことが出来た記念すべき年であった。その後も、毎年春と秋の 2 回ずつ早慶戦は開催された。

前項までに記されてきたように、日本はオリンピックやデビスカップへの出場によって、世界進出を果たし、世界に日本のテニスのレベルを思い知らせるような活躍を見せてきた。テニスで日本が活躍するとともに、テニスは日本国内で普及していく。ボールの硬球化や教会の設立、世界進出と大躍進を遂げるテニス界であるが、戦争によって様々な弊害を受けることとなる。

日華事変から 4 年経過した 1939（昭和 14）年には、国内は物資が欠乏し、ボールは配給制になっていた。前項で述べたように、1940 年には欧州大戦開戦のために、デビスカップは中止となった。ゴムがなくなったことで、ボールの配給がなくなり。庭球界はどん底に陥ることとなる。どん底に陥りながらも、1940 年には日独伊三国同盟条約締結記念として、ドイツ選手を招いて交換試合の開催や他の国内の試合も開催されている。物資不足にもかかわらず、試合が開催される中で、反英米のあおりを受けて、1941 年には審判用語の日本語版が作成されることとなる。第 12 回明治神宮大会から、15 対零、ジュースを 40 対 40、リードを甲勝ち越しなどとテニス用語を日本語読みし始めるようになった。その後、国内体育の戦時体制として、各種民間の体育団体を統合して、総合体育団としての第二本体育会を成立させた。日本庭球協会は臨時総会を開催し、22 年の歴史を終え、第日本体育会の庭球会として存続した。

当時、戦争が勃発する中、選手がどのような思いを抱きテニスをプレーしていたか、下記引用文から察することが出来る。

> 12 月 8 日に太平洋戦争が勃発したのであった。私は偶々その約一か月前、庭球部の主将という大任を仰付かった直後で、塾の庭球部として此の国家の重大時期に以下に処して行くかと言う大問題に直面したわけである。私たちは其のような難題にぶつかる度に小泉先生[72]に教えを説いた。先生の教えは「国家が君たちを必要とするまでは今まで通り学生の本分を守り、許される限りテニスの練習に励み己を磨くことだ」と言うもので、私達も之に従い引き続きテニスに精進し、試合にも出場した次第であった[73]。

上記の引用文の通り、審判用語の日本語化や協会の解体など、戦争の影響を受けながらもテニスの練習や試合を続けていた。しかし。早慶戦もついに 1944（昭和 19）年に中止

となる。下記の引用文からは、悔しくも早慶戦が中止となり、学生たちが戦地へ赴いた姿が見受けられる。

> 庭球部の傅銃も近代性を加えて完成され近藤達彌、田邊雅司等、数多くの名マネージャーが居たのもこの頃であった。然し、所謂非常時の壓迫更に今次戦争の開始は次第に我が部庭球部の存在を苦しめ、又學徒出陣學徒動員のため昭和 19 年春の早慶戦を最後として庭球部の存在は許されなくなった。そして部員はラケットを銃に代えて、遥かなるコートに思いを寄せつつ各地に戦い、そしてある人々は永久に歸って来なかった[74]。

このように、明治からの歴史を持つテニスの早慶戦は、1944（昭和 19）年に一度終わりを告げるのである。

むすび

研究の結果、テニスの伝来から発展まで、様々な流れがあることが分かった。テニスが日本に伝来した方法は、外国人が居留地でプレイしていたものと、リーランドが体操伝習所に伝えたものの２つのものがあり、この２つはその後前者が外国人を中心としたテニスクラブに繋がり、後者が東京高等師範学校を始めとする教育機関への普及へと繋がった。この２つの流れはこの時点では連続しておらず､独立して発展していったことが分かった。

更に、後者の東京師範学校を源流としたテニスの発展においても、そこから２つの流れに分かれていると考えられる。１つは、大学同士の対抗戦を中心として早慶等の私立学校に伝わり、オリンピックのメダリストを生むまでに強い選手を育てたもの、もう１つは、第１章第３節第２項で述べたようなテニスを老若男女が制約なく体力作りを出来る優れたスポーツとして国民に広く伝えるために小学校、女子教育機関でも行われたという流れである。

前者については、慶應義塾が硬球を採用したことが大きく日本のテニスの強化、普及に繋がっている。この行動には、日本人が世界と互角に渡り合えるスポーツとしてテニスを唯一のものと考え強化したいという姿勢が表れていると言える。当時、東京師範学校や早慶を始めとする高等教育機関においてはっきりと授業のカリキュラムとしてテニスが行われていたという記録は、今回発見することが出来なかった。そのためこれが、教育がテニスの発展に果たした役割と明言は出来ないが、当時テニスが公式にプレーされていたのは殆どが高等教育機関であり、その１つである慶應義塾で硬式球の採用並びに海外遠征が行われたということは教育とテニスの発展の強い関わりを示すものだと言える。又、後者についても今回の研究で同様に実際に授業で行われていたという記録を見付けることが出来なかった。しかし、多くの国民がテニスに親しむきっかけとして大きな役割を果たしたと考えられる。

それでは、現在のテニスの人気・発展に対してはどの流れでの普及が一番影響しているのだろうか。ここから先は今回の研究の範囲外であるため推論になってしまうが、私達は全ての流れが交わり、現在のテニスの人気に影響していると考えている。現在は、400 を越えるテニスクラブがある。そのテニスクラブも、社交の場として居留地での外国人のテ

ニスクラブから始まる東京ローンテニス倶楽部の流れを汲むもの、プロスポーツ選手養成のために幼い頃からテニスの英才教育を施し、錦織選手のようにプロとして世界で活躍する人を育てるようなもの、レジャーとして楽しむためのクラブもある。大学にも多くのテニスサークルがあるが、クラブやサークルに所属しない人でもテニスをレジャーとして行った経験のある人は多い。このようなテニスの楽しみ方の多様性に、「老若男女が楽しめるスポーツ」としてテニスを奨励した高等師範学校を始めとする教育機関の取り組みも貢献しているのではないか。今回の研究ではテニスクラブの詳しい発展の経緯や、明治期に小学校でプレイされていたテニスのその後等を明らかにすることが出来ず、この推論も論証できないので、その点については今後の課題にしたい。

〔註〕

（1）日本生産性本部編、『レジャー白書 2010』生産社出版、2010 年。
（2）＜ http://www.jtia-tennis.com/jtia/hokokusho/h21-jigyouhoukoku.pdf ＞「日本テニス事業協会ホームページ」より。
（3）青山学院体育研究所ホームページより。
（4）日本軟式庭球連盟『日本庭球史：軟式百年』遊技社、1985 年。
（5）熊谷一弥『テニスを生涯の友として』講談社、1997 年。
（6）表孟宏『テニスの源流を求めて』大修館書店、1997 年、32 頁。
（7）福田雅之助『庭球百年』時事通信社、1976 年、58 頁。
（8）横浜インターナショナル・テニス・コミュニティ『横浜インターナショナル・テニス・コミュニティ 130 年のあゆみ：日本テニスの発祥の地：1878 年～ 2008 年＝ A history of Yokohama International Tennis Community：the birthplace of tennis in Japan：130th anniversary』横浜インターナショナル・テニス・コミュニティ、2008 年、17 頁。
（9）横浜市環境創造局ホームページ＜ http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/green/＞より。
（10）前掲『横浜インターナショナル・テニス・コミュニティ 130 年のあゆみ： 日本テニスの発祥の地 :1878 年～ 2008 年 = A history of Yokohama International Tennis Community：the birthplace of tennis in Japan：130th anniversary』、22 頁。
（11）前掲、『庭球百年』、58 頁。
（12）副島八十六『開国五十年史 上巻』開国 50 年史発行所、1970 年、731-732 頁。
（13）東京高等師範学校体育科創設八十年記念行事委員会『茗渓体育八十年』菜摘社、1995 年。
（14）「歩兵操練ノ一科ヲ附設シ陸軍士官ヲ招聘シ生徒ヲシテ毎週三回演習ニ従事セシ」とし、歩兵体操を導入している（前掲『茗渓体育八十年』、10 頁）。
（15）体操伝習所編『体操伝習所一覧』体操伝習所、1884 年、19 頁。
（16）坪井玄道『戸外遊戯法』金港堂、1885 年、67 頁。
（17）東京ローンテニス倶楽部 HP ＜ http://www.tltc.jp/public/public.html ＞。
（18）前掲『日本庭球史』、24 頁。
（19）前掲『茗渓体育八十年』。
（20）同上、163 頁。
（21）同上、37 頁。
（22）前掲『茗渓体育八十年』、40 頁。
（23）東京高等師範学校編『東京高等師範学校一覧 明治45～大正10年度』1921 年、53 頁。

(24) 同上、54 頁。
(25) 東京文理科大学編『東京文理科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧 昭和４・６・７年度』1932 年、114 頁。
(26) 東京高等師範学校ローンテニス部『ローンテニス』金港堂、1902 年、2 頁。
(27) 同上、9 頁。
(28) 高橋清一『実験ローンテニス』金昌堂、1900 年、123 頁。
(29) 同上、122 頁。
(30) 同上、123 頁。
(31) 愛知第二師範学校庭球部編『小学校の庭球』文学同志会、1906 年、126 頁。
(32) 高橋清一は当時、東京高等師範学校教授。後に女子高等師範学校長も務めた。
(33) 前掲『実験ローンテニス』、124 頁。
(34) 同上、132 頁。
(35) 前掲『小学校の庭球』、3 頁。
(36) 前掲『実験ローンテニス』、130 頁。
(37) 東京女子高等師範学校編『東京女子高等師範学校六十年史』東京女子高等師範学校、1934 年、193 頁。
(38) 前掲『実験ローンテニス』、134 頁。
(39) 前掲『ローンテニス』、193 頁。
(40)「優退」とは、続けて一定数勝った後、試合規定により試合から引き下がることをいう。
(41) 福田雅之助『庭球百年 改字新版』時事通信社、1976 年、4 頁。
(42) 同上、4-5 頁。
(43) 同上、6-7 頁。
(44) 同上、8-9 頁。
(45) 日本軟式庭球連盟『日本庭球史：軟式百年』遊技社、1985 年、43 頁。
(46) 明治 31 年当時の三高の運動部は、陸上運動部、水泳運動部、柔道撃剣部があり、さらに陸上運動部は陸上部、ローンテニス部、ベースボール部、フットボール・クリケット部の四部に分かれていた。
(47) 前掲『日本庭球史：軟式百年』、43 頁。
(48) 同上、45 頁。
(49) 明治 33 年（一説には明治 34 年）に、広沢金次郎、朝吹常吉、田中銀之助らによって創設された、内外人の社交を目的とした日本で最も古い倶楽部である。設備や雰囲気も素晴らしく、外国の著名なプレーヤーを迎え入れる際によく利用された。
(50) 古くから外国人、主に日本に来ていた宣教師らによって開拓された土地であり、外国人も多くいたため庭球も古くから行われていた。日本で硬球が採用された当初、トーナメントは全国的にも非常に少なかったため、軽井沢は日本のプレーヤーにとって楽しみの一つとなっていたようである。
(51) 前掲『庭球百年 改字新版』、47-48 頁。
(52) 熊谷一弥『テニス』改造社、1923 年、191 頁。
(53) 同上、191 頁。
(54) 同上、193 頁。
(55) 前掲『庭球百年 改字新版』、48 頁。
(56) 前掲『日本庭球史：軟式百年』、59 頁。
(57) 同上、59-62 頁。
(58) 前掲、熊谷一弥『テニス』、196-197 頁。

(59) 同上、198 頁。
(60) 同上、200 頁。
(61) 同上、202 頁。
(62) 同上、203 頁。
(63) 前掲『庭球百年 改字新版』、50 頁。
(64) 熊谷は、シングルス決勝で比島のファルガスと対戦。試合結果は 6 対 3、6 対 4、6 対 0 とストレート勝ちであった。ダブルスではファルガス、スアレス組を 6 対 0、6 対 2、0 対 6、6 対 4 で破り、日本庭球の強さを見せつけた。
(65) 熊谷はシングルスのファイナルで南アフリカ出身のルイス・レイモンドと対戦。ダブルスにおいては、英国のマックス・ウーズナムとノエル・ターンブル組にファイナルで敗れてしまう。その後のオリンピックの流れは以下のようになっている。

年	オリンピックの回数と開催地	大会におけるテニスの歴史
1877		第 1 回ウィンブルドン開催
1881		第 1 回全米開催
1891		第 1 回全仏開催
1896	第 1 回アテネ	テニスを含む 9 種目で競技
1900	第 2 回パリ	第 1 回デ杯開催
1904	第 3 回セントルイス	
1905		第 1 回全豪開催
1908	第 4 回ロンドン	
1912	第 5 回ストックホルム	※日本オリンピック初出場（陸上）
1916	第 6 回ベルリン	※第一次世界大戦のため中止
1920	第 7 回アントワープ	日本初メダル
1924	第 8 回パリ	
1928	第 9 回アムステルダム	オリンピックの種目からテニスが外れる
※ 9 回大会から 22 回大会までテニスはオリピックの舞台から姿を消す。		
1984	第 23 回ロサンゼルス	エキシビジョンとしてテニス復帰
1988	第 24 回ソウル	正式種目としてテニス復帰。プロ選手解禁
1992	第 25 回バルセロナ	
1996	第 26 回アトランタ	伊達公子ベスト 8　杉山愛ベスト 16
2000	第 27 回シドニー	
2004	第 28 回アテネ	杉山愛・浅越しのぶ　ダブルス 4 位入賞

(66) なお、オリンピックで日本が初めてメダルを獲得した競技がテニスであった。その快挙を遂げたオリンピックとは、1920 年にアントワープにて開催されたものである。熊谷一弥選手のシングルス、熊谷一弥・柏尾誠一郎選手のダブルスで、合計 2 種目の銀メダルを獲得したのだ。熊谷選手はシングルスのファイナルで南アフリカ出身のルイス・レイモンド選手と対戦し、惜しくも負けてしまう。熊谷と柏尾ペアのダブルスも、英国のマックス・ウーズナムとノエル・ターンブルのペアにファイナルで敗れてしまった。

1996 年のアトランタオリンピックでは、伊達公子がシングルスで活躍する。3 回戦でブルガリアのマレーバにストレート勝ちし、次のサンチェス戦に好調で臨んだ。再三チャンスがありながら敗れてしまったあまりに惜しいゲームだった。一方杉山愛は、ダブルスでは 1 回戦にストレートで敗れたが、シングルスでは第 15 シードのマルチナ・ヒンギスをストレートで破り、3

回戦まで進出している。

2004 年のアテネオリンピックでは、アトランタ大会での悔しさをバネに、杉山愛は浅越しのぶとダブルスで 4 位に入賞した。2008 年の北京オリンピックは、ベテランの杉山愛、18 歳の錦織圭、森田あゆみというチーム編成で臨んだ。杉山のオリンピック出場は 96 年アトランタ大会以来 4 大会連続出場を遂げている。男子の出場においては、シドニー大会でダブルスにトーマス嶋田・岩淵聡ペアが出場して以来、2 大会ぶりであり、シングルスでは、アトランタ大会で出場した松岡修造以来の 3 大会ぶりであった。18 歳でのオリンピック出場は史上最年少である。しかし 1988 年ソウルオリンピックでテニスが復帰してから、男子シングルスで日本選手は勝ち星を挙げていない。現在日本テニス協会では、オリンピックで日の丸を掲げるため、2012 年でメダル獲得、2016 年では金メダルの獲得を目標としているようだ。

(67) デビスカップ(DavisCup)は、国際テニス連盟(ITF)が主催する、男子の国/地域対抗戦で、実質的にはチーム世界選手権である。この競技は 1900 年に、当時まだハーバードの学生選手だったドワイト・フィリー・デビスらの提案を受け入れ、米テニス協会(USTA)『米英対抗』として始めたのが始まりである。

(68) 前掲『庭球百年 改字新版』、66 頁。

(69) 同上、67 頁。

(70) 同上、71 頁。

(71) 1901（明治 34）年から始まった野球の早慶戦は年を追うごとに盛んになり、両校の対抗意識も並々ならぬものになった。早慶戦第一回戦は同年戸塚球場で行なわれ、慶應義塾が２対１で勝ち、第二回戦は三田綱町グランドで行われ早稲田が３対０で勝った。決勝戦は11月11日、三田で行う事になっていたが余りに興奮した両校応援団の殺気立った空気を憂慮して、慶應義塾鎌田塾長が早大大隈総長、阿部磯雄体育部長を訪れ協議の結果、遂に第三回戦は中止される事に決定した。その後、早大側から早慶戦復活の申し入れが再三なされたが、ならず、これを機に1922（大正11）年まで早慶両校間の一切の対抗競技が中絶された。

(72) 小泉信三は、1888（明治21）年、かつて塾長をつとめたことのある小泉信吉を父として東京市芝区三田に生まれる。慶應義塾普通部を経て1910年3月、大学部政治科を卒業し、大学部教員となった。1916（大正5）年3月の帰朝後は、1920年4月に経済学部教授となり、1924年1月図書館監督、1933（昭和8）年11月には選ばれて塾長に就任、以来1947年1月退任にいたるまでの13年余の長期にわたり塾務につくした。高校時より庭球部に入部、大学でもテニスを続け、大正11年には庭球部部長を務めている。

(73) 庭球三田会『慶應庭球 100 年』慶應義塾体育会庭球部、2001 年、103 頁。

(74) 同上、102 頁。

第四章　スキー

はじめに

今年で日本にスキーが伝わってちょうど 100 年を迎える。現在では、スキーは冬期における代表的なレジャースポーツとして国民に広く親しまれている。1990 年代に爆発的な人気を博した勢いは薄れ、スキー人口は減少の一途を辿っているが[1]、スノーボードの登場や、また最近ではカービングスキーやファンスキーなど新タイプのスキー板が登場し、スキーの多様化も進んでいる。

スキーは紀元前から北欧などの一年中雪に閉ざされてしまう地方で使用されていたことが壁画や発掘された道具から推定されている。当時は交通の手段や狩猟のための道具として発達したと考えられている。日本ではカンジキで雪の上を歩いていたという記録はあるが、スキーを意味するものはない[2]。スキーの技術が導入されたのは、1911(明治 44)年新潟県高田市（現在の上越市）の歩兵第五十八連隊の鶴見大尉以下の将校達に、オーストリアの駐日武官として来ていたレルヒ少佐がオーストリア・スキーを指導したのが最初である[3]。軍隊へスキーが取り入れられて間もなく、民間人にも受け入れられていき、同年には早くも高田スキー倶楽部が設立されている[4]。以後、日本スキー連盟の設立や国際スキー連盟への加盟、冬季オリンピック大会への参加など、日本におけるスキーの普及は急激に進む。

本研究においては、チーム内の全員がスキーを経験したことがあり、特に地方出身者にとってスキーは非常に身近な存在であった。その地方出身者の地元である新潟、群馬、北海道といった降雪地方において、経済の活性化や地域の雇用を支えてきた重要な観光産業でもあるスキーは現在多くの課題を抱えており、冬場の帰省でそれを目の当たりにすることもあった。我々にとって身近なものとなっているスキーの発展を探ることで、学校現場におけるスポーツ教育、さらには地元の今後の発展に対する新たな知見を得られるのではないかと考えている。

研究方法等については、我々教育学専攻の人間として、単にスキー史を探るのではなく、教育学的視点、つまり学校教育の果たした役割を主な観点としたい。そこで、スキーの日本における普及の動向と、その普及の動向に与えた学校教育の役割を分析する。ここでいう「普及」については第二節で詳細に述べるが、我々の考える「普及」とは、スキー一般の普及ではなく、あくまで学校関連におけるスキーの普及と捉えることを、予め確認しておく。教育学的視点からみたスキーの発達・発展に関する歴史文脈については、直接的に書かれた文献や研究論文等の存在が乏しいため、本研究がこの分野に一石を投じることが出来れば幸いである。

第一節　日本におけるスキー導入の経緯――コラー・レルヒ・永井を中心に

１．コラーとレルヒによるスキーの普及

初めて日本にスキーが導入されたのは 1809(文化 6)年、間宮林蔵が樺太探検を行った後に著した『北蝦夷図説』に掲載されたイラストである(図１)[5]。それは樺太アイヌが冬期間に歩行道具として用いていた「歩くスキー」であり「ストー」と呼ばれていたロシア

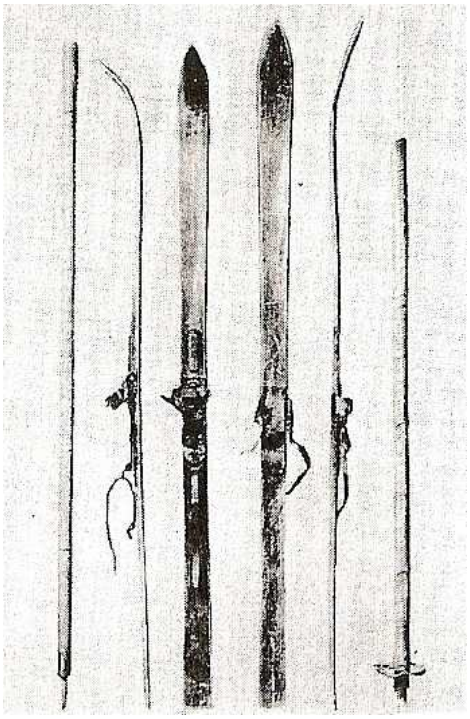
式寒敷である。

一方、日本に初めてスキーが持ち込まれたのは 1895(明治 28)年に松川敏胤大尉が日清戦争の際にスキーを持ち帰った時のことである[6]。

スキーが日本に導入されることとなる大きな契機として、1902(明治 35)年の八甲田山遭難事件がある。この事件は青森県第八師団歩兵第五連隊が八甲田山で遭難し、約二百名の隊員が死亡したというものである。この事件に際し、翌 1903 年に神戸在住のノルウェー総領事ピーター・オテッセンがノルウェー軍のスキーと説明書を取り寄せ、日本陸軍に寄贈した。ピーター・オテッセンはスキーの導入を軍隊に進言したが、陸軍はその進言に耳を傾けることはせず、あまり反応を示さなかった。

（図１） 樺太原住民のストー

1911(明治 44)年にオーストリア軍参謀少佐レルヒが日本陸軍の軍事視察を目的として来日し、その際陸軍にスキーの技術を指導したというのが日本のスキー発祥として広く知られていることである。2011 年に日本スキー伝来百周年として記念式典が行われたり[7]、記念本が多数出版されたりしていることからも、レルヒの来日というのは日本のスキー史においてスタート地点とされていることがわかる[8]。しかし、レルヒが来日する三年前の 1908 年に東北帝国大学農科大学(現北海道大学)に大学予科のドイツ語教師として来日したハンス・コラーも学生にスキーを教えていた事実がある。そこで、まずこのハンス・コラーについて詳しく見ていくことにする。



（図２）ノルウェースキー[右]とアルパインスキー

スイス人のハンス・コラーは東北帝国大学農科大学予科のドイツ語講師として来日した。ドイツ語を教える際に使用していた教材の中にスキーの写真が掲載されており、学生たちがそれに興味をもった。そこでコラーは自国からスキーを一台取り寄せ(図２)[9]、学生の要望に答えて室内でスキーを穿いてみせた[10]。学生たちはこれに満足せず、自分たちでスキーをやってみようということになった。その時のことを後の北大スキー部創設者となる稲田昌植がこのように語っている。

コラー師によつて、室内で先づ誘発された未知のスキー熱は、當時の豫科生の間に高まり、それが漸次上昇し、もうコラー師の引止めも効を奏せず、遂に之を寛地に試みることになつたのである[11]。

しかしコラー自身はスキーの経験がなく、とても指導できる立場ではなかったため、学生たちはドイツ語教材に掲載されているスキーの写真を見て真似てみるなどし、自分たちでスキーの使い方を攻略しようとした。しかし滑り方がわからなかったと共に、スキー自体はコラーが取り寄せたものしかなかったため、学生たちは形の似ている馬橇屋に頼み、スキーを作らせた。もちろん見よう見まねで作ったものなので完全なものではないが、これを使ってスキーの練習を始めたのである[12]。学生のスキー熱に伴い、コラーはスキーを取り寄せた後ドイツ語のスキーの技術書も取り寄せ、ドイツ語を教える傍らスキーの使用法についても教えた。しかしもともとコラーはスキーに関心があったわけではなく、自分自身スキーの熟練者というわけでもなかったためかスキーに関する談話や著作を残していない(図３)[13]。

スキーを始めてまもなく、三角山に行く途中に側溝[左]に落ちたところを面白がって写真に撮ったようである。また、コラーが取り寄せたのはノルウェースキーであると言われている。

（図３）側溝に落ちておどけてみせているコラー

次にレルヒについて詳しくみていくことにする。先にも述べたがレルヒは日清と日露の両戦争に勝利した日本軍の軍事視察を目的として来日した。スキーの達人が来日すると聞いた当時の第十三師団長の長岡外史は、すぐにスキー研究委員会を作りレルヒが来日するまでの間に部下にスキーの研究を命じたが[14]、これについては失敗に終わっている。日本についたレルヒは東京滞在中に砲兵工廠に頼み墺国軍用スキー十台を自費で新調した[15]。これを持って高田に到着したのが 1911(明治 44)年の 1 月５日であり、同年１月 12 日に講習会が開かれた。これが本格的に準備された日本初のスキー講習会である。

（図４）郵便配達夫にスキーを教えるレルヒ

長岡外史はレルヒが来日する十年ほど前に軍事視察のため訪れた北欧でスキーを見て、日本の東北地方の冬期間における文明発展には非常に有効であると直感していた。そのためレルヒの講習会と並行して、民間人にもスキーを広める努力をしていった。具体的には、軍隊への指導のほかに民間人(図４)[16]、特に学校の先生への普及と、新聞を使

ってスキーを宣伝することなどであった[17]。

レルヒの高田での講習会は三十四日間に渡って行われ、内容としてはスキーの持ちかたから最後には高山における行軍や吹雪に対する行進法、軍装運動法や機関銃積載及び運搬法に至るまでであった[18]。

なぜコラーが北海道でスキーを導入したときではなく、それよりも後のレルヒが高田でスキーを教えたことが日本スキー発祥と言われているのか。これは大正時代にスキー発祥地論争というのが起こり、その際に当時の全日本スキー連盟の創設者でもあり初代会長でもあった稲田昌植が正式なスキー術を持ち込み全国普及へのきっかけを作った高田を発祥の地と定めため、これによって現在も高田を日本スキー発祥の地としているようである。

２．スキー普及における永井の活動

コラーやレルヒの他に日本におけるスキーの普及に携わった人物のうちの一人として体操家の永井道明がいる。永井は当時スウェーデン体操を取り入れるか否かという当時の体操問題を解決すべくスウェーデン体操を研究しにスウェーデンに留学した。永井はスウェーデンにおける冬季戸外遊戯の盛んな様子に感心し、現地でスキーを練習することとなった。その後帰国した永井は 1910（明治 43）年 12 月秋田県での体操講習会に出席し、その講習の余暇にスキーが実施された。このときは実際にスキーをはいてみた者が二、三人で他は見学だったことからスキーを紹介したに留まっただけであると言える。またスキー実施に関する記事もなかったことからも影響が乏しかったことがうかがえる。

山形県では、山形県新庄中学校にて実際にスキーが行われ、地元の新聞にもこのことについての記事が載った。当時の新庄中学校の校長であった佐藤孫六が永井と同級生であったことが関係しているようである。しかし当時は道具の調達が困難だったことから本格的なスキーの練習が行われたとは考えにくい。永井による秋田県や山形県でのスキーの紹介はスキー未発達の時代においてスキーの見聞を広める一役を果たしたといえるが、山形県新庄中学校以外具体化した例がないことからその影響は乏しかったのではないかと考えられる。

永井によるスキーの紹介もレルヒの講習会が行われる少し前に実施されているわけだが、永井はスキーの普及活動よりも体操問題の解決が先決事項であり、さらにその実施内容も体操問題の解決という本務上の余暇に行われ、短期間に各県で二、三人が試みた程度であり、その影響は乏しかった。一方先にも述べたように、レルヒによる第十三師団への講習は組織的・計画的にその影響を拡大していく。永井によるスキーの紹介が始まりとならない理由もここにあるのであろう。

また、レルヒは高田でスキー講習を行った後北海道の旭日第七師団へ転任を命ぜられ、ここでも高田にいたときのようにスキーの講習を行った。講習は三週間ほど行われたのだが、レルヒが去ってしまってからはスキーを進んで広めようとするものがなかなか現れず、その後高田のようなスキーの発展はみられなかったようである。

第二節　日本におけるスキー普及の動向

１．導入当初の普及の動向

(1) 本研究におけるスキー「普及」の定義

前述したように、本節では日本におけるスキーの普及の動向を探るが、普及の動向を探るうえで「普及」とはどのような状態かという点を明確にする必要性がある。本論文でスキーの普及をどう捉えるかという問題に関して念頭に置くべき事柄は、あるスポーツが「普及」したと言える状況は、そのスポーツをプレイする人々の存在、そのスポーツを統括し運営する組織の設立、そしてそのスポーツが広く行われていることを示す何らかの大会や競技会等の開催の記録が必要だと考える。本章と次章において、スキーの歴史研究書物や主に雪国やスキーに特化した学校機関の資料を用いてこれらを研究し、どのような時期に「普及」が見られるかを検証することとする。

まず本節においてはスキーがどのように日本に定着していったのかという点を、年代や組織に沿って探っていく。また、それを基軸に他県へどのように伝播していったのかを地域別に見たうえで考察し、特に、「学校関連の連盟を介しての組織化」という観点から視線を投じることにする。

(2)講習会や大会に見る普及

第一章でも述べたように、日本においてスキーはレルヒによってもたらされたという解釈が一般的である。1911(明治 44)年をもって日本にやってきたレルヒによる講習会の目的は、具体的に、軍隊への指導のほかに民間人、特に学校の先生への普及と、新聞を使ってスキーを宣伝することなどであった[19]。同年 1 月 12 日に開かれた日本初の講習会は高田で 34 日間に渡って行われ、内容としてはスキーの持ちかたから最後には高山における行軍や吹雪に対する行進法、軍装運動法や機関銃積載及び運搬法に至るまでであった[20]

同年 2 月 15 日、高田にて新潟県立学校の教師 31 名がレルヒによる 5 日間のスキー教習を受けた。さらにその後同年 9 月には、明治 45 年年度のシーズンに向けたスキー技術普及を目的として講習会の開催や行事の立案、用具の製造にも乗り出した。用具においては「高田の家具商や車大工がスキー製造に転向」し、「冬が近づくとともに電器屋、本屋、靴屋等が新たにスキーやその用品を並べるようになり、…高田では新しい商売としてのスキーが擡頭」[21] した。この後 1911 年 10 月 2 日に高田市外金谷で「越信スキークラブ」の発会式が行われた[22]。発表会には明治天皇の御名代として山根侍従武官の臨席があるという華々しさであった。初代会長に長岡師団長、高田支部長に堀内文治郎五十八連隊長が就任した。「越信」という呼び名は「スキーは越後の高田で誕生して信州に及んだものであるから、越信が良いだろう」という長岡師団長の意見であった[23]。

また、講習会に関しては 1912 年 1 月 15 日に第一回講習会が五十八連隊内で開催され、この講習会に参加した受講者は百名を突破した。長野県から唯一参加した市川達譲の記録によると、この講習は高田西方の金谷山で行われ、1 週間から 3 週間に及ぶもので毎日午前 9 時から午後 4 時まで、昼食休憩の一時間以外は雪の上で過ごし猛特訓を受けた[24]。

その後同年 8 月に越信スキー倶楽部は日本スキー倶楽部に改称し、長野、山形、秋田などに支部を設けるまでに発展した。この関係で、他県の積雪地から高田へやってきてスキーの技術を吸収しにくる者が非常に多くなってきた。またレルヒ直伝の鶴見大尉を先頭にスキー指導団を組織して、他地方に出向いて講習会を行った。また、最初の競技会が行われたのもこの年である[25]。

その後 1913(大正 2)年 2 月 11 日に、日本スキー倶楽部主催で第一回全国スキー大会が

高田市外金谷山で開催され、以後毎年行われるようになった。しかし、この大会は次第に地元である高田の選手が猛威をふるい続けるようになっていき[26]、さらに 1923(大正 12)年に大日本体育協会[27]が第一回全日本スキー選手権大会を開催し始めると、全国大会としての意味合いは失われていった。

２．他県に見る普及

本項では前項の内容を受け、スキーが高田から他の積雪地方に拡大していった過程を、長野県と石川県に焦点を当てて考察していく。この二県を研究対象に選んだ理由としては、本研究が高田をスキーの発祥地としている前提とこの地域が高田からスキーを導入したということが合致する点や、文献が豊富に存在することが主たるものである。

(1)長野県

レルヒの講習を受けた市川達譲がその技術を持ち帰った長野県は、講習会を介して彼のスキーを直接導入した数少ない地域である。この地域でスキーがどう普及していったかを、県内で最も早く導入した飯山に主に焦点を当てて考察していく。

1911(明治 45)年の講習会に参加した市川氏は、長野県立長野中学校飯山分校[28]の体操教師であり教練を担任していた人物であった[29]。彼は冬季運動の種類の少なさに悩み、またその必要性にかられこの講習会に参加したという。市川氏は高田から戻ると早速紐式スキー[30]を 40 台新造し、教練の時間に生徒に履かせて城山で訓練した。その内容は、スキーの着脱、静止中の方向転換、平地の走行、登行、直滑降、斜滑降、制動滑降、用杖回転など、ごく基本的なものであったが市川氏によると学生たちは素早く著しい進歩を見せたという[31]。

そして間もない 2 月 11 日、「越信スキークラブ」[32]が設立され、飯山支部もその後すぐに創立された。長野中学校飯山分校ではスキーが伝わるとすぐその価値が認められるようになった。それは当学校が 1913(大正 2)年度の「訓育」の鍛練の項に、「第七、スキーを盛んに練習せしむること」という一節を設け、その理由を以下のように述べていることからもうかがえるだろう。

> 由来我が飯山の地たるや冬季四ケ月積雪深くして戸外の運動に便ならず。此の期に入るときは、野球も庭球も全く行うを得ざるなり。然れども我が校に於ては此期を利用して生徒の身体を鍛練するの目的を以て、此積雪を天与の恩恵として雪中遊戯を奨励せり[33]。

(2)石川県

石川県も、高田からスキーをもたらされた代表的な地域の一つである。石川も冬の積雪が厳しく、郵便物の集配・逓送が混乱を来す事があった。この救済方法として金沢郵便局が試験的にスキーを使用する事を決め、1916(大正 5)年、使用方法習得を目的に高田へ人を派遣し、技術を持ち帰ったのが始まりである[34]。1918 年 1 月から第九師団が石川県でスキー活動をはじめ、翌年から民間人も対象とした練習会を開催するに至った。教育の場においては、1918 年から男子師範学校から練習が始まったのを端緒に、1922 年から第四高等学校主催のスキー大会が開催され、裾野がひろがっていった[35]。

石川県においても、高田のそれと同じように軍隊によって教育関係者を中心とした民間への普及が試みられ、講習会、大会などによって県内各地へ広まっていったといえる。

３．学校関連の組織に見る普及

1926(大正 15)年 10 月、全日本大学専門学校スキー競技連盟が発足した。発足当初の加盟校は北大、早大、明大、専大、東京薬専[36]であった。翌年 12 月、同連盟は名称を全日本学生スキー競技連盟(以下、連盟)に改めた。これが、現在活動している全日本スキー連盟の前身の組織である。

1928(昭和 3)年、最初の全日本学生スキー選手権大会が連盟主宰で青森の大鰐で行われた(参加校は北大、早大、明大、弘前高校[37]、日大、小樽高商[38]で、優勝は北大)。当時行われた種目は耐久[39]、長距離、ジャンプ、複合、リレーであった。当時は競技規則や参加規定等がまだはっきりと成文化されていなかった[40]ので、参加校数にばらつきが見られた。また第一回大会において、ジャンプ競技は「10cm 刻みの実測」、耐久レースのコースを事前に整備していなかった、など当時はまだルールや測定方法が大味であったことを窺わせるような記述が散見された[41]。

さらにこの年、1 月末から 2 月に第一回関西学生スキー大会が開催されたが、全日本学生スキー選手権大会との接点は見出せなかったようであり、全国的な連絡関係はやや稀薄であったと考えられる[42]。上記の学校以外で戦前に一度でも参加した学校は我が慶應義塾大学をはじめ、立教大学、日本歯科専門学校、学習院大学、専修大学、東京帝国大学、東京農業大学、米沢高等工業専門学校[43]、山形高校[44]、盛岡高等農林学校[45]、秋田高等鉱業専門学校[46]、室蘭高等工業専門学校[47]である。すなわち、学生スキー競技者がいた学校は、東京の有力私立大学と雪国の大学及び高専(旧制)に限られていたことがわかる。

また、対外的動向としては、同年 1 月末～ 2 月にコルチナダンペッツォ[48]で行われた国際学生大会に、この競技においての初の五輪選手を派遣している。

競技種目については、1937(昭和 12)年の第 10 回大会にアルペン競技が正式種目となるまでは、先に挙げたようなクロスカントリー系種目とジャンプのみであった。学生大会ではなく一般向けの全日本スキー選手権に初めてアルペン競技が導入されたのも同年に行われた第 15 回大会なので、同時期にアルペン競技が導入されたことになる。

その後第二次世界大戦の影響による中断を経て、第 20 回大会が 1947 (昭和 22) 年 1 月、小樽で開かれた[49]。以後大会や連盟に関わった大学の量の変遷を追うと、1961 年の第 34 回大会時点で、参加校は 34 校であった。参加校が 50 校を越えるのは 1965 年の第 38 回大会(54 校)である。参加校は更に増え続け、1976 年の第 49 回大会で 100 校の大台を超した(105 校)[50]。単純に考えて、10 年間で約 2 倍に増えた事になる。

４．日本でのスキー普及に関する考察

本節のまとめとして、なぜ日本の降雪地でスキーが素早い普及、定着を見せたのかという点を考察していきたいと思う。第一に、レルヒや十三師団による積極的なスキー奨励は、雪国の人々の冬場における生活、遊び、健康などからの必要性と合致し、この点が有力な普及の動機の一つとなった。郵便配達、営林局・警察などの見回り等の手段として、また

一般市民の交通手段として、スキーは直接的に冬場の生活に結びついていた。更に、一般の人々に比べて雪国の人々の体格的な劣性、体力の脆弱さ、胸部の未発達が軍や学校教育の上から指摘され[51]、スキーはそれらを改善する手段と考えられた。軍事上の価値を見出され取り入れられたスキーが、軍隊内で終始することなく、民間人に対しても開放され普及したことは「当時の“民意の尊重”なんてことをまったく考えていなかった軍の方針としては大変な功績だ」[52]とも言える。

また、日本の多雪地帯ではスキーが入る以前、青少年の冬の戸外運動としてソリやスケートが人気であった。ソリは運送用の大ゾリから遊戯用の板ゾリなど様々であり、板の上に立ち方向転換などの技術を試みる青年も多く、スキー導入以前からその回転や滑走と共通した要素を持つ運動であった[53]。またスケートは明治三十年代に日本に普及したと考えられているが、下駄スケートをしていた若者たちがスキーの導入以降次第にスキーへと転換していった様子も記録されている[54]。若者や民間からの関心を得たスキーが技術の進歩も目覚ましかったのは、単に多雪地帯であるという条件のみならずソリやスケートによって培われてきた受け入れ態勢が十分であったことによるものだとも解釈できる。

さらに、日本でスキーが普及していく様子を年代別に見ることにより見えてくる事実もある。上述の内容から、昭和 40 年あたりを境に参加校数が急激に増加していく様子がわかるが、この時期は高度成長期の後半にあたり、一人あたりの国民所得が急速に増加しはじめた時期と一致している。雪国に立地していない、たとえば関東などの大学生が本格的にスキーをするには、用具の準備や、降雪地域に赴いての長期合宿など、かなりの費用を要するものと考えられるが、所得の増加は、これまで述べたような有力私立大学か、雪国に立地している学校でしか出来なかった競技スキーが、一般の大学に普及してゆく基盤を作った一因ではないかと推測される。

また、スキー場においてリフトの普及が本格的に開始されたということも、連盟加盟校が急増傾向を見せてきた時期とやや被っている点で関連性があると思われる。草津天狗山スキー場において初の民間使用可能なリフトが設置されたのが 1949(昭和 24)年のことである[55]。リフトができるまでは、例えばアルペン種目の練習には徒歩で斜面を登る必要があったが、リフトの普及によって、かなり容易に斜面を昇降することが可能となり、「これ以後スキーといえば斜面を滑降するアルペンスキー[56]を意味するようにな」[57]った。こうしてスキーは、競技として打ち込んでいる者たちのみならず、「一般の人々の間に急速に広まって行った」[58]のである。

第三節　普及動向に与えた学校教育の役割

１．主に新潟について

(1)最初の民間人スキー講習会――明治 44 年・学校教師

新潟においてスキーが普及し発展していった要因として、スキー講習会、スキークラブの発足、スキー大会の開催の 3 つが考えられる。スキー講習会が最初に開かれ、そこからスキーが伝えられた結果、スキー大会が開催されるまでに至るわけだが、このスキーが伝えられる過程で大きな役割を担ったのが学校でのスキー授業だったと考えられるのではないだろうか。ここでは、どのようにして新潟県の各学校においてスキー授業が行われるようになったのかをみていくことにする。

1911(明治 44)年 1 月のレルヒによる高田第 13 師団への講習会が始まってまもなく、長岡師団長は新潟と長野県両知事にスキーの効能とその必要性を述べ、普及のために努力してほしいと訴えた。新潟県知事がそれに応え、県内務部長が 1911 年 2 月 15 日から講習会を開始すると、次のような通牒を県立中等学校に発した。

> 現今第十三師団において研究中のスキーは、雪中交通具として最も適切有効なるものなれば、各学校生徒の雪中運動具として研究するの必要を認め、本縣にては縣下各中等学校の体操科教員を歩兵第五十八連隊へ本日十五日を期し出張研究せしむるため、取まとめの都合上により同日午前九時当高田師範学校へ集合する[59]

参加した教員は第 58 連隊の兵営内に宿泊し、女性教員は近くにあった高田高等女学校（現在の北城高校）の宿舎を利用した。この講習会で使うスキーについては、各校に 1 台ずつ校費で購入することが通牒で命じられ、終了後さらに追加して買うことができた[60]。これが、レルヒによる第 2 回目の講習会だった。講習は 5 日間にわたって行われ、最終日の 2 月 19 日には「高田スキー倶楽部」の発会式が開かれた[61]。その後、県内各地に戻った教師たちは、スキーと技術を持ち帰り、自校や地域に広めていった。この講習会の参加者名は次の 33 名であったと考えられている。

> 外川幾太郎(長岡中学校)、佐藤正三(長岡女子師範学校)、原寅治(小千谷中学校)、熊倉又吉(新発田中学校)、佐野さい(新発田高等女学校)、渡邊清作(巻中学校)、兩川梅吉(糸魚川中学校)、武藤作太郎(能生水産学校)、齋藤金一(加茂農林学校)、米澤馨香、堀川兵記(柏崎中学校)、大内ふみし(柏崎高等女学校)、渡邊賢惠(三條中学校)、菅善次郎(新潟中学校)、齋藤忠吉(新潟商業商船学校)、小林郁四郎(新潟師範学校)、土屋勘五郎(新潟高等女学校)、土井唯次郎(村上中学校)、池龜經藏(佐渡中学校)、山極九十郎、山岸豊次郎(高田師範学校)、佐藤慶緑(高田農学校)、荒田静吉、清水藤作、小日向馬作、山口末吉(高田中学校)、藤井しづ、黒木甚一郎(高田高等女学校)　　（小計 28 名）
>
> この他に、里見源次郎(長野県大町中学校)、久米芳樹(高田第小学校)、柳龜三郎(有恒学舎)、さらに、研究視察の五井壽快(新潟県庁嘱託)、片山三男三(中頸城郡視学)
>
> （合計 33 名）[62]

このように第 2 回講習会には、新潟県のほぼ全域の県立中等学校 22 校、私立 1 校、小学校 1 校、長野県立中等学校 1 校の合計 25 校から 31 名の教員が参加していたことがわかる。

女性教員の中でただひとり 5 日間参加した佐野さいは、新発田高等女学校でさっそくスキーを伝えていった。1913(大正 2)年に同校を卒業した長谷川タキノが、

> 佐野先生は「小柄で親切で熱心な先生であった。スキーをはいて回転する方法など授業で習った記憶がある」と証言された。佐野先生は、レルヒから教えられたことを、このように生徒に教えていたのであった[63]。

と記している。また、柏崎高等女学校の大内ふみしもスキーを伝えたようだ。同校の卒業生の永井みつが、「スキーと申す術」を『柏崎高女同窓会誌』(第 7 号・大正 2 年)に投稿している[64]。

> 当校体操の師の君、故大内先生が受講され候いしが、惜しいかな師の君にはその年帰らぬ旅へと御出遊ばされ候ため私共は親しくこれを練習いたすことも出来ず、話にのみ承り来り候[65]。

このように永井みつが語るように、大内ふみしは帰校して 3 ヶ月後に亡くなってしまい、生徒たちと長くスキーに取り組むことはできなかったが、大内から教わったスキー術を生徒たちはその後も練習し続けていったと考えられる。柏崎高等女学校の女子生徒が袴姿でスキーに乗る写真が「越後タイムス」(大正 2 年 2 月 2 日付け)に掲載されており、そのことを裏付けている（図５）[66]。

（図５）袴姿でスキーに乗る女子生徒

(2) 中等学校のスキー

この第二回講習会が終わった後、参加していた他の教員の学校ではどのように学校スキーが行われていたのだろうか。ここではまず、高田市内の学校を中心にみていく。

まず高田高等女学校の場合、藤井しづはその年の 12 月に京都府綾部町に転居してしまったが、体操教師の黒木甚一郎が中心になり、校内でとても協力的で熱心だった板倉教頭は、「生徒の体育と活発なる精神を養成するには、スキーこそ最も適切のものとし之れを生徒に練習せしめん」[67]と考え、生徒各自が購入するにはもっと簡便で安いスキーが必要であるとして、試行錯誤の結果、細く割った竹を組み合わせて革で締めた極めて簡便なものを作って、教職員や生徒に練習させた[68]。このように、高田高等女学校では教頭が考案した割竹スキーが女学生のあいだに普及した。その後、1912(明治 45)年 1 月には 30 台のスキーを購入し、ワラ靴をはいてスキーをつけ、青竹を金剛杖のように使って校庭で体操の時間に練習していた[69]。高田高等女学校は最も早く体操の授業にスキーを取り入れた学校のひとつだった（図６）。黒木甚一郎は「興味の中に楽しみつつ効果を得る点においては

（写真 16）高田高等女学校は早くからスキー授業を実施した

（図６）高田高等女学校でのスキー授業

冬季運動として、けだしスキーに及ぶものなからん」[70] と述べ、女学校のスキー教授法を発表している。

次に高田中学校は、田川辰一校長が新潟県スキー研究委員であり、さきのスキー講習会の成功のために奔走しており、自校から荒田静吾、清水藤作、小日向馬作、山口末吉など 4 名の教師を参加させていた。この頃、高田中学校の生徒もすでに自主的に地域のスキー倶楽部の練習会などに参加していたが、体操の授業で使うのに必要なスキーをすぐに揃えることができないでいた。授業にスキーが取り入れられたのは、1912(明治 45)年からだった。1 月に 60 台のスキーを注文し、1 月 17 日から 1 クラスごとに体操の時間に生徒をつかって校庭に滑走場を造った[71]。1 週間のうち月、水、木の 3 日間、計 12 時間の体操の授業でスキーを行うことになった[72]。その他、高田師範学校は 35 台、高田農学校は 31 台のスキーを購入して、同じく 1912 年から体操の時間にスキーが実施されるようになった[73]。

そして、高田市以外の多くの学校でもスキーは取り入れられていった。長岡中学校では、講習会に参加した外川幾太郎が帰校後に生徒の前でスキー術を演技して見せ、使用方法を教授した。1912 年にはスキーを指導するために高田へスキーを注文し、スキーをする生徒が増加した。同年 2 月 3 日には越信スキー倶楽部長岡支部が創設され、外川幾太郎が理事長で活躍し、会員に長岡中学校から 21 名が加入した[74]。

また、小千谷中学校では講習会に参加した原寅治が帰校後さっそくスキー技術を生徒に伝えていた。冬季体操の時間にスキー授業を受けたという卒業生の酒井祐吉は、「我が校にもスキー用具が設備され、レルヒ少佐の孫弟子となって一本杖のオーストリア式スキー術を教わった。授業内は基本動作、行進、登高、滑降が主であった。」と語っている[75]。同校では 1913(大正 2)年に 200 名の会員で「北辰会スキー部」が結成され、校内スキー大会が開かれるほどスキーが盛んに取り組まれるようになっていった[76]。また、この講習会の直後に柏崎町の有志は、柏崎中学校と柏崎高等女学校の 3 人の教師を教授として、スキー研究のために地域のスキー倶楽部を組織するための話し合いを始めるなど、各地でスキー倶楽部の発足への取り組みが見られるようになっていった[77]。

このように、1911(明治 44)年の第二回講習会に新潟全県から幅広く教員が参加し、彼らが各々の学校に帰って生徒たちにスキー授業を通してスキーを教えていっただけでなく、地域のスキー普及にも影響を与えていたことから、スキー普及の基盤には学校教育が大きな役割を果たしたと考えられるのではないだろうか。

２．主に北海道について

(1) 北海道大学について

北海道にスキーが広がっていった始まりは、北海道大学にある。現在、北海道大学には「北大基礎スキー部」[78]、「北海道大学競技スキー部」等のスキー部が存在している。現在まで続いている北大でのスキー部は、どの様にして成り立ち、どう北海道のスキーに影響を与えたのだろうか。

1908 年にコラーが北大に赴任した事がきっかけでスキーは徐々に広がりを見せた。北大でのスキーは野外等ではなく、一番初めにドイツ語教室で披露されたことが始まりとされている。コラーはスキーが出来なかったので、スキーというスポーツを生徒達に教える

のではなく、ドイツ語の会話の一つとしてスキーを持ちだした[79]。コラーのドイツ語教室によってスキーの存在を知った北大生はその後、1912 年、月寒で行われていたスキーの講習会に参加した。そして、そこで藻岩山スキー登山で冬山の魅力を知り、すぐに北大でのスキー部の設置を建議した[80]。当時はあまりスキーがどの様なスポーツか知られていなかったので、大学の審査委員会の論議に向けて、学生たちの苦労は並大抵なものではなかったとされている[81]。スキーの絵葉書で分かり易く解説する等し、審査委員会の理解を得ていった。その結果、審査委員会からは予算として 65 円 85 銭の予算を出す事ができ、スキー購入等で 58 円 22 銭の支出を出すこととなったが、無事にスキー部の新設が認可された。これは、月寒のスキー講習会（図７）が終了して 6 ヶ月後となり、北海道大学スキー部は日本で初めての大学スキークラブとなった。

図59　月寒で練習する北大生(杉村隆雄氏所蔵)

（図７）月寒のスキー講習会

北大スキー部員たちは、アルペンスキー技術を習得するとともに滑降だけを楽しんでいたスキーから、その技術を駆使して高峰の登攀を求めるように変わっていった。その後、冬季登山、スキー大会等を開催し、北大でスキー部の活躍が見られるようになっていった。北大スキー部は多くの功績を残しているが、それは吹雪の中行った 1 週間ほどのスキー合宿等[82]での努力の成果でもあった。北大スキー部は、技術を学ぶ為にノルウェースキー技術を学ぶ為に動作説明書を部員に配布し、更に技術を磨いていった。研究を進めていくと、スキー部独自の技術（リリエンフェルト技術[83]の長所などを活かしたもの）を生み出していく事ができ、1918（大正 7）年に 51 枚の写真で解説したスキー術教程[84]が編纂された。これが、日本で初めて作られたスキー教程となった。このスキー術教程は、スキー技術を理論化して普及するのに役立ち、日本スキー発展のために大きく貢献した北大スキー部の功績の一つである。

その後、北大スキー部は札幌と小樽の中学校を対象に、日本で初めて本格的なスキー大会を開催した。『北大スキー部三十年史』には、このスキー大会について以下の様に述べられている。

> 之はスキー競技史上一エポックを画したもので、現在の中学校のスキー競技大会の前身である。全区七里廿町は七区に分かれ小樽水産学校付近より朝里村に出て、軍用道路に入り、是に沿って銭函に出て鉄道線を右にして軽川、琴似を経て決勝点たる本学グラウンドに入るもので、札一中[85]、二中[86]、札師[87]、北中[88]、樽中[89]、樽水[90]、樽商[91]、北商[92]の八校[93]の間に激戦が展開されたが、結局一着は三時間四十二分七秒でゴールインした樽商の占むる所となり、地の紫に紫の房、中央にスキー部のマークが銀で描かれた豪華なスキー部の優勝旗は同行に授与されたのであった[94]。

当時の 10 年の間に、北海道のスキー技術がどれほど発達、進歩していったかが、この協議会の開催に物語られているといえる。

北大スキー部がスキーを知り、広めていく事によって、徐々に札幌や小樽周辺の中学校にも影響を及ぼしていくこととなった。北大が結果的に残した素晴らしい功績には、「①世界的に文献を集め理論研究をすすめたこと、②スキーの底辺を拡大する為の取り組みにも力を注ぎスキーの普及に貢献したこと、③競技会を主催して開催しスキーの競技力を向上させたこと、④スキー技術をもとに冬季登山を行い、冬山初登頂をなし得たこと」(95)などが挙げられる。様々な功績を残したが、北大は北海道の大学だけでなく、中高でのスキー教育に大きな影響を与えた。当初の中学校でのスキー競技大会や授業は歩くスキー(クロスカントリー）のような形式がとられていた(96)。次で述べる名寄市での名寄青年スキー大会もクロスカントリーであった。北大で大きく普及していったスキーが札幌や小樽の学校に広がり、徐々に北海道内の郵便局に伝わっていき、道内の様々な場所でクロスカントリーとしてのスキーが普及していったのではないだろうか

(2)名寄市について

名寄市（図８）は北海道の北に位置しており、名寄市は「雪質 日本一」を誇るとしている(97)。ピヤシリスキー場のジャンプ台では全国規模の大会も行われ、スキーの文化が根付いている。北海道のスキー場と言えば、札幌やニセコが有名だが、名寄もまた多くのスキー客で賑わっている一つである。

（図８）名寄市

名寄市が位置する、道北にスキーが移入されたのは 1913（大正 2）年であり、レルヒ中佐直伝でスキー術を学んだ旭川郵便局長の松田秀太郎、主事の津田精一等が講師となって、道北の郵便局関係、通信工事夫、郵便局通信送等を対象にスキー術講習会を開いた(98)。これが、名寄に最初のスキーをもたらすこととなった。理由としては、スキーは積雪地に非常に便利であるとの印象が強かったからだ。当時は、特に檀家が檀家廻りにスキーを利用しており、それが子ども達へと広まり、大正３年には子どもスキー大会が開催（図９）されるまでに至り、積極的にスキーを奨励していった。また、当時の名寄郵便局では冬の集配業務はスキーで行っていたこともあり、名寄でのスキー発展の基盤が作られていった(99)。こうして、名寄では富士スキー製作所等、様々なスキー製作所が誕生していった。

（図９）名寄青年スキー大会

名寄市では、学校教育の中でスキーが体育の一つとして徐々に取りいれられていった。中でも、旧制名寄中学校は体育の一つとしてスキーが定着していったのではなく、違う形でスキーが教育の中に浸透していった。戦前の名寄中学校工作教育は、その当時、道内でも非常に充実した施設、設備の中で専任工作教諭による実践的な教育が行われており、地域の企業にも関連しながら、企業や地域の発展に貢献していった[100]。戦後、学校の体育でスキー指導が復活し、伝統的な校内スキー熱は高まっていくこととなった。そして、復活したスキー部の活躍は目覚ましく再開されていった。彼らは、中学スキー大会で全道を制覇し、全国大会にも出場し、名寄スキー発展の先駆となった[101]。

その後、スキーが普及していくにつれて、生徒用スキーが高価でなかなか個人で購入する事が難しくなっていった。そこで、教育の一環として工作の時間にスキーを作らせることになった。そうする事で、教育的、体育、経済的効果を期待していた。学校スキー作りの研究がはじめられたのは 1947（昭和 22）年からであり、名寄中学校では工作教育の主な材料となった木工工作が、直材加工から合板加工へと発展していき、これが合板スキーの研究に大きく役立つこととなった[102]。

（図 10）合板スキーの研究

そして、名寄高等学校と名前を変えた旧制名寄中学校は、以前の伝統をそのまま受け継ぎ、スキー製作を続けていった授業の工作教育木材加工指導の中で合板構造のスキー板の研究が始まった（図 10）。研究を重ねた結果、1949 年 10 月には生徒用の合板スキー板の第一号が完成した。これを学校長は北海道教育委員会に提出した。北海道教育委員会はそれを北海道のスキーメーカに持参したところ、非常に立派な出来であると評価が高く、そこから名寄高等学校の更なる研究がすすめられた。後に研究が評価され、文部省から補助金が出るまでに至った。名寄高等学校では、工作部のクラブ活動の一環としてスキー製作を行うだけでなく、学校教育の中で積極的にスキー板の生産が行われていったこととなる。その後、名寄では様々なスキー製作所が誕生していった。

当時の名寄高等学校では、学校教育のスポーツとしてのスキーも始まってはいたが、後にスキー製作という工作の面においても学校教育に影響を与えていくこととなった。現在の北海道の小学校では、名寄高等学校の様に本格的なスキー製作を行う事はないが、工作の時間に竹を用いて歩くスキー用のスキー板を製作するといった時間も設けられているので、この名残が少しあるといっても過言ではないだろう。

雪が多く降る北海道での生活に必要となっていったスキーは、結果として学校にスポーツ・競技としてのスキーを普及させ、新たに学校教育の工作の面でも影響を与えていくこととなった。だからこそ、更に北海道ではスキーが広まり、定着していくこととなったのではないだろうか。学校教育が積極的にスキー製作に踏み切らなければ、名寄市での新たな産業は生まれていなかったのかもしれない。スキーは北海道の生活、学校、産業と様々

な面に大きな影響を与えながら、北海道のスキー文化を作り上げていき、人々の生活により密接になっていった。

おわりに

これまで見てきたように日本におけるスキーの普及に至るまでの動向には大きく二つの流れがある。一つはスキー普及に大きく貢献したと言われるオーストラリアのレルヒ少佐を端緒とするものである。1911（明治 44）年、軍事視察を目的として来日したレルヒは本格的なスキー講習会を行った。スキーが東北地方の冬季の文明発展に有益であると考え、民間にも広めようとした長岡外史の訴えもあり、その講習会には体操科教員が参加することとなった。この講習会に参加した教員たちがスキーとその技術を自校と地域に広めていったのである。

もう一つはドイツ語教師として来日したコラーを端緒とするものである。コラーが授業でスキーの写真が載った教材を使ったことから東北帝国大学農科大学の学生たちがスキーに興味を示した。それをきっかけに、自ら講習会に参加し、日本で初めてとなる大学スキークラブの設置に奮闘することとなる。その後、大学スキー部はスキー技術を理論化し、スキー術教程が編纂された。さらに自らもスキー競技連盟に所属し技術を磨くと共に、一方で中学校を対象に日本ではじめて本格的なスキー大会を開催するなど日本のスキー普及に大きく貢献した。また、北海道名寄市の学校では積極的にスキー普及を行うことによってスキー製作という工作面においても影響を与えることになった。またこの工作により高価なスキーを比較的容易に手にすることが出来るようになった。

以上のように教育がスキーの普及に果たした役割は大きい。その中でも普及に特に影響をもたらしたものに次の三点があげられる。まず一点目に学校教育を通しスキーを多数の生徒に教えることでスキー人口の増加を促した点である。二点目は全日本学生スキー競技連盟等の学校関連の連盟を介した組織の拡大に伴うスキー技術の向上、スキーの競技としての洗練である。そして三点目には学校教育としてスキーを導入したことによるスキー用具の取得容易化があげられる。もともと雪国の人々の冬場における生活、遊び、健康などからの必要性と合致したことで民間にも導入されたスキーが広く普及したのは学校教育がこのような点で果たした役割が大きいと考えられる。また、第二章で見た様に所得の増加、スキー場の整備等が学校教育によるスキー普及を効果的にさせた一つの要因とも言える。

しかし現在、スキーは冬季のレジャースポーツとして普及はしたが、徐々にスキー人口は減少している。スキー授業を取りやめている学校があることが原因の一つとして考えられるのではないか。また、スキー授業を実施している小・中学校ではともに８割程度、外部の講師を活用していて、教職員にもスキー離れが進んでいる実態も明らかにされている[(103)]。外部講師の活用は高価な用具を必要とするスキーにとって経済面での負担がさらに大きくなってしまう。他に施設面の問題もある。経営難等の理由からスキー場は減少傾向にあり、スキー授業の減少はスキー産業にも影響を与える可能性が高い。なぜなら、多くの学校が他のスポーツとは異なり、体育館等ではなくスキー場でスキー授業を行うため、スキー場利用者であり、将来の利用者に繋がるからである[(104)]。

以上のような点からわかるように現在も学校教育におけるスキーとスキーの普及には関連があると考えられ、今後スキーを継承していくには学校教育での取り組み方を考える必

要があるだろう。

〔註〕

（１）日本生産性本部編『レジャー白書2010』。
（２）田中徳、吉川久美子『日本史小百科　スポーツ』近藤出版社、1990年、244頁。
（３）新井博『レルヒ知られざる生涯　日本にスキーを伝えた将校』道和書院、2011年、を参照。
（４）長岡忠一『日本近代スキーの発発祥と展開～長岡外史とレルヒの役割を中心として』メディアKコスモ、1979年、104頁。
（５）北蝦夷図説＜http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/kochizu/gazou/4-1.html＞。
（６）小川玄一『歴史として』北海道帝国大学文武会スキー部、1926年、272頁、にこのことが書かれていたが、出展が明らかになっていなかった。それついて、山崎紫峰『日本スキー発達史』東京朋友堂、1936年、15頁、は、①小川は北大スキー部の２年先輩であった松川五郎(敏胤の息子)から聞いたこと、②そのことによって「松川敏胤」というファーストネームが判明したこと、③そのスキーは満州から持ってきたこと、などを論じており、これにより小川説にある松川のスキーは、松川の息子・五郎から小川が直接聞いて記述したことが判明した。
（７）日本スキー発祥100周年　記念式典　平成23年1月12日水曜日　新潟県上越市。
（８）新井博『レルヒ 知られざる生涯――日本にスキーを伝えた将校』道和書院、2011年。
（９）中浦皓至『日本スキー・もう一つの源流』北海道大学図書刊行会、1999年、６頁。
(10) 稲田は北大スキー部創設者のうちの一人であり、「然し面白い事には、この北大スキー史の第一頁は三角山でもなく、屋内ではなく、却つて濁逸後教室内で始まったのである」と述べている(稲田昌植『銀界三十年』六芸社、1938年、213頁)。
(11) 同上、215頁。
(12) 同上、217頁。
(13) 前掲『日本スキー・もう一つの源流』、29頁。
(14) 長岡外史『我邦最初のスキー』イデア芸参院、1929年、2頁。
(15) 同上、3頁。
(16) 前掲『日本スキー・もう一つの源流』、83頁。
(17) 長岡は「私は新聞宣専にも可なり力を入れた。幸高田新聞社に、高橋翠郊、磯野大院など云ふ熱心者があつて、大に提灯を持って呉れた」(前掲『我邦最初のスキー』、6頁) と述べている。
(18) 鶴見宜信「日本に於ける當初のスキー」『スキー年鑑』第五号、全日本スキー連盟、1931年、62-67頁。
(19) 前掲『我邦最初のスキー』、6頁。
(20) 前掲、鶴見宜信「日本に於ける當初のスキー」、62-67頁。
(21) 小川勝次『日本スキー発達史』朋文堂、1956、23頁。
(22) 長野県飯山北高等学校編『飯山北高スキー史』飯山北高等学校桂蔭会、1969、10頁。
(23) 前掲『日本スキー発達史』、40頁。
(24) 前掲『飯山北高スキー史』、6-9頁。
(25) 第一回競技会。はっきりとした競技規則があったわけではなく、種目も「レルヒコースを降る約四キロメートルで、計時も電話線を架設していなかった……しかし通過点や危険箇所には赤旗が立てられ、方向も指示されてコースは一定していた」(小川勝次『日本スキー発達史』12頁)とある。競技はレルヒ大佐直伝組、若手将校組、下士官と地方人組の3班総勢50名で行

われた。記録を挙げると、直伝組の1位は約25分、若手将校組や最後の組の1位は約26分50秒でゴールしたようである(前掲、鶴見宜信「日本に於ける當初のスキー」、参照)。

(26) 前掲『日本スキー発達史』、41頁。

(27) 現在の日本体育協会(日本のスポーツ競技連盟、協会および各都道府県の体育協会を統括している団体である)の前身として、明治44年7月に設立された団体（前掲、小川勝次『日本スキー発達史』、52頁)。

(28) 現長野県立飯山北高等学校。

(29) 前掲『飯山北高スキー史』、6頁。

(30) 市川氏が町の建具屋に作らせた紐式締具はレルヒの直弟子である山口少佐が考案したもので、松材などを用い先端を曲げたものに耳金を取り付け、それに紐を通して靴に結び付けるという極めて簡単なものであった。杖は1.5メートル前後の一本杖で、竹の先端に鉄の石突をとりつけたものを使用していた（中浦皓至「日本スキー史の検証（第４報）長野県におけるスキー発祥期の研究」『日本スキー学会誌』11巻、2001、49-53頁)。

(31) 加納弘二「スキー指導者に関する社会的研究：長野県飯山市の事例を中心に」『日本体育学会大会号』第140巻、1991年、9-36頁。

(32) 越信スキークラブは、高田で発祥した日本初のスキークラブ。後に全国的組織となり「日本スキークラブ」と改称。これが大正14年に設立された「全日本スキー連盟」(S.A.J) の基礎となった。＜http://www.ski-japan.or.jp/official/saj/general/history.html＞財団法人全日本スキー連盟ホームページ最終閲覧日：2011.10.17。

(33) 前掲『飯山北高スキー史』、16頁。

(34) 大久保英哲、川崎信和、野中由美子「石川県におけるスキーの導入および普及過程に関する研究」『金沢大学教育学部紀要.教育科学編』48巻、103-104頁。

(35) 同上、103-124頁。

(36) 東京薬専。1917（大正6）年に設立された日本の旧制薬学専門学校のこと。東京薬科大学の旧制前身校の一つである。

(37) 弘前高校。旧制高校。現在の弘前大学。

(38) 小樽高商。小樽高等商業学校。現在の小樽商科大学。

(39) スキー競技のノルディック種目の一つで、30キロ～50キロの距離を競走するもの。

(40) 全日本学生スキー連盟・70周年記念実行委員会『全日本学生スキー連盟７０年史』全日本学生スキー連盟、68頁。

(41) 同上、66頁。

(42) 関西勢の大会参加は、1949(昭和24)年の第22回大会の関西大学まで待たねばならなかった。その後、第24回大会に先立ち立命館大、大谷大が、25回大会に関西学院大、同志社大が連盟に加盟し、次第に関西勢も種々の大会に参画していくようになっていった。

(43) 現在の山形大学工学部の母体である。

(44) 現在の山形大学人文学部・理学部の母体である。

(45) 現在の岩手大学農学部である。

(46) 別名は秋田鉱山専門学校といい、現在の秋田大学鉱学資源学部の前身である。

(47) 現在の室蘭工業大学の前身である。

(48) コルティーナ・ダンペッツォ（Cortina d'Ampezzo)。イタリア北東部の都市で、1956年冬季オリンピックの開催地。

(49) 参加したのは、慶應義塾、早稲田大、法政大、明治大、立教大、日本大、北海道大、東京工業大、専修大、小樽経専、日本体専、久我山工専、高田師範、青森医専、高田師範、岩手師範、北海道第二師範、北海道第三師範、室蘭工専、の19校。

(50) 校数の変遷については、前掲『全日本学生スキー連盟７０年史』の加盟校数の項、大会出場校の項を参照。
(51) 前掲『日本スキー発達史』、370頁。
(52) 前掲『飯山北高スキー史』、18頁。
(53) 同上、17-20頁。
(54) 同上、23頁。
(55) 日本で最初のリフトは志賀高原丸池に作られたが、これはアメリカ進駐軍が接収したスキー場内に作ったものであった。
(56) アルペンスキーは、スキーの原型であるノルディックスキーから分化し、ビンディングの踵を固定することにより滑降に特化して発達したスタイルであり、ヨーロッパアルプス地方にて20世紀ごろ発展した。雪の斜面においてターンを繰り返し、ときには直滑降をおり混ぜつつ滑る。山岳スキー技術として誕生したアルペンスキーは、次第に如何に速く斜面を滑り降りるかという競技に発展した。現在ではヨーロッパを中心に非常に人気の高い競技スポーツとなっており、特にオーストリア、スイスなどアルプスの国々では国技である。対するノルディックスキーは「歩くスキー」であり、現在行われているスキーの原点ともいえる形である。現在においてはノルディックスキーの範囲内でジャンプ（太く長いスキー板で、ジャンプ台から飛躍する。冬季五輪正式種目である）、クロスカントリー（長いストックと細長いスキー板で雪原や整地されたなだらかなコースを滑る、冬季五輪正式種目でもある）複合（コンバインド、前述したクロスカントリーとスキージャンプのノルディックスキー競技を組み合わせて競う競技）が行われている。クロスカントリーでは持久力、ジャンプでは瞬発力が必要で、複合では総合的な運動能力が求められる。財団法人全日本スキー連盟ホームページ＜https://sajdb.xcat.co.jp/saj/Index.do ＞ 最終閲覧日：2011.11.14。
(57) 前掲『全日本学生スキー連盟７０年史』、46頁。
(58) 同上。
(59)「中等学校体操科と雪滑」、高田日報、1911年2月11日。
(60) 中浦皓至『日本スキー・ほんとうの源流～明治・大正時代の高田』レルヒの会(日本スキー発祥記念館)、2010年、37頁。
(61) 田川辰一、「廿五県立学校のスキー研究～明治四十四年度新潟県立学校職員雪艇研究の状況」（スキー第一号)、越信スキー倶楽部、1912年。
(62) 同上。
(63) 長谷川豊、「女性スキーの先駆者1」、新潟日報、1981年9月17日。
(64) 前掲『日本スキー・ほんとうの源流～明治・大正時代の高田』、42頁。
(65) 永井みつ、「雪の日、暖国の友へ・スキー練習」、柏崎高女同窓会誌、第7号、大正2年。
(66) 前掲『日本スキー・ほんとうの源流～明治・大正時代の高田』、42頁。図５も同じ。
(67)「女學生にスキー教頭板倉氏の發明」、高田日報、1911年2月15日。
(68) 前掲『日本スキー・ほんとうの源流～明治・大正時代の高田』、43頁。
(69) 同上。図６も同じ。
(70) 黒木甚一郎、「女學校スキー教授法」（スキー第二号)、越信スキー倶楽部、1913年。
(71)「高田中学とスキー」高田日報、1912年1月11日。
(72) 前掲『日本スキー・ほんとうの源流～明治・大正の高田』、44頁。
(73) 同上。
(74) 同上、46頁。
(75) 同上。
(76) 同上。

(77) 同上、44頁。
(78) 基礎スキーとは、滑りの美しさ、上手さを競うスポーツ。
(79) 稲田昌植『銀界三十年』六芸社、1938年、213頁。
(80) 前掲『日本スキー・もうひとつの源流』、180頁。
(81) 佐藤徹雄『北海道のスキーづくり』私立名寄図書館、1983年、53頁。
(82) 三角山での合宿。前掲『日本スキー・もうひとつの源流』、180頁。図７も同じ。
(83) 急峻なアルプスの山地に適した低い姿勢と、回転技術はプルーク・ボーゲン、シュテム・ボーゲン。転倒は山岳地の滑降では生命の危険をもたらすものとして、低速度、多回転、用杖技術に固執＜http://homepage3.nifty.com/skis/ss_i/rekishi_tech.htm#Lilienfeld＞。
(84)『スキー術教程』の内容には、「1.スキーの携帯、2.スキーの穿き方、3.直立、4.歩行、5.方向転換、6.登行（①直登行、②斜登行、③開脚登行、④横登行）、7.滑降、8.起立、９．滑降中の停止、10.制動滑降（①半制動、②杖にて制動、③全制動、④腿坐制動、⑤跪坐制動）、11.回転滑降、12.横滑り、13.滑り落ち制止、14.スウィング（①テレマクル、②クリスチャニア、③ダブルスウィング）、15.跳躍回転、16.飛躍」の16個が挙げられている（前掲『日本スキー・もうひとつの源流』、199頁）。
(85) 札一中は現在の北海道札幌南高等学校。
(86) 二中は現在の北海道札幌西高等学校。
(87) 北海道札幌師範学校は現在の北海道教育大学。
(88) 北中は現在の北海高等学校。
(89) 樽中は現在の北海道小樽潮陵高等学校。
(90) 樽水は現在の北海道小樽水産高等学校。
(91) 樽商は現在の北海道小樽商業高等学校。
(92) 北商は現在の北照高等学校。
(93) 八校が参加予定であったが、実際の所札幌師範がインフルエンザの為、不参加となった（前掲、『日本スキー・もうひとつの源流』、201頁）。
(94) 同上、200頁。
(95) 同上、202頁。
(96) 初めはアルペンスキーからスタートした北大生だったが、中学校向けに大会を開催する際にクロスカントリーにした理由として、立地や取り組みやすさが考えられる。
(97) ＜http://www.city.nayoro.lg.jp/www/contents/1249867668916/index.html＞名寄市観光ＨＰより。なお、図８は＜http://www.chakuriki.net/japan/hokkaido/＞。
(98) 前掲『北海道のスキーづくり』、53頁。
(99) 同上。なお図９は、同上、54頁。
(100) 同上、84頁。
(101) 同上。
(102) 同上、85頁。なお図10は、同上、88頁。
(103) 朝日新聞、2007年1月17日「新潟県におけるスキー実施率」。
(104) 三浦裕、竹原祥介、米田健二他「北海道上川管内の中学校におけるスキー授業の現状と課題」『へき地教育研究』(61)［2006］、1－8頁、北海道教育大学学校。

第五章　陸 上 競 技

はじめに

今日の日本社会に受け継がれている陸上競技は、運動会の輸入をそのルーツとする。最初は訓練的な側面や、レクリエーションとしての目的をもって導入された、一校の中で完結するイベントであった。しかし、東大を始めとして、様々な大学で取り入れられていく中で、大学対抗の試合が行われるようになり、勝敗が問題とされるようになった。これが競技会の始まりである。また、オリンピックの開催などの国際的な潮流もあり、陸上競技は国家規模で盛んになっていった。今回は、運動会の輸入から、大学でどのように陸上競技が取り入れられ、発展していったかを探ってみたい。また、その際に高等教育導入され機関で初めて運動会を導入した東京大学と、比較的初期に運動会を導入した大学の一つである慶應義塾大学の二つに焦点をあてて詳述することで、より具体的に陸上競技の発展普及の歴史を追ってみたい。そのために「陸上競技の全国大会が開催され陸上競技器具が近代化された時をもって陸上の普及とみなす事が出来るのではないか」と仮説を設定する。

東京大学の本部[1]と大学予備門の学生生徒が、予備門の御雇英語教師であるイギリス人Ｆ．W.ストレンジの首唱で、運動会をもったのは 1883（明治 16）年 6 月 16 日である。競技運動会の種目としては、競走、クリケット、玉投げ、高跳び、砲丸投げ、幅跳び、棚飛び競走(ハードル走)、棒飛び、槌投げ、三脚競走、慰め競走などがあり、今日の運動会というよりは陸上競技会というべきものだった。

慶應義塾では、明治初年には乗馬や器械体操が学生の間で行われ、ついで剣道、柔道にかわり、1884（明治 17）年頃からベースボールが試みられるようになった。このような学内の雰囲気の中、1886 年 11 月 7 日慶應義塾第一回の運動会が実施された。

その後、第一高等学校は同 1986 に、東京師範学校は 1894 年に、京都帝国大学は 1899 年に、と次々と運動会が開催された。明治 40 年代に入ってから、これらの学校が組織だって運動会を行うことに刺激され各大学や都下高等専門学校は運動会を整備、実施するようになっていった。

帝国大学では初めての運動会から 4 年後、1887 年の陸上運動会から官立学校生徒の招待競走を加えるようになった。このように運動会は、開催校の生徒だけではなく中等学校や高等学校・大学などの生徒・学生を招待しレースを行っていた。

上述のように、第一節では、陸上競技の発展の歴史、第二節では慶應義塾における陸上競技の導入と発展、第三節では東京大学におけるそれを詳述する。そして陸上競技が日本の教育にどのような影響を与えたのかについて考察して行きたい。

第一節　日本における陸上競技の全国規模化

１．国際競技大会への参加とその後の影響

1909（明治 42）年東京高等師範学校長嘉納治五郎に、1912 年スウェーデンの首府ストックホルムで開催される第 5 回オリンピック大会への日本の参加を望む、という創始者ピエール・ド・クーベルタンの意向が伝えられた。嘉納はこの大会の参加を決心したが、日本代表選手をどのようにして選び、それを派遣するための母体となるような機関をどこに

しようかと考え、新しい団体の創設にのりだした。その頃のスポーツは学生が中心をなしていた関係から、学校方面に協力をもとめ、帝国大学から書記官中村恭平、東京専門学校からは運動部長安部磯雄、東京高等師範学校よりは体育部主任永井道明らが集まり、1911（明治 44）年大日本体育協会が誕生した[2]。

大日本体育協会がまず行わなければならなかったのが、「第 5 回国際オリンピック大会予選競技会」の開催であった。開催するにあたってまず競技場をどこにするかが問題となった。そこで大日本体育協会専務理事である大森兵蔵は、京浜電気株式会社[3]と交渉を行った。京浜電気株式会社は当時羽田の沖合に 6 万坪の干拓地を所有しており、そのうちの 1 万坪を使用して羽田運動場を建設していた。運動場には野球場とテニスコートがあり、球場は左右両翼に数千人を収容できる木造スタンドがあるなど当時としてはもっとも設備が充実していた。交渉の結果、今後毎年競技会を開くことを条件として、自転車の練習場に使っていた羽田の海辺よりの平坦なところに競技場を新設した。これが日本における陸上競技場第 1 号である。形は長方形の両端に半円を接続させた類楕円形で 1 周 400 m。トラックの土質は粘土と砂とを混ぜ合わせて固め、にがりをまいてスパイク・シューズで走るのにちょうどよい堅さにし、足袋や裸足でも差支えないように出来ていた。

1911（明治 44）年 11 月 18 日、大会は全国から集まった 91 名の参加者によって開始された。加納会長が審判長になって、永井道明、大森平蔵、安部磯雄の三幹部をはじめ、各学校から選出された数十名の役員が試合の準備をし、予選、決勝と行った。この結果三島弥彦と金栗四三が日本代表として選ばれた。参加資格は、年齢が 16 歳以上の者、中学校あるいはそれと同等以上と認められた諸学校の生徒及び卒業者、在郷軍人会員とされているが、記録されている競技成績をみると社会人はほとんどみられず、学生が大半をしめている[4]。このことからも陸上競技界がいかに学生中心であったかが伺える。

オリンピックでは三島が 100 m、200 m、400 mに、金栗が 25 マイルマラソン(40.232 ㎞)に出場した[5]。この大会で日本人選手は、世界の壁を感じることになった。オリンピック大会出場が決定後、三島は当時東京帝国大学生であったので本郷の大学運動場で短距離の練習をしていた。初めは立ったままのスタートであったが当時のスウェーデン公使館の若い書記官が日本に大変好意をよせており、自ら運動場に来て、クラウチング・スタートを三島に教えた[6]。三島は新走法を教わって数か月後に世界大会に出場しなければならず、このことからも日本が世界から遅れをとっていたことがうかがえる。

1913（大正 2）年には、極東体育協会が成立し、第 1 回東洋オリンピック大会が開催された。大正元年にフィリピン Y・M・C・A 体育指導者 E・ブラウンが来日し、「東洋の体育を奨励するために、東洋をフィリピン、北部支那(上海)、南部支那(香港)[7]、日本、マレー半島、シャム[8]の 6 つに分けて競技を実施しようと計画をたてているが、その実施種目は国際オリンピック大会のものはもちろん、野球や蹴球などもやりたいので日本も是非参加をしてくれ」[9]と勧誘された。

日本からは、明治大学の野球部と陸上競技の田舎片善次ならびに井上輝二の二人が、大阪毎日新聞社[10]の後援で派遣された[11]。陸上競技は参加の意志はなかったが、E・ブラウンが大阪毎日新聞社と交渉して資金を出させたことで参加することになった。この田舎片、井上両選手を選んだ理由には 1912（明治 45）年大阪毎日新聞主催のもとに 11 マイル・クロスカントリー・レースが開催されたとき、田舎片が優勝、井上が 2 位であったため

選出したのである。5 マイルマラソンでは田舎片が第 1 位、井上が第 2 位に、1 マイル競走では第 1 位に田舎片が入るという健闘をみせている[12]。

同年に日本オリンピック大会が大阪毎日新聞社によって開催された。大阪毎日新聞社は、早くからスポーツの発展に理解と努力を惜しまず、1909（明治 42）年には日本で初めて「マラソン競争」という名称を使用した競走を開催する[13]など、多くの陸上競技大会を主催している。日本オリンピック大会は 3 日間にわたって行われており大会の実施種目は、円盤投げと槍投げが除かれただけで、あとは近代オリンピック種目をとりあげている。1914（大正 4）年に第 2 回日本オリンピック大会、1915 年に第 3 回日本オリンピック大会が開催されている。この大会は全 3 回と継続的に行われたとは言い難いが、いわゆる運動会形式から近代陸上競技への発展を確かに感じさせるものであった。

２．陸上競技における組織の動向

1911（明治 44）年に設立した大日本体育協会はその規約第 5 条に「本会ハ毎年夏季ニ水上大会ヲ、秋季ニ陸上大会ヲ開ク」[14]ことを規定し、第 6 条には「本会ニ於テ行フ所ノ運動ハ当分ノ内、競歩、投てき及跳躍、遊泳ノ四部ニ分ツ」[15]とその実施種目をあげている。この規約に則り 1912（大正 2）年に両日陸軍戸山学校運動場において第 1 回陸上競技大会を開催している。この大会に参加した選手はその大部分が学生・生徒であるが、なかでも都下の各大学専門学校及び各中等学校のそれが多い。しかし、西は神戸高等商業学校や愛知県第一中学校、東は東北帝国大学、宮城県第一中学校など参加校は 28 校に達した。そのほか学校以外の参加者を加えると延人数 580 人余りという大きな大会となった。競技種目はハードルや 1600 メートルリレーがなかったがオリンピックにならって行われた。この陸上競技大会はその後も第 9 回まで開催されている。

このような大会が行われ、日々記録が進歩するにつれて競技者の数も次第に増えていった。しかし、競技会などについて様々な注文等が出てきても従来のしきたりに沿って頑なに行動するため、競技者と協会との間で意志の疎通を欠き、対立的になっていった[16]。

そのような中、1924（大正 13）年第 8 回オリンピック大会に行った岡部平太は、当時の日本の運動競技会の中心として国内外に行動をしていた大日本体育協会が 1924 年までは真の国際的代表権を持っていないということを知った[17]。そこで、この際協会を競技別の国体を集めた総合国体とし、国際代表権はそれぞれの統括国体に渡し合おうとする動きが起こった。結果として、国際代表権は大日本体育協会に渡ってしまったが、全日本陸上競技連盟が創立された。目的事業として、(1)毎年一回全日本選手大会を開催する事、(2)国際競技会に選手派遣の節には予選会を主催する事、(3)陸上競技に関する指導奨励、(4)諸規則の統一調査、(5)連盟の目的を達成するための諸事項[18]、を決定し、その規約の第 3 条には「毎年一回陸上競技選手大会ヲ開催」[19]することを規定している。実際に規約にのっとり、毎年陸上競技選手大会が開催され、こうして陸上競技界は組織が整備されていった。

第二節　慶應義塾における陸上競技の普及

１．體育會と徒歩部の発足

慶應義塾において陸上部にあたる競争部の前身の、體育會直轄の徒歩部が創立されたの

は 1910（明治 43）年だった。慶應義塾における體育會の創設は 1892（明治 25 年）年であり、徒歩部[20]も設置されたが、翌年に廃絶された[21]。この年に設立された體育會によって、春秋の陸上運動会と水上運動会が開催された。つまり、設立当初は他大と対抗するような部活というよりは、全塾生の健全なる身体の発育を目指し、運動会を主宰する核として作られたものといえる。慶應義塾の陸上部は、運動会の開催を発端に體育會の創設、早稲田をはじめとした他大との競技会（当時は運動会と呼称されていた）を通じて、設立に至ることとなる。

２．運動会の開催から陸上競技会へ

では、この運動会が最初に開催されたのはいつだったのか。それは、東京大学が初めて陸上運動会を開催した年の[22]３年後にあたる、1886（明治 19）年のことであった。慶應義塾においても、東京大学と同じ日に第一回の陸上運動会が三田山上の運動場[23]で開かれた。

第二回陸上運動会は５か月後に同じ場所で開かれ、種目は 200 ヤード・800 ヤード競走・幅跳・高跳・竿飛・一人一脚・二人三脚・障害物・旗拾い・戴嚢・人馬・来賓競走・フットボールなど１３種目であった。その後、「慶應の運動会」は東京市民の間で話題となり、1895（明治 28）年には見物人が一万人にも上ったという[24]。その賑わいの様子を表す写真が、右掲のものである[25]。運動会が初めて開催された６年後、體育會が創設された。全塾生の健全なる身体の発育を目指して、剣術、柔術、野球、端艇の各部を集合統一し、新たに弓術、操練（兵式体操）、徒歩の各部が置かれた。同日付の塾評議員会の記録によると、「運動倶楽部設立の為、創立費及び基本金壱千円を支出し、之が経費として学生一般より毎月拾銭づつを納めしむる事。」とあるという。この年から體育會によって春秋の陸上運動会と水上運動会が開催された。

図１．慶應義塾運動会の図

図２．三田山上での野球の様子

図３．慶應義塾運動会の図

上述の體育會のような学生スポーツ団体を初めて作ったのは東京帝国大学だった。東京帝国大学では「運動会」という名称で 1886（明治 19）年に組織された。陸上運動会と水上運動会を主宰する団体であり、次第に存在感を高め、社団法人化されるまでとなった。この東京帝国大学の団体に倣って、東京商業高校、第一高等中学校、慶應義塾と、学生ス

ポーツ団体が設立されていった[26]。

その後徒歩部は翌年に廃部になるが、17 年後の 1910（明治 43）年に體育會直轄の徒歩部が創立された。部として独立したものではなかったが、競走部の前身である。他校の競走会に招かれた際、派遣すべき選手の人選に困難が生じていたため、また慶應義塾でこの競技が振るわなかったため奨励する意味でも、徒歩部の設立が決まったという。運営は體育會の幹事から世話役が出て、年額 50 円の費用でランニングシューズ、パンツ等を購入して各校の運動会に派遣する選手に支給したという。『慶應義塾體育會競走部史』には、この時代の陸上競技界について以下のように記述されている。

> この時代の陸上競技界は、各学校の運動会の招待競技が主であった。4 月早稲田大学、5 月慶應義塾、9 月高等師範、11 月明治大学、駒場農科大学等の運動会が行われ、大学の招待競技は 100m、600m、2000m、５マイル、砲丸投、クリケット球投、幅跳、高跳、竿飛、ハンマー投等が主な種目であった。また、このころから足袋裸足からスパイクシューズをはき、クラウチング・スタートをするようになった[27]。

このように、各学校の運動会に他校の選手も行って、試合に参加する形式がとられていたようだ。この理由を伊藤は、「運動場不足」による連合運動会がやがて勝負の色をもった総合競技会へ変化していき、招待競技の形式がうまれしていったと説明している[28]。一方で、この年 1910 年には全国学生競走大会が初めて不忍池岬で行われ、塾生からも選手がでている。

その後、第 5 回ストックホルム・オリンピック大会の予選会が日本における正式の競技会として羽田の競技場で 91 人の選手によって行われた。慶應義塾の選手はマラソンにおいて 3 位となり、東京帝大の選手が優勝した。

また、1913（大正 2）年には、第 1 回全国陸上競技大会が陸軍戸山学校運動場で開催され、参加者は 29 校 360 名であったという。当時の参加者はすべて学生もしくは卒業生で、慶應義塾からも 6 名が参加した。現代においては職業選手もいるが、当時はオリンピックの予選会なども学生が中心であった。そのため、高等教育と陸上の発展の関係はとても深かったと推測される。その後は大学対抗の大会や、慶應義塾内部の大会、オリンピックの予選に参加する選手も増えていき、陸上は盛んになっていった。

第三節　東京大学陸上競技の歴史

１．ストレンジの運動会

東京大学で初めて行われた運動会は 1883（明治 16）年 6 月 16 日、「東京大学予備門御雇教師」ストレンジ（Frederic William Strange, 1854-89）[29] の指導によって行われた。このストレンジは東京大学予備門で英語を教える傍ら、陸上各種目など欧米のあらゆるスポーツの普及に努めた。その一環として、祖国イギリスで行われている陸上競技の普及を東京大学でも実現した。そのためストレンジの運動会を考察していく前に、ストレンジの故郷である英国の陸上競技について見ていきたい。なぜならストレンジのスポーツ導入には、英国のパブリックスクールが大きく影響していると考えられるからだ。

英国の陸上競技について、池田潔『自由と規律』によると、「彼ら（英国人）が心から愛

するのは団体競技であって、個人競技にはそれほどの関心は示されていない。それは彼らが運動競技の目的を必ずしも個人の肉体鍛錬と考えていないからである」[30]と記されている。つまり、陸上や水泳はあくまで体を鍛えるためのものであると考えられていた。しかしその一方で 1840 年頃にはパブリックスクール、カレッジなどで陸上競技大会が行われ始めている[31]。

ストレンジは、英国のパブリックスクールであるイートン校を卒業し、ケンブリッジ大学に進学した[32]。このイートン校の経験が、のちの東京大学でのスポーツ導入に影響を与えたと考えられるので、イートン校のスポーツについて見ていこうと思う。1845 年には、パブリックスクール初の陸上競技大会(運動会)が開催される。競技種目は道路競争、障害物競走、短距離走、ハードル走等であった[33]。その後、イートン校では各ハウス対抗の競技大会が開催されるようになっていった。また放課後の課外活動では、秋期にはラグビーとサッカー、冬期にはフットボール、春期にはクリケットと陸上競技を行っていた[34]。徒歩競技会も 19 世紀には行われていたと言われている[35]。これらのことから、ストレンジはパブリックスクールの課外活動を基にして日本に陸上競技を導入した、と考えることができるのではないだろうか。

話をストレンジの運動会に戻そう。運動会を開催するために、神田一ツ橋に一周 300 ヤードのグラウンドを作った。参加者は法・文・理の 3 学部と予備門の学生であり、合同で競技を行った。競技種目は 100 ヤード、200 ヤード、440 ヤード、880 ヤード、120 ヤードハードル、クリケットボール投げ、走り高跳び、走り幅跳び、砲丸投げ、ハンマー投げ、棒高跳び、慰め競争の 12 種目が行われた。ハードルは笹や木の枝を編んで作ったものを使用し、欧米で使用されていた正規のハードルよりも低く作られた。砲丸や鉄槍は海軍造兵場に製造を依頼したといわれている[36]。

以上のように、ストレンジは英国のパブリックスクールの陸上競技を日本の学校に導入した、と考えることができる。

２．第１回帝国大学運動会

東京大学は学制改革により 1886（明治 19）年 3 月に「帝国大学」になった。神田一ツ橋にあった文・法・理の 3 学部は 1884 年～ 1885 年（明治 17 年～ 18 年）の間に本郷に移転し、総合大学としての本郷キャンパスが形成された。東京大学予備門は 1885 年に文部省直轄になり、1886 年に「第一高等中学校」に名称を変えた。そして 1889 年に弥生町の旧水戸藩邸跡地に移転し 1894(明治 27)年に「第一高等学校」に名称を変更した。

1886 年 7 月、ストレンジの提唱によって、帝大総長を会長とする任意団体として「帝国大学運動会」が創設された。これは、教員、学生、卒業生が一体となって創設したもので、ボート、陸上競技、水泳などの各部を傘下に置いた総合運動部のような性格をもっていた[37]。そして、その団体の規定の一環として、また 1887(明治 20)年 11 月 2 日に帝国大学の正式行事としての「第 1 回帝国大学運動会」が 365 ヤードのトラック(現在の御殿下グラウンド)で開催された。この運動会(競技会)には、明宮(のちの大正天皇)が臨席している。大きな行事だったことが窺える[38]。

当時の競技者の服装は「選手のズボンかは膝から上が見えてはいけない」「シャツは肘から上が見えてはいけない」と非常に規定が多かった[39]。また、履物は木綿で作った非

常に軽い足袋を使っていたと言われている[40]。

3．運動会の変貌

実は、東京大学の陸上部の発足時期ははっきりしていない。しかし 1925(大正 14)年 4 月 27 日付の帝国大学新聞に以下のように書かれている。

> 1887(明治 20)年陸上運動会なる名の下に種々なる変遷を経つ歴史を維持したる陸上部は、その歴史を形作った選手連の間に連絡機関なきを遺憾とし去る。12 月相談会を開いたがいよいよ赤門運動会なるものを組織する事になった。

この記事から運動会なる組織のもとで、陸上部が 1887 年から活動していると考えることができる。

国家的行事を開催した東京帝国大学運動会(機関)であるが、その後大きく変化していく。1889(明治 22)年 7 月 5 日にストレンジは急死する。東京帝国大学運動会(競技会)の精神的支柱を失った事により、競技種目に「柿拾い」「大学対一高の綱引き」といった、特別に練習しなくても脚力がある者が勝つというようなものに変化して行った。このような状態を嘆いた岸精一ら東大 OB たちが 1898 (明治 31)年 10 月に「運動会」(機関)を社団法人組織に改革し直して、お祭り騒ぎ的な競技大会(運動会)からストレンジの運動精神を活かす真正のスポーツに引き戻す努力をした。

1886 年の運動会発足時の規則第一節第二条には「本会ノ趣旨ハ会員ノ心身ヲ強壮快活ナラシメ兼テ交互ノ親睦ヲ謀ルニ在リ」と書かれている[41]。一方で 1898 年の運動会社団法人化後の規則には「本会ハ諸種ノ運動ニ由リテ会員ノ心身ヲ強壮快活ナラシメ且運動方法ノ進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」と変更されている[42]。これを見るだけでも、運動の目的が親睦というレクリエーション的なものから、運動方法の進歩というスポーツ競技の技術の向上を図る事を、主な目的にしている事を読み取ることができる。これが、陸上というものがスポーツとして普及する第一歩ではないかと考える。

また、1886 年の「運動会」規則三五条には「本会各種ノ運動二就キ毎年一回大演習会ヲ開ク」と書かれていたが、社団法人化後の 1898 年のものではその項目は抹消されている。また 1891 年「帝国大学六年報」を最後に運動会(競技会)についての記述が姿を消す。その後、1897 年の「東京帝国大学一覧」に、管理機関としての「運動会」が姿を現す[43]。

この 1891（明治 24 年）～ 1897（明治 31）年の期間はストレンジが亡くなり、東京帝国大学運動会(競技会)が衰退して行く時期と重なる。運動会(競技会)が行われていたかはっきりしていないが、記述されていないという事は少なくとも大学としては重要視していなかったという事にはなるのではないだろうか。また校内運動会(陸上競技)が消滅した理由は、1898 年当時東京帝国大学以外の大学との交流試合を行っていたためであると考えられる。つまり学内での運動会(競技会)が無くなった背景には、陸上部というより専門化したスポーツが確立したことと、他大学との交流大会が行われ始めたことが関係している、と考えられる。

4．陸上競技の近代化

上で述べた東京帝国大学運動会(競技会、機関)の改革によって以下の成果があげられた。

①メートル制の導入

1900（明治 33）年に東京帝大陸上運動会は木下東作、今村次吉によってヤード制をメートル制にした。これは 1896 年に行われた第一回オリンピックの規定に合わせるため、ものを測るのに最も適しているためであると考えられる[44]。また 1902 年に外国の陸上規定に合わせて国内の陸上規定を改定した[45]。

②スパイク靴の使用

陸上競技会(運動会)が行われたころは木綿を使用した独特の旅を使用していた。その後、海外の雑誌に掲載されているスパイク靴から、白いズック靴に針を縫いこんだスパイク靴を木下東作が考案した。そして東京帝国大学運動会にてスパイク靴を使用した[46]。

③電気時計の使用

またこの運動会にて電気時計を使用する。田中館愛橘博士が計時を担当した。藤井実が 100 メートル 10 秒 24 の世界記録を樹立した(公認ではない)。このように、日本近代陸上競技は東京帝国大学陸上部の西洋技術の導入によって基礎づけられた、と考えることができる[47]。

1906（明治 39）年、藤井実が棒高跳びにて 3 メートル 90 の世界記録を樹立した。この時の競技機器の製作の苦悩が、1955（昭和 30）年の東大陸上運動倶楽部会報に次のように記されている。

> 竹の種類、品質を比較検討して竹幹が最も充実している 12 月に切り取り、真っ直ぐにためたり、前後のバランスをこれと思うものを 3 本選んで大学の柔剣道の道場の天井に横につりさげ、虫食いや亀裂を検査しながら 3 年間ゆっくりと乾燥させたのです[48]。

以上のように競技用の棒を作成するのにも相当な苦労があったことが読みとれる。その後 1913（大正 2）年 11 月に陸軍戸山学校運動場で「第 1 回全国陸上競技大会」が開催された。この大会で東京帝大の OB である明石和衛は 100 メートル、200 メートルで連覇した。他に辰野保が砲丸投げで、大河原泰次郎がハンマー投げで、小島勇之助が 400 メートルと立ち幅跳び、400 メートル R で優勝した。

この後は東京帝大以外の大学の学生が台頭し始めたために、東京帝大の学生の活躍も目立たなくなるに至った。

むすび

この研究を通して明らかになったことを整理してみる。陸上競技は、初め運動会という形で姿を現し、運動会は各大学などの教育機関で学校行事として行われ広まっていった。この運動会に他校の生徒を招き招待競走を行うようになることで、次第に競技色を帯びていったように考えられる。また、運動場不足の関係から連合運動会なども盛んに行われ、陸上競技は普及していった。その中でも契機となったのが、第 5 回オリンピック大会への参加である。この参加により、日本の陸上競技界は初めて世界の陸上レベルを知ることになった。また、当大会に参加するにあたって大日本体育協会が創設され、陸上競技が組織

化されるに至ったのだ。では、大日本体育協会は、陸上競技にどのような役割を果たしたのであろうか。

一つは、オリンピック大会に日本人選手を参加させたことと言える。この大会において、日本人選手が予選で敗退したことは、大きなインパクトを与えたであろう。また、クラウチング・スタートなどの新走法や大会の規定などを知る機会となった。

二つ目は、大日本体育協会が定期的に全国陸上競技会を開催していたことと言える。選手はいくら練習を積み実力を高めたとしても、それを披露する場は連合運動会や招待競走程度しかなかった。しかし、大日本体育協会が全国陸上競技大会を開催することで、その場所が用意されたのである。さらに全国の学校から集まり、継続的に大会を行うということは、選手に大きな刺激を与え陸上競技の発展に大きく寄与したと言えるであろう。

一方、それぞれの教育機関はどのように貢献したのか。陸上競技の発展に学校教育の果たした役割は計り知れない。では、慶應義塾は学校という立場からどのように陸上競技の発展に寄与したのだろうか。福沢諭吉が体育を推奨したことにもみられるように、慶應義塾は日本に海外の多くのスポーツを紹介した。ラグビーなどをはじめとして、日本に初めて紹介した種目もある。しかし、陸上は必ずしも慶應義塾の得意とする分野ではなかったといえる。学校教育一般として陸上の発展に寄与したものは、運動会の開催を通じて“意図的な運動”を身近で楽しいものとして普及させたこと、陸上を目的とする部活の創設・陸上競技会・対抗試合の主宰を通じてそのレベルの上昇に貢献したことがあげられるだろう。その中で、あえて慶應義塾の貢献を挙げるとすれば、幼稚舎生から大学生までといった幅広い層を陸上競技に巻き込んだことにあるのではないだろうか。陸上の分野で好成績を出し続けることはできなかったが、陸上の黎明期を支えた数少ない学校の一つであることの意義は大きいだろう。

また、東京大学においてはどうであったか。この研究によって、日本の陸上競技が東京大学の運動会が起源となり、東京大学陸上部の発展に伴って、導入期の日本陸上界が発展していったことが読み取れる。東京大学の「運動会」が後の中等教育・高等教育の部活の基礎となったことも、日本特有の部活という学校教育の課外活動に影響を与えたと考えることができる。

陸上競技が日本の教育に与えたことを考えると、二つのことが明らかになったといえる。一つめは、陸上競技が身体の鍛錬のためにストレンジが導入し、それを踏襲する形で陸上競技が日本の大学に普及していったということである。二つ目は、計器の導入や改良によって、具体的な数字によって体力を測定できるようになり、そのことによって、国民の基礎体力を計り、的確な体育授業を行えるようになったということである。とくに、東京大学は最高学府として、体育会の設置、競技会の開催、陸上機器の近代化などを通じ、陸上競技の普及に社会的影響力を発揮し、各大学などに多大な影響を与えたと考えることができるのである。

〔註〕

（1）法・文・理の 3 学部をさす。

（２）大阪毎日新聞社『大阪毎日新聞五十年史』大阪毎日新聞社、1932 年、22 頁。
（３）現在の京浜急行電鉄株式会社。
（４）大日本體育協會 『大日本體育協會史 上巻』大日本體育協會、1878 年、179 頁。
（５）第 5 回オリンピック大会予選競技会での三島は 100 m、400 m、800 mで第 1 位となり、それぞれ記録は 100 m 12 秒 0、200 mは 2 位のため記録なし、400 mは 59 秒 3/5 であった。また、金栗の記録は、2 時間 32 分 45 秒であった。
（６）「日本陸上競技界の矢達　三島さんを想う」朝日新聞(朝刊)　1954 年 2 月 3 日、6 頁。
（７）1911 年に辛亥革命が生じたため、開催時支那は二つにわかれていた。
（８）現在のタイ国。
（９）山本邦夫『近代陸上競技史 上巻』道和書院、1974 年、269 頁。
（10）現在の毎日新聞。
（11）前掲『大阪毎日新聞五十年史』、399 頁。
（12）同上、399 頁。
（13）同上、195 頁。
（14）前掲『大日本體育協會史 上巻』、92 頁。
（15）同上。
（16）大日本體育協會『大日本體育協會史 下巻』大日本體育協會、1878 年、841 頁。
（17）同上。
（18）同上、844 頁。
（19）同上、845 頁。
（20）当時陸上部を「徒歩部」と呼称することが多々あったようである。これは当時のいくつかの大学や高校で例がある。たとえば青山学院大学においても同様の部がみられ、慶應義塾と同じように後に陸上部に改称された。
（21）福沢諭吉は『西洋事情』で、西洋では学問の疲れを散じ身体を健康に保つ手段として体育を重視している、と紹介している。三田山上には三田山上にはブランコ・シーソー・鉄棒等が置いてあったという。また、體育會はその後続々と種目を増やし、わが国に初めてそのスポーツを紹介し、それの普及と発展につとめた種目もある。ラグビー・フットボール、グランド・ホッケー、ウォーターポロ(水球)等がそれである（慶應義塾豆百科 No.49「体育会の設立」、閲覧日：１０月１４日、＜ http://www.keio.ac.jp/ja/contents/mamehyakka/49.html ＞)。
（22）それ以前にも運動会の開催はあったが、いずれも外国人主導であり定着しなかったという。東京大学の運動会がその後の運動会の盛況の規範となったようだ。伊藤明「明治時代の運動会(明治時代の新聞記事： 運動会篇)(体育・スポーツ資料集)」上智大学体育、2007 年、1 頁。
（23）慶應義塾は明治３年（1870 年）に芝新銀座から三田に移った。
（24）＜ http://www.keio.ac.jp/ja/contents/stained_glass/1995/192.html ＞（ステンドグラス「体育事始め」。閲覧日：１０月１４日)。なお、図 2 も同ウェブを参照した。
（25）図１は、1894（明治２７）年の「風俗画報」第 74 号に載った絵図（1894 年 5 月 26 日の慶應義塾運動会競走の図。図上部左重荷競走の図、右盲目珠拾競走の図)。図３も、同上の雑誌に載った絵図（1894 年 5 月 26 日の慶應義塾運動会の図。図右から 400 ヤード競走の図、幼稚舎生柔軟体操の図、幅飛の図)。詳しくは、慶應義塾所蔵貴重写真コレクション KOALA-A ＜ http://koara-a.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/news/＞を参照のこと。
（26）中澤篤史「大正後期から昭和初期における東京帝国大学運動会の組織化過程：学生間および大学当局の相互行為に焦点を当てて」『体育学研究』、53 巻、2008 年、318 頁。
（27）慶應義塾體育會競走部 75 周年記念事業実行委員会『75 周年慶應義塾體育會競走部史』、慶應陸上競技倶楽部、1995 年、6 頁。

(28) 伊藤明「明治時代の運動会(明治時代の新聞記事：運動会篇)(体育・スポーツ資料集)」『上智大学体育』、2007 年、2-3 頁。
(29) 駒場のグラウンドにはストレンジの胸像が彫られたレリーフがあり、そこには「1875 年来日し東京英語学校、東京大学予備門、第一高等中学校の教諭として英語を教える傍ら、ボート、フットボール、ベースボール、各種陸上競技など欧米のあらゆる近代スポーツの紹介と奨励に努めた」と書かれている。
(30) 池田潔『自由と規律』岩波書店、1949 年、146 頁。
(31) 岡尾恵市『陸上競技のルーツを探る』文理閣、1996 年、13 頁。
(32) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史』東京大学出版会、897 頁。
(33) 岡尾恵市『陸上競技のルーツを探る』文理閣、1996 年、231 頁。
(34) 鈴木秀人『変貌する英国パブリックスクール』世界思想社、2002 年、50 頁。
(35) マッキントッシュ『近代イギリス体育史』ベースボールマガジン社、1973 年、15 頁。
(36) 前掲『近代陸上競技史 上巻』、57-59 頁。
(37) 現在、運動会は各部を統括する管理機関の形をとっている。
(38) 東京大学陸上運動倶楽部編集『東京大学陸上運動部 120 年史』、6 頁。
(39) 前掲『近代陸上競技史 上巻』、110 頁。
(40) 同上、111 頁。
(41) 前掲『東京大学百年史』、901 頁。
(42) 同上、910 頁。
(43) 同上、905 頁。
(44) 田中館愛橘『メートル法の歴史と現在の問題』岩波書店、1934 年、11 頁。
(45) 東京大学陸上運動倶楽部編集『東京大学陸上運動部 120 年史』、906 頁。
(46) 同上、913 頁。
(47) 同上、921 頁。
(48) 同上、11 頁。

第六章　女子スポーツ

はじめに

近年、日本の女子スポーツの発展は目覚ましいものがある。昭和 30 年代は東洋の魔女と呼ばれた女子バレーが世間を賑わせた。シドニーオリンピックで金メダルを獲得した高橋尚子は、女子スポーツ初の国民栄誉賞を獲得した。水泳や柔道でも良い成績を修め、最近ではなでしこジャパンともてはやされた日本女子サッカーが活躍したりするなど、日本のスポーツを語る上で女子スポーツ（選手）は外せないものとなっている。

しかし、それでは始めから女子スポーツというものは国民に受け入れられ、発展してきたのか。そこには何の障壁もなく、順調に普及していったのだろうか。私たちは、大正 10 年代の女学生向けの競技会が多く開かれることになったことを「普及」の一つの定義とする。そして、体育は学校内で行われている、学校教育のカリキュラムの 1 つであり、スポーツは学校という枠にとらわれない、体育以外の活動、学校内外で発展したものを「スポーツ」として定義する。女子体育が導入されてから、女子スポーツがどのように普及されていったのかを探り、さらにそこに学校教育がどのように関わってきたのかを明らかにしたい。また、明治から大正時代の女子体育・女子スポーツに対する意識の高まりをみることで、女子スポーツの発展の過程をより鮮明に考察していきたいと思う。

第一節　女子体育の展望

１．女子体育普及の流れ

はじめに、女子体育の普及の流れについて時代ごとに見ていきたい。

(1)女子体育の芽生え――明治時代

1874（明治 7）年当時の学校において、体育については確実な方針もなく、「女子体操当分見合」というのが実情で、手芸や裁縫、諸礼の教養が優先されていた。翌 1875 年には、東京女子師範学校で体操が課され、その学校規則では、「手芸・唱歌・体操」というように全教科の末尾に体操の名があげられ、「身体ヲ運動スルハ健康ヲ保護スル為メ最モ切要」（第 3 条）[1] という見地から体操を意義づけている。しかし、その運用と方法は定められていない。そして 1876 年 11 月には、「裁縫・運針法・体操」と教則を定め、ドイツ女教師のクララ・チーテルマンを招いて幼稚園を設け、女子の特性としての保育に力を注ぎ始めた。

1878（明治 11）年になると、文部省も女子の体育について関心を示し始め、医学士リーランドが招聘され、体操伝習所で「新体操法」の実施にとりかかった。当時の体操伝習所の教科は、「体操術ハ男子体操術・女子体操術・幼児体操術・美容術及び調声操法」[2] などに分けられ、方針は、「専ラ我人人民風土ニ適スヘキ体育法ヲ試案考究セシムルニアリ、是解剖生理衛生学ノ情熱ヲ一層急要スル所以ナリ」[3] とされている。明治 10 年代初期において、各地方における女子体育の実情は、一般に女児学校では見るべきものはなく、上等小学科の教科内容も、男子は体操、女子は運動と区別されていた。

補足として記しておくが、この頃に女子体育の目的について、「筋肉ヲ発育強固ニシテ其成長ヲ容易ニシ其四肢百体ノ障害ヲ除去スル」[4] という意見があった。1882 年におい

て、『新制体操法』の内容は、整頓法・身体矯正法・徒手体操・啞鈴体操・女子啞鈴体操・棍棒体操・二人球竿体操など 7 節からなり、中でも「身体ヲ善容好姿ニ為サシムル」[5] 身体矯正術は、「器械ヲ籍ラズ専ラ四肢軀幹ヲ運動セシメテ以テ体ノ姿勢ヲ整美ナラシムル」[6] という点から女生徒にも試みられた。宮城師範学校において「男女教場ヲ異ニス」[7] と定められているように、裁縫・礼節・音楽・体操などが、不可分な教科として女生徒に要求されていく。つまり男子と女子では受ける科目が分けられていることが読み取れる。

こうして明治前期の女子体育は、東京女子師範学校を実験台としながら、次第に地方へとその理論と方法が浸透していった。体育全体を見渡してみると、1884（明治 17）年頃から今までの軽体操と並んで兵式体操が学校教育の中に組み込まれてくるが、東京女子師範学校の体操には、依然として伝習所教員が派遣され、師範科（93 名）高等女学科（102 名）の生徒に対して、「孰レモ之ヲ甲乙ノ二組ニ分チ日々二十分間軽運動」[8] を必修としていた。

1886 年頃からは、一般に「体操ハ幼年ノ児童ニハ遊戯稍長シタル児童ニハ軽体操、男児ニハ隊列運動ヲ交フ」[9] というように、兵式体操の影響が色濃く出ており、師範学校女子体育の面でも多少その影響は免れなかった。当時の教育雑誌の記事にも、運動会や遠足に兵式演習や行軍が加えられて活発な景況が散見される。その一例として「宇都宮西校生徒秋季運動会」の模様を揚げることでその雰囲気を読み取って欲しい。

> 去る十月三十一日をトし宇都宮西校生徒の運動会を挙行せり、抑宇都宮には東西両校あり、之を男女両校に分つ、両校は市の西方にあり、男校生徒凡八百女校生徒亦八百に近し、男校長を岩崎某と称す、……女校長を塙某と云ひ東京女子師範学校の卒業生と聞けり、……各生徒は夜の明くるを遅しと学校の庭前に詰め寄せ午前七時総員一同整列し号鼓一声隊伍を作りて操出せり、従来は都て兵式に模し級の上下を以て全校を二大隊に編し一を男子部とし二を女子部とす、……男生徒は或は洋服或は筒袖にして袴を着くるあり、其出で立ち甲斐甲斐しくも目覚しき有様なり、女生徒は概ね束髪にして草履を着し男生徒の後に従ふ、教員は都て男女共に洋服を着して各隊を指揮せり、……男生徒は第一普通体操、第二競争、第三綱引、第四旗戻、第五フートボール等にて各技其優劣を判して賞品を授与せり、又女生徒は第一遊戯、第二一脚競争、第三周り鬼、第四毬投げ、第五普通体操等にして各技亦其巧拙を判して賞品を授与せり、其指揮は場の周囲に生徒を整列せしめ先づ唱歌を以て始め、次に校長塙氏は優等生に賞品を授与し再び唱歌を以て終わる、互に隊伍を整へて引上げしは午後五時なりき、此挙たるや両校教員の尽力と有志諸氏の尽力とよりなりたるものにして生徒は皆活発に運動せり、当日は県官師範中学両校職員郡吏も見え、且市中の老若男女も陸続出かけ流石の広原も処狭きまで感じたりき[10]。

明治 20 年代に入ると、女子体育の問題が一般に認識され始めた。この当時は文明開化の名残もあり、「世人ハ身体ノ虚弱ヲ以テ心力ノ卓絶ニ相伴フモノト思惟スルニ慣レタリ」[11] というような風潮も依然として底流となって流れていた。また 1886（明治 19）年には「女子の智力進めば男子の強剛も圧抑の機器たるを得ず」[12] という記述があるように、智力に対して満腔の信頼感を抱いていた。しかし、女子の体質的特徴を捉え、ついで知育

と等しく体育についても「同権」と見なす合理的立場が育っていき、両性の天然の特徴が指摘される。その一例を挙げておく。

> 男子ノ体質ト心意トハ重キヲ負ヒ堅キヲ摧キ、遠キニ行キ高キニ登ルニ適スレバ、女子ノ性ハ子ヲ養育シ衣食ヲ調理スルニ適ス。如斯各性ノ適宜スル所アレドモ何レヲ上トシテ何レヲ下トシ、何レヲ尊トシ何レヲ卑トスベキカ、之レ囲イヨリ其理ナキナリ[13]

これが女子体育に投影されると、

> 抑体育上体操ノ女子ニ必要ナルハ猶ホ男子ニ必要ナルガ如ク毫モ異ナル所アラズ、然リト雖諸体育中実際女子ニ不適当ノモノアラバ之ヲ取捨配量スルモ亦敢テ不可ナルコトハナカルベシ、之ヲ要スルニ吾生の女子体操ヲ必要ナリト論ズルハ必ズシモ女子ヲシテ男子同一ノ体操ヲ応用セント主張スルニハアラズシテ、女子ヲシテ男子ト同一ニ体操ニ従事セシムルノ緊要ナルコトヲ主張スルニアルナリ[14]。

というようになる。素朴な立場ではあるが、この頃すでに児童に対する自由運動と規則運動の適性問題、また選択問題がとりあげられている。

1890（明治 23）年 10 月になると、「小学校令」が改正され、翌 1891 年 11 月には「小学校教則大網」が公布され、その中で「男児ハ主トシテ兵式体操ヲ授ケ女児ニハ普通体操若クハ遊戯ヲ授クベシ」[15] と定められている。さらに 1892 年の「尋常師範学校ノ学科乃其程度」の改正では、週 3 時間の普通体操と遊戯が定められた。1895 年には文部省が「高等女学校規程」を定め、「精神ヲ爽快ニシテ身体ヲ健康ナラシメ」[16] るために、「普通体操若クハ遊戯」を週 2 ～ 3 時間、必修正課として認めている。これは 1899（明治 32 年）の「高等女学校令」で週 2 時間半と短縮された[17] が、1901 年の同法施行規則 13 条において週 3 時間に回復するとともに、

> 体操ハ身体ノ各部ヲ均斉ニ発育セシメ之ヲ穏健ナラシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ容儀ヲ整ヘ精神ヲ快活ニ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尚フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス[18]

というように社会的徳目と結び付けている。1902（明治 35）年 5 月に東京女子体育大学の前身である東京女子体操学校が小石川に設立された（同年 11 月に東京女子体操音楽学校に改組）。1903 年には日本体育会の体操学校が女子部（1 カ年）を設け臨時講習会を開いた。同年の 3 月には文部省が高等女学校授業要目を定め、普通体操（準備・整容・呼吸・矯正・徒手・啞鈴）と遊戯（行進運動及遊技）が 2 対 1 の割合で課せられた。教授用備品は啞鈴・羽子板・羽根・毬・輪・網・クロケット・ローンテニスなど、行進運動では十字行進、踵趾行進や方舞（square dance）があげられている[19]。また、「教授上の注意」の第一には、「体操はなるべく女教員をして之を教授せしむべし」[20] という指摘がなされ、過度の運動や女子の定期的身体異常、及び不衛生不適切に環境の下における運動を禁じている。

この時期の女子体育の振興は、生活様式の近代化とともに近代女性の育成にふみ切り、

それが特に運動服の着用を通して服装改善問題に発展した。この服装改善問題については第二章の女子体育の発展に伴う諸問題で記す。

1910（明治 43）年 5 月には全国師範学校長会議が開かれ、体操か授業の増加と柔道など武道の復活が答申されたが、その影響を受けて女子に対する運動として、薙刀・水泳・弓術・氷滑・庭球・羽根つきなどの 6 種目があげられている[21]。

(2) 女子体育の普及――大正時代

1913（大正 2）年には、学校体育に関する初めての教授項目である学校体操教授要目が定められた。また女子に関しては「授業上ノ注意」の中で以下のように記されていた。

> 女子ノ運動ニ関シテハ其體力竝容儀ニ留意シテ教材ヲ配當セルモ尚服装等ノ状態ニ應シ適宜教材ヲ取捨シ教授ノ方法ヲ適切ナラシムルヲ要ス教練ニ於ケル行進ノ歩幅ハ兒童竝女子ニ在リテハ適宜之ヲ縮小スヘク其速度ハ兒童ニ在リテハ稍々速キヲ常トスヘシ又行進ハ時々其ノ歩幅速度等ニ變化ヲ興ヘテ之ヲ練習セシムルヲ要ス女子ニ在リテハ行進ニ於ケル膝ノ屈ケ方ヲ少クシ股ヲ擧クルコト稍々低カルベシ[22]

大正後期に臨むこの時期は、自由で自然なゲームや遊戯が注目されるが、女性の適性についても留意された時期であった。1917（大正 6）年には臨時教育会議が開催され、翌 1918 年には女子体育への振興が決定した。そしてこの時期から女子の競技大会が数多く開催されるようになり、これをもって女子体育が普及したと判断できる。例えば、1921 年に女子庭球大会が開催された。1922 年 5 月 27 日には第一回女子連合競技大会（東京 YWCA 主催、東京女子高等師範学校校庭にて 8 校 185 名が参加）、また 8 月 12 日には全国女子競泳選手権大会された。10 月 14 ～ 15 日には、水上競技選手権大会が茨城の中学校のプールで開催され、女子は 50m、100m、200m、100m 平泳、200m 平泳、そして 100m 背泳の 6 種目が実施された。また、10 月 27 日には第二回女子連合競技大会（7 校 200 名が参加）、11 月 12 日には第一回全日本女子陸上選手権大会（大日本体育同志会主催、陸軍戸山学校運動場にて 18 校 2 団体 315 名が参加）が開催された。

1924（大正 13）年には第一回日本女子オリンピック大会、第一回明治神宮競技大会が開催された。1925 年には第 4 回全国学校衛生会総会が開催され、「女子体育運動に関し学校医の留意すべき事項」に関する文部大臣の諮問に対して、男女運動の不適切、月経時の配慮、女子の禁忌運動種目や女子に適した運動種目及び必要限度量などが答申され、その結果、翌 1926 年 3 月に、訓令第 3 号をもって「体育運動の振興に関する件」が公布された。ここでは、「女子の体育運動に関しては特にその精神的並に身体的特徴に適合せる運動の種目及実施方法を選定し且運動時の態度服装等に注意すること」[23] とされ、女子体育の基礎を医学的角度から見るといったような一歩進んだ態度が見られることが分かる。

(3) 女子体育の定着――昭和時代

昭和期に入ると、美的で律動的な新体操が積極的意欲的に取り入れられ、女子体育はこの方面で新生面を拓いていく傾きがあった。新体操は人間のもつ自然性に立脚して生活と結びついた合理的動作を強調し、生理解剖学、心理学、美学などに基づいて個性的な運動

を自在に展開させ、自然的で綜合的な動作を重視し、音楽（リズム）と関連を保ちつつ律動的表現体操を主とする立場である[24]。1934（昭和 9）年 11 月には文部省が学校体操調査委員を任命し、翌年 12 月には「第二次改正体操教授要目」を公布したが、ここで男女の特徴を個別に発揮させるよう吟味を加え、女子の中等学校と師範学校に弓道と薙刀とを課している[25]。1937 年 5 月 29 日には、「青年学校教授及訓練要目」が出されているが、女子に対しては「むしろ保健整容等を目的として抵抗力のある総和的には粘り強い強靭な体質と而も均斉のとれた整った身体を作り上げること」[26] が要求され、鍛練的教材の採用にはまだ控えめであることが分かる。

しかし 1941（昭和 16）年 3 月 1 日に「国民学校令」が公布され、体錬科体操（体操、遊戯、競技、教練、衛生）と体錬科武道の 2 つに分類されると、中等学校、専門学校においては、男女共に「国防能力の向上に努め」[27] るため、身体と精神を鍛錬し錬磨するように改められた。また、1940 年 4 月 8 日に「国民体力法」[28] が公布され、男（26 歳未満）女（20 歳未満）の身体の発達、疾病、運動機能などの体力検査が毎年実施されることになったが、1943 年 9 月からは男（15 ～ 25 歳）女（15 ～ 21 歳）を対象に歩走、跳躍、投擲、運搬、徒手体操など 5 種目の体力章検定制度が布かれた[29]。この制度はさらに 1944（昭和 19）年 3 月に文部省外廓団体であった大日本体育会の「国民体力錬成目標実施要綱」によって改められた結果、体力章検定が拡大され、年齢の枠がはずされた。女子の基本種目は、1000m 速行、縄跳、運搬、重量投、体前屈などとされ、特殊種目に水泳、行軍などが指定された[30]。このように年齢の枠なく体力検査が行われるようになったというところから、女子の体育が定着したと言えるのではないかと思う。

２．女子体育と教員養成機関

(1) 女子体育教員養成機関の誕生

前述のように、1902（明治 35）年 5 月に東京女子体操学校（11 月に東京女子体操音楽学校に改称）、1903 年 1 月に日本体育会体操学校女子部、そして東京女子高等師範学校国語体操専修科が相次いで開校された。この 3 校は、日本の女子体育の発展とそれを担う教育者の養成機関の先駆けとしてその役目を負った。その後、多くの女子体育教員を輩出し、女子体育の発展に寄与した。これら 3 校の設立経緯等をみることは、学校という教育機関が女子体育の発展にどのように影響を与えたのかを知る手掛かりになると期待できる。

まず 3 校の設立当初の様子を見てみようと思う。東京女子高等師範学校国語体操専修科（以下女高師）は、設立以前から指摘されていた体操科の教員欠乏という問題の解決を目的に設立された。また、当時体操は出来る限り女教員によって教授されるべきである、という指摘があったことは本論文 1 でも述べられている。当時の女高師 4 代目校長高嶺秀夫は「体操科を主とすれども、一は学習者の修養上の為に、又一は当時に在りては体操一科のみの女教師に在りては採用の際不便なるべきを察して国語課を併せ課したるなり」[31] と、学校の方針として体育に関する学科以外の科目も学ぶべきであるという方向をとった。また、この学校は、文部省検定を受けずに高等女学校、師範学校の教員の資格を得られる唯一の学校であった。

次に日本体育会体操学校女子部（以下女子部）は、設置当初は小学校体操科教員の養成を目的とし、高等女学校の体操科教員の養成を目的とした高等科を設置したのは 1904（明

治 37）年のことだった。またこの学校も女高師と同様兼修することを勧めており、そのため女子部では主な授業は午後に行われ、午前中に他の学校で兼修できるように授業を組んでいた[32]。

東京女子体操学校は、女子師範学校、高等女学校、女子小学校の体操教員を養成することを目的とし、併設の東京女子唱歌学校との兼修ができた[33]。最初に記したように、この学校は 1902 年 11 月には東京女子体操音楽学校と改称したが、この両校の合併で一つの学校の中に体操科と音楽科にわかれ、こちらでも両学科の兼修は行われていた。

これら三校の設立当初の様子を概観してみると、共通して兼修を生徒に勧めている動きが見られる。これは、女高師の校長高嶺の言葉の中にもあるように、当時の女子が体育の教師として自立することが難しいことを示しているといえる。当時の教員の数の割合[34]をみてもわかるように、教員全体に占める女子教員の割合というものが非常に低かった。現代では女性教員というものは何の違和感もないが、女性が働くことに対して良い印象がなかった当時の世間の考えを受けて、女性教員の人数は伸び悩んでいた。

こうした当時の女性教員に対するイメージについては、「女子ハ規定ノ学科ヲ卒業スルモ其ノ学力技能ノ男子ニ劣ルノミナラス、之ヲ男子ト混用スレハ醜聞ヲ伝ヘ児童徳化ノ道ニ背クモノアリ、……女生徒ハ之ヲ養成シテ後、得ル所ノ利益少ク男教師ノ利益多キニ若カス」[35]といった、当時山口県や富山県、千葉県など各地で見られた女子師範学校の廃止論からも窺える。加えて、他の科目に比べ体育という科目は幾分地位として低いところに位置していたことが指摘できる。具体的な例として、1905（明治 38）年に行われた文部省教員検定試験の出願者割合をみるとそのことが見て取れる[36]。以上のような要因を背景に、女子体育教員の養成段階から、体操科だけでなく、他の科目との兼修を学校側が勧めていたとされる。

(2) 教員養成機関の特徴と果たした役割

では、これらの学校は設立以降、どのように授業を行っていたのか。

女高師では、日本の女子体育の発展に大きく寄与した井口あくりが担当講師の取締を務めており、その他にも坪井玄道が高等師範学校と兼任で教師を務め、坪井玄道の退官後は永井道明が務めた[37]。その他にも、この学校を卒業した生徒が引き続きこの学校で教師として着任することもその後みられるようになった。女高師は他の 2 つの学校に比べ修業年限も長くその期間は 2 年であった。授業時間の配分をみると、この学校は特に特筆すべき点がある。各学年週 28 時間の授業で（2 学年 3 学期のみ週 24 時間）、倫理（2）、教育（3）、国語（9）、漢文（3）、習字（1）、生理（2）、体操（6）、音楽（2）で、国語関係の授業時間が 13 時間占めている[38]。先に兼修を勧める方針がとられていたことは述べたが、授業時間でみるとその性質が前面に出されていることが分かる。

これと同じような傾向をとっていたのが合併後の女子体操音楽学校である。具体的にみると、倫理（1）、教育（2）、国語（3）、家政（2）、生理（1）、体操理論（3）、音楽理論（1）、和声学（1）、体操（13）、遊戯（6）、音楽（7）となっていて、音楽に関する学科の割合が体操科と比べ高く設けられていることがわかる[39]。一方で、その授業時間の配分は女高師とは異なる。

女子部は倫理（1）、教育（2）、解剖生理衛生付救急医療（3）、普通体操に関する学科

(1)、普通体操（10)、遊戯（2)、唱歌（2）となっている[40]。これは、女子部が女高師と異なり修業期間が 1 年であり、また一日の授業時間も午後 3 時から開始という、設けられていた授業時間が短いことから、体育教員に必要とされる専門学科のみの設置になっているといえる。つまり、体育科目以外の学科は、別の学校で午前中学ぶという点で、学校内で他の科目を設置し兼修を勧めた上記 2 つの学校とは異なるといえる。とはいえ、先に述べたように、これら 3 つの学校が兼修を勧めていたということは共通して授業時間からも十分に読み取れるといえる。

3 校の特徴を兼修という共通の側面から見てみたが、一方で大きく異なる点がある。それは学校の施設等の環境面や、文部省検定の点で、女高師とその他 2 つの学校には境界線があったといえる。具体的にいえば、女子部は設立当初成女学園、1905（明治 38）年から精華学校の校舎を、それらの学校の授業が終わった後に借りて授業を行っていた。このような状況は昭和初めまで続いたのである[41]。東京女子体操学校も同様に教える場所を転々としていた。女子部のように小学校を借りることもあれば、個人の家を改造して畳敷きの場所で行うこともあったという[42]。これは当時、両校は財政難という状況が背景にあったためである。そのため、文部省検定を受けずに高等女学校、師範学校の教員となる資格を与えられていた学校はしばらく女高師だけであり、同じように検定を受けずに高等女学校体操科の教員になることが認められたのは、日本体育会体操学校で 1923（大正 12）年であった。このことからも、女高師と他の 2 校との間に差があったことは事実のようである。

しかし、それぞれが補い合いつつも女子体育の発展に貢献したことは確かである。例えば、先に述べた授業カリキュラムの例で見ても、修業年数が女高師では 2 年であるのに対しその他 2 つの学校ではその半分の 1 年であった。つまり、どうしても女高師は卒業までに時間がかかる。その分、他の学校が毎年絶えず多くの卒業生を輩出した役割は大きいといえる[43]。特に、東京女子体操音楽学校は、開校から 11 年の段階で、女高師の約 4 倍以上の卒業生を世に輩出している点は注目に値する。これらの学校の卒業生は就職先に関しては、女高師が師範学校へ就職する者が一番多く、女子部と東京女子体操音楽学校は主に高等女学校や尋常小学校へと就職した[44]。

これらの学校の設立をきっかけに、確かに世論には様々な指摘や就職上の困難さもあったものの、それまでの女子体育教員の欠乏という状況から徐々に脱し、世に多くの女子体育教員を輩出したこと、また、これらの学校の卒業生がその後女子体育の発展上で果たした各々の活躍は、注目に値するものであったといえる。

第二節　女子体育の発展に伴う諸問題

１．ジェンダーと体育

明治から大正にかけて、女子体育推進派と反対派の動きがあった。そこで明治後期の女子体育に対する社会意識はどのようなものであったかを、当時活発化した女子体育の是非をめぐる論争の中に探ってみる。

(1) 明治 30 ～ 40 年代における女子体育をめぐる言説

当時、「女子が教育をうくれば生意気になり、おてんばになりて女子の品性を堕すとは

新教育を受けざる人達の憂ふる所なれどまったくいはれなき事なり」[45]といったように旧世代にとっては女子体育・教育は「お転婆」と「生意気」は反社会的な行動として映り、女性の自立の意識の芽生えは良風美俗に反するものであったと考えられていた。お転婆主義は女子大学を奉じる儒教主義に対してキリスト教主義的色彩を帯びているとされていて、そのお転婆養成の旗手が体育であると考えられていた。この時代の文化人大町桂月は、

> 日本婦人には体育といふものなかりき、否寧ろ体育を排斥せり、何事もしとやかに、其言を発するや蚊のなくやうなるを女らしと褒め……活発に歩けばおてんばとけなさる。歩行は末事なれど国民活動の一端也。女の歩き方も今少し活発ならざるべからず[46]。

と述べている。そして、この頃は親もまた

> 己が娘はなるべく、肥え太らぬやう、顔も蒼白く、手足も華奢に……細腰にして、屈みがちならんを望み、学校にて盛に戸外の運動を奨励し、日向にて体操などを課するのを見、その美質を害ふものとして女子の教育をあやまてりと不平を唱ふ父母ありときく[47]。

として、女子体育に対して消極的であり、戸惑いが見られたようであった。一方、女子教育者の三輪田真佐子は、

> 将に発達せんとする女性をば一室に閉じ込めて身体を害すること如き。……更に体育につきて考ふるに女子と体操との関係は単に身体の強大に影響するのみならずその他種々の点に於いて……影響するものなり[48]。

と、品行端正で生き生きして活発であれば、女性は侮られることはないと説いている。

女子体育推進派は、体育こそが女子を真に女子たらしめるものである、とした。つまり、女子の務めは母として強い子供を生むことであるが、そのためには母親は、身体的に健康でなければならない。この健全で強い母をつくるのが、体育である。またそのためには顔面蒼白でか細い女子を美人と称するような、わが国の伝統的な女性観を改めなければならぬ、とも言っている。女子体育反対派は、女子体育は、女性らしさをそこない、いわば男性もどきをつくりだすものである、とその弊害を主張する[49]。良妻賢母の捉え方や、その脱却を巡って両者は対立しあっていた。明治30年代の実情は、

> 現今我邦の教育社会では男女を問わず体育といふことに大変議論が高まって、いずれの教育家もその点について大変苦心しているとの事でありますが、就中女子の体育については其事を論ずるのみで其方法を実行するといふことには未だに充分に達して居らないと考ひます[50]。

というようなものであり、また、

近頃になりまして、女子の体育といふことの必要を唱ふる人の多くなりましたのは誠に喜ぶべき事と思います。女子の体育と申しましても今日迄実行いたして居りますものはあまり多くありません、しかし女学校とか小学校では体操も遊戯も行って居ますけれども、これは学校限りのもので学校以外ではあまり行われて居りませぬ。それは社会がそれ程進んで居りませぬから学校以外で行うべき場所の設備と云ふものか出来ていませぬ、それ故に世間で女子体育の必要を論じて居る程まだ実行されて居ませぬ[51]。

といったような記述も見られる。学校での体操・遊戯は行われていたのであるが、それ以外での発展が少なく、女子体育・スポーツといった点ではまだ広がりを見せていなかったと考えられる。そこには設備・費用などの問題のほかにも、服装や前述のような推進派反対派の対立などもあったとも考えられる。

前述の推進・反対論における両性の身体的・社会的役割の違いを述べた言説の特徴は以下3点にまとめられる。

①男性の身体との比較によって女性の身体を表象している。すなわち、男性の身体との比較なしに、女性の身体は描かれることが困難であったか、あるいは、比較によって理解される身体であると受け止められていた。このことから、スポーツにおいて基準となる身体は男性のそれであったことが読みとれる。

②①のような比較によって女性の身体が記述される言説においては、比較の対象となる女性の身体は、体型・骨格・筋力等の点で、身体的活動・スポーツへの適応が低い存在であるとされている。

③多くの推進論には、身体的な違いと並列して、女性の社会的な役割や「女性特有の」人格的特徴に関する言説がみられる[52]。

この時期の女子体育論争は、他面で「女」の定義をめぐっての論争であった。そして、推進派・反対派の双方は、女子体育の是非をめぐって対立してはいたものの、自らの主張を「真の女性」への到達手段として位置づけている、という点では共通していたのであった[53]。

この状況を打開したのが「高等女学校をはじめ、各種の女学校、ようよう盛んになり、通学する少女の数、いと多くなり増されるが上、30年31年の頃に到りては、女生徒の運動に心を留むる教育者も多くいで来、そが研究にとて、海外に女教師をさえ派出する形勢（アリサマ）なれば」[54]という期待に応えた、井口あぐりである。彼女は「自分の身体を強健にして総ての事に耐へて行くと云ふ婦女子にならうと心掛け、女子自身が先づ熱心になって男子の力を籍りんでも自分自身に行って往かねばならん事だろうと思います……併し今の時代になって見ますると、女だからと云って決して引込んで居るばかりでなく、自分から抽んで、其の責に当って熱心にやらねばならんことだろうと思います」[55]と述べ、女性の立場からも女子体育推進に努めていった。

(2) 女子体育から女子スポーツの発展に向かう大正時代

大正の初めには個人的な美しさや健康といった面にも目が向けられるようになった。大

正時代は同時に欧米の考えがどんどん取り入れられ、女性の価値が高まりを見せた。糸左近は、「運動は筋骨の発育を盛んにし、その上硬く緻密にし、その他精神を無邪気にし食物の消化を助けるなど偉大の効力のあるものである故に我国の娘たちがこれより大いに運動を励行せられたならば、四股が長くなって胸廓も大きくなり、頭と腹の釣合を宜しくし、標準通り体重 13 貫 m 以上 5 尺以上になって、デブ～太りや、又は反対に痩せこけた醜い恰好の人が無くなる」[56] と述べ、女性の潜在的願望は美しくなることであり、その欲求を満たすものが体育なのではないかとしている。

そして 1917（大正 6）年の臨時教育会議では翌 1918 年から「一層体育ヲ励ミ……以テ我家族制度ニ適スルノ素質ヲ与フルニ主力ヲ注グコト」[57] という女子体育への振興が決定した。その結果、各女学校は体育奨励の方針を打ち出した、宮城県第二高等女学校校長の小倉博は、「新時代の婦人として時代に適応した総ての条件を拘束なしに自由に教育しよう」[58] との信念から

> 男性的といふよりも寧ろ人間的な競技を各女学校の間に普及奨励して行きたいと思ふ、それがお転婆であるとしても決して非難さるべきものではなくて返って新時代の女学生に望ましい事で其所に将来の新婦人の生命が宿り、力が生まれるもので婦人の世界を男子の世界と同じ権力の上に築き上げる事の出来るものと信ずる[59]。

として女子体育を盛り上げた。そして女学校内で行われていた遊戯は次第にスポーツ、競技に発展し、対外試合が行われるようになった。その時の状況として、

> ここ一両年ほどの間に於いて、わが国の運動熱―就中婦人の運動熱の熾んになったことは真に驚くべきものがあります。……今仮に一両年間の主なる婦人女学生間の体育上の催しについてみると、わが婦人体育家として名声のある二階堂トクヨ女史が……代々木に体育学校を設けたのを始めとして各女学校の野球競技、……時事新報社主催の女学生庭球大会、女子基督教青年会主催の女子体育競技会、万朝報主催の女子水泳大会、その他の女子の運動競技が如何に多く開かれたかは数ふるまでもない程であります[60]。

とあり、急激の女子スポーツの隆盛が到来したのである。当時の女性雑誌『女学世界』をみると、1922（大正 11）年から今まで掲載されてこなかった競技会に関する項目が、急に掲載されるようになったことが分かる（図 1 参照）。

そしてついに 1925 年に「女子の運動熱が近頃ますます隆盛になりつつある機運に向かったのは正しく時勢であります。運動と云ふ事がただ一部の者のみの占有していた時代は去りました」[61] という記述が登場するのである。

２．服装改善問題

ここでは体操服がどのように導入されていったのかをみていく。和装が運動に向かないことは当時の人々も認識しており、服装へのさまざまな意見や工夫が見られる。しかし男子の体操服とは違い、女子のそれは簡単に世間に受け入れられたわけではなかった。どの

	大正 6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
体育論		1		1			2	1		5
教育論										0
健康論		1	1	1		1		4	2	10
海外事情		2	1		2	4	2	9		20
服装		3	1	3	3	1		1	1	13
運動種目		11	5	8	6	10	7	44	15	106
海水浴						1				1
登山		1	14	5	2	1	1	5		29
遠足・修	1	6	9	2	1	1				20
運動会		1	2	1	9	1		9		23
競技会						11	10	41	18	80
施設装具		1			1		3		1	6
講習用具			1			1		5		7
その他					1	1	1	9	1	13
計	1	27	34	21	25	33	26	128	38	333

項目別年次推移

（図 1）加藤節子『雑誌「女学世界」にみる女子体育』上智大学体育学会より

ような過程を経て体操服が導入されたのかを示すことで、女子体育が一般的なものへとなっていく過程も同時に示す事が出来ると考える。

体操が導入された当初から服装に関しての記述は多い。体操は動きやすいように改良した筒袖袴で行い、「女子のためには衣服の下に股引きを穿たしめ、以て肌の露出を防ぐべし」[62] とされている。他にも多くの学校に体操服についての助言をしていることから体操服の導入における第一人者であったと考えられる桜井恒次郎は、理想の体操服の条件として、胸部や腹部・腰を圧迫しないこと、体を動かすのに邪魔にならないこと、着脱のしやすいこと、丈夫で低価格であること、などを挙げている。女子の服装については、どんな運動をするにも肌の露出をしないことや、時に美的条件を備えていること、なども加えられている[63]。

理想の体操服についてはこれらのように語られていたが、実際の教育現場ではどのような体操服が使われたのかを、地域の先駆けとなり体操服を導入した香川県の香西小学校を例に挙げ、その実態を追っていく。香西小学校は 1912（大正 1）年から体操服の導入に向けて動き始めた。それまでの授業は平時の服装、つまり和装で行っていた。その頃行われていた運動会では動きやすい服装ではなく、むしろ晴れ着で参加する生徒が多かったという。運動時の服装を改めることに着手した香西小学校はまず家庭に対して衛生面から体操服への理解を求め、運動時に適した服装とはどのようなものかを説明している。さらに教員がたすきをつけ体育の指導をし始めた。運動会に優美な晴着を着てくるものは減少したが、すぐには絶対的な進歩は得られなかった。

その後、世間にも運動の良さや必要性が次第に認識されたことも手伝い、香西小学校の体操服も急激に浸透していった。1917（大正 6）年頃には運動会はもちろん平時の授業においても体操用の服として体操袴が使用されるようになった。そして翌 1918 年には女子にも体操シャツとズボンの着用がみられるようになる。この年に行われた地域の運動会では女子の体操シャツとズボンという格好は大いに話題となり、注目された[64]。動きやすさを重視して導入した体操服であったが、変化が急すぎる、性を傷つけるものだという批判も多かった。しかし服装に気を取られることのなくなり思い切り運動出来た香西小学校は年 2 回行われる上記の運動会で優勝を果たしている。

この結果を受けて女子の体操服への批判は収まり、香西小学校を模倣する形で香川県に体操服が広まっていった[65]。香西小学校ではさらに 1919 年には男女の体操服の一斉購入が行われている[66]。体操服の一斉購入をした後も帽子の使用をはじめたり、シャツを改良したりと改良は続けられていく。

運動設備や器具の導入と違い体操服の導入は各家庭の金銭的負担が大きい。それにもかかわらず、体操服が普及していったということは、周りの人たちが運動の重要性を認識すると同時に、そのためには和装ではなく身軽な服装のほうが良い、ということを受け入れたからではないだろうか。つまり体操服の普及は各家庭においても、良妻賢母のためだけではない体育の重要性が認識されたことを、示しているのだと考える。

第三節　競技別にみる女子スポーツの発展――水泳

１．女子が登場するまで

第一節、第二節でふれたように、女子体育の大きな飛躍がみられたのは大正後期に臨む時期であった。それは、当時第一次世界大戦を背景に、国力、つまり国民の体力強化を求める声が多かったことや、これまでの体育教育全般の遅れを警鐘する声が出てきた結果といえる。事実 1913（大正 2）年学校体育に関して初めて「学校体操教授要目」が文部省訓令で公布され、1917 年には臨時教育審議会が開かれ、体育全般の改善に向けた動きが活発化した。その後間をあけずに女子中心の競技会が開かれていったわけである。

では、女子体育の促進が活発になった大正から昭和にかけて、女子スポーツは実際にどのような発展をしていったのであろうか。また、そこに女子体育の果たした役割はあったのであろうか。ここでは様々な競技の中でも水泳を取り上げ、その発展と女子の活躍、そして学校教育の関連性をみいだせるのかどうか見ていこうと思う。

日本では、いつから水泳が教育の場で行われたのか。明確に教育活動と見ることはできないが、1854（安政元）年、鳥取藩では水泳が訓練という形で行われていた。このときは海岸防御を目的とした海戦調練のためであり、家中のものは身分問わず皆この稽古に参加していた[67]。その後も鳥取藩では水練として積極的に取り組んでいたようだが、もちろんこれが世間でも同じように行われていたわけではなかった。同時代に他の藩で重視されていたものはもっぱら剣術などの武術が中心であった。明治に入ると、隅田川に遊泳場が設置されるようになった。この遊泳場は主に避暑や余暇を過ごす場所という位置づけであったようで、教育という目的で設置されたものではなかった[68]。

教育という位置づけで水泳が行われ初めたのは、1887（明治 20）年に帝国大学が両国中州に水泳場を開設したという記録に見ることが出来る[69]。その後、1894 年に一高が、1902

年には慶應義塾が水泳部を創設し、東京高等師範学校も同年に水泳場を設け、学校という教育現場で水泳を行う動きが徐々に見られるようになってきた[70]。それから間もなくして、1905（明治 38）年文部省は夏季休業中に師範学校、中学校、実業学校等生徒に水泳練習を督励するように通牒している[71]。このように、各学校、文部省の水泳に対する関心が年々高くなっていったことがうかがえる。

翌 1906 年には、一高と高等師範学校が第一回関東連合遊泳会を千葉県で開催し[72]、その後も日本学生水泳連合、全国学生水泳連盟等の創立が相次いだ。特に、1920 年代から 40 年代にかけてはその動きが活発で、1931（昭和 6）年には日米対抗の試合が行われている[73]。しかし、これらの大会においては、初めのうちから女子が出場していたわけではなく、水泳の種目にもよるが女性の出場は男子より遅いことがほとんどだった。全日本選手権大会を例にあげると、1914（大正 3）年から 1925（大正 14）年までは、女子部門での開催はどの種目でも行われておらず、初めて女子部門が設けられたのは 1925 年の、50m 自由形、100 m自由形、400m 自由形に限られていた。他の種目に関しては昭和に入ってからで、一番遅いものは 200 m個人メドレーで 1965（昭和 40）年からであった[74]。しかし、女子が出場し活躍し始めた年代が丁度女子体育が発展し始めた頃と時期的に重なることは注目に値する。

２．全日本選手権優勝者からみる教育機関の役割とは

では、全日本選手権大会で優勝した選手が所属していた学校、実業団はどのような傾向がみられるであろうか。1925（大正 14）年から開催されている 50m 自由形、100 m自由形、400m 自由形についてみてみようと思う。1925 年から 1985（昭和 60）年の間、50m 自由形で優勝した選手の中で、大学、高等学校に所属していた者の数は 10 人、水泳学校に所属していた者の数は 8 人、実業団が 3 人であった[75]。100m 自由形では大学、高等学校所属者の人数は 28 人、水泳学校が 9 人、実業団が 11 人であった。そして 400m 自由形では大学、高等学校所属者の数は 32 人、水泳学校が 15 人、実業団が 4 人であった[76]。

この記録だけ見ても、教育機関が多くの優秀な水泳選手を輩出していたことがわかる。数の視点だけでなく、別の視点から彼女たちの所属団体の傾向を見てみると、3 種目に共通した点がある。開催年から昭和初期までは、水泳学校所属の者が優勝者になることが殆どで、その後昭和時代の大半は大学、高等学校所属者たちが活躍し、昭和末にはまた水泳学校所属の者の活躍が目立つ傾向があるのだ。大正初期に女子体育の活性化が推し進められた傾向と比べると、最初から大学、高等学校の学生が活躍していなかった点は、時期的にややずれが生じているように思える。例えば、女子テニスの全日本選手権大会では、水泳とほぼ同時期の 1924（大正 13）年からシングルス、ダブルス共に開催されているが、どちらも開始年から昭和初期まで、高等学校や大学所属の者たちが優勝している傾向にある。これは、陸上競技においても同じ傾向がみられた[77]。その点、水泳は開始年から昭和初期にかけての数年間は、水泳学校出身の者が牽引していたということは非常に特徴的である。

しかし、その後の優勝者は高等学校、大学出身者のものがほとんどであり、卒業後実業団に入ってからも成績を残す者は少なくない。その意味で、学校という機関が水泳競技に果たした役目はある程度あったように思う。しかし、これらの学校の体育の授業、あるい

は教育方針が果たした役目というものが、この結果につながったとは考えにくい。というのも、彼女たちの出身学校独自の特色や部活動の強さが結果に影響を与えている傾向が強いように思う。

例えば、全日本選手権大会で昭和 30 年代に 4 年連続 100 m自由形で優勝、200m 自由形でも同時代に 6 年連続優勝していた佐藤喜子氏は、奈良県立五条高等女学校（現奈良県立五条高等学校）出身者であり、その後天理大学に進学後も優勝しているわけだが、彼女の母校であるこれら二つの学校はどちらも多くのオリンピック選手や国際大会、全国大会の優勝者を輩出してきた学校であり、その活躍は部活動という課外活動で支えられたものであったといえる。また、日本で初めて水泳の女子の部門でメダルを獲得した前畑秀子は、周囲の勧めで椙山女子専門学校（現椙山女学園）に入学し、その才能を開花させたが[78]、この学校は当時の他の学校に比べ、水泳をするうえで非常に恵まれた環境であった。椙山女子専門学校創設者椙山正弓が非常にスポーツ活動推進に熱心であったこともあり、当時ではまだ珍しかった室内プールを学内に設置していたのである[79]。またこの例以外にも、前畑秀子と共に同時代活躍した小林一枝[80]もまた椙山女子専門学校の卒業生であったし、国際大会で活躍した川西繁子は、日本女子体育大学、奈良県立五条高等学校の出身者である[81]。

このように、水泳の女子部門の歴代優勝者を見てみると、その多くは水泳学校や実業団よりも学生としての活躍が目立ち、教育機関である彼女たちの母校の働きかけはあったといえる。また、例で挙げた全日本選手権大会の女子の出場が始まった時代は、丁度臨時教育審議会が女子の体育推進を掲げた時代と重なることからも、当時の女子のスポーツ界への進出が実際に形となって現れた 1 つの例として見ることが出来るかもしれない。しかし、彼女たちの経歴が示すように、そこに文部省が示していた学校の授業の 1 つである体育が果たした役割はあまり見いだせず、各学校独自の環境や方針、また課外活動である部活動の影響のほうがより鮮明に出ているといったほうが正確であろう。水泳の女子の活躍の支えには、確かに教育機関は一役買っていたようであるが、そのなかでも大きな要因を占めていたのは、各学校の特色や課外活動であったといえる。

ただ、先の全日本選手権の優勝者の傾向について陸上やテニスの選手と比較してもわかるように、ここでの結果、傾向は水泳においてのものであり、一般化できるものではないことは留意しておきたい。

むすび

明治維新後、国家繁栄を目指す一つの手段として、つまり良妻賢母にふさわしい健康な女性を育てることが体育には求められた。そして東京女子師範学校で体操が科目として課されたことを皮切りに、1900（明治 33）年には「小学校令」改正によって体操が必修科目となり、明治 30 年代半ばには女子の教員養成機関が誕生するまでに至った。しかし、常に学校教育の現場で体育が必ずしも行われていたわけではなく、且つ世論が統一して女性がスポーツに参加することに対して賛同していたわけではなかった。政府の意向と世論の分裂のなかで女子体育のありようが定まらず、結果明治時代の間女子体育全体で、実態も伴った一つの方向に進めずにいたといえる。

しかし、その後他国の女子がどのようにスポーツに参加しているか、そのリアルな情報

が明治後半に入り日本に伝えられるようになった。そのきっかけを作ったのは第二節でもふれた井口あぐりである。女性である井口が、スポーツと女性との関わりがいかに重要であるかを雑誌や帝国教育会を通して積極的に説いたことは、確かに当時服装の問題などは依然としてあったものの、教育界や世論を変える大きな要因となったのである。そして、良妻賢母という大きな考えの上に立っていた体育は、女性の美しさや女性らしさを求める考えの上に成り立つような体育へと変化していった。

そして、1917（大正 6）年には臨時教育会議が行われ、翌年には女子体育の振興が決定された。これを主なきっかけとして、女学校内で行われていた遊戯や体育は、次第にスポーツの形をとり競技として発展し、対外試合が行われる様になった。よって、この時期を女子スポーツの普及ということができると考える。

井口あぐりの帰国をきっかけに女子体育は体育としての形を整えてきた。学校に体操、遊戯が定着してくると、受け手の女学生にテニスなどの遊戯に関心が高まり、興味が根付き、スポーツへと長い時間をかけて変化してきたことがわかる。女子競技が学校体育で育ち、競技会を通じて、スポーツとして普及したというのは、スポーツの魅力に人々が気づいたからでもある。その前段階には、政府の目指す良妻賢母主義に基づく女性作りに対して、賛否両論あり、女子体育というものが異文化であったということを忘れてはいけない。そして、女子体育は、女性イメージと結びついた時に普及が抑制され、男性イメージと結びついた時に普及が促進される、という歴史の皮肉を見出すことができるのではないかとも言える。

この研究によって、明らかにされたことは以上の点であるが、一方で、この研究は女子体育全般を対象としているため、個別の種目で見たときに、普及時期などが必ずしも本論の定義と合致するとは言えない点がある。この点に本研究の限界があることを自覚しておきたい。

〔註〕

（1）上沼八郎『近代日本女子体育史序説』不昧堂出版、1972 年、39 頁。
（2）同上。
（3）文部省『文部省第八年報』国立国会図書館、1880 年、23 頁。
（4）前掲『近代日本女子体育史序説』、40 頁。
（5）体操伝習所『新制体操法』体操伝習所、1882 年、21 頁。
（6）同上。
（7）文部省『文部省第十年報』国立国会図書館、1882 年、21 頁。
（8）前掲『近代日本女子体育史序説』、41 頁。
（9）同上。
（10）開発社『教育時論 61 号』日本図書センター、1987 年（原著 1886 年出版）、元の資料が見つからなかったため頁不記載。
（11）開発社『教育時論 67 号』日本図書センター、1987 年（原著 1887 年出版）、元の資料が見つからなかったため頁不記載。
（12）開発社『教育時論 81 号』日本図書センター、1987 年（原著 1886 年出版）、元の資料が見

つからなかったため頁不記載。
(13) 天島錦造『斯氏女徳新説』共益商社書店、1887、12 頁。
(14) 開発社『教育時論 55 号』日本図書センター、1987 年（原著 1886 年出版）、元の資料が見つからなかったため頁不記載。
(15) 文部科学省ホームページ、詔書・勅語・教育法規等（二）初等教育、小学校教則網。
＜ http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_046.html ＞
(16) 文部科学省ホームページ、詔書・勅語・教育法規等（三）中等教育、高等女学校規程。
＜ http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_063.html ＞
(17) 文部科学省ホームページ、詔書・勅語・教育法規等（三）中等教育、高等女学校令。
＜ http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_067.html ＞
(18) 前掲『近代日本女子体育史序説』、44 頁。
(19) 同上。
(20) 同上。
(21) 同上、46 頁。
(22) 都村精一『改正・学校体操教授要目』都村有爲堂出版部、1926 年、69 頁。
(23) 前掲『近代日本女子体育史序説』、47 頁。
(24) 同上。
(25) 同上、48 頁。
(26) 千葉敬止『青年学校普通学科教授及訓練教授要目解説』日本青年教育会出版、1942 年、21-22 頁。
(27) 文部科学省ホームページ、近代教育制度の創始と拡充、国民学校令の公布。
＜ http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198101/hpbz198101_2_114.html ＞
(28) 文部科学省ホームページ、詔書・勅語・教育法規等（八）社会教育、国民体力法。
＜ http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_138.html ＞
(29) 前掲『近代日本女子体育史序説』、45 頁。
(30) 同上、46-47 頁。
(31) 高嶺秀夫先生記念事業会『高嶺秀夫伝』培風館、1921、115 頁。
(32) 学校法人日本体育会『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』日本体育会、1915 年、82 頁。
(33)『東京女子体育大学紀要 4 号　藤村学園関係史料Ⅰ』1969 年、227 頁。
(34) 中内敏夫『日本の教師 4 / 女教師の生き方』明治図書出版株式会社、1974 年、34 頁。
なお、参考までに下記に 1892（明治 25 年）当時の「身分別教員構成」を示しておく。

身分		男子(人)	男子(%)	女子(人)	女(%)	計(人)	計(%)
正教員	尋常	27,156	96.1	1,077	3.9	28,233	100
	高等	5,499	92.1	470	7.9	5,969	100
	計	32,655	95.5	1,547	4.5	34,202	100
準教員	尋常	22,640	94.6	1,313	5.4	23,953	100
	高等	1,100	67.1	541	32.9	1,641	100
	計	23,740	92.8	1,854	7.2	25,594	100
合計		56,395	94.3	3,401	5.7	59,796	100

(35) 山口師範『創立六十年史』1934 年、66-67 頁。
(36) 参考までに、第 18 回文部省教員検定試験の「学科目別出願者割合」を紹介しておく（出典

は、寺崎昌男・「文検」研究会編「『文検』の研究――文部省教員検定試験と戦前教育学」学文社、1997 年、41 頁)。

	師範卒	中卒	高女卒	高本正	尋本正	高本正・尋本正以外の小学校教員	各種学校教員	職職	その他
修身	30.7	7.7	0	4.3	23.3	5.5	6.1	17.2	5.2
教育	57.1	4.3	0	8	14.7	3.1	2.5	6.7	3.7
国語及漢文	20.5	4.1	0.8	9.9	26.7	4.8	14.2	14	5
英語	4.7	15.9	0.3	1.2	5	3.2	36.6	26.8	6.2
仏語	0	0	0	0	0	0	100	0	0
独語	20.5	20	0	0	0	0	20	20	20
歴史	27.9	7.4	0	13.2	29.4	7.4	4.4	8.8	1.5
日本史・東洋史	36	6.2	1.3	7.6	23.6	4	11.1	7.6	2.2
西洋史	33	4.6	0.9	5.5	17.4	6.4	20.2	10.1	1.8
地理	43.5	6.7	0.3	9	23.7	6.4	5	4.3	1.7
数学	15.2	19.2	0	2.4	16.8	5.6	16.8	20	4
算術・代数・幾何	29.8	7.4	0.2	8.5	20.2	3.7	11.9	14.1	3.3
三角法	21.8	7.1	0	7.6	15.3	2.9	27.1	15.9	2.4
解析・幾何	27.4	8.1	0	4.8	1.6	0	40.3	17.7	1.6
微分積分	25.6	5.1	0	5.1	0	0	59	5.1	0
物理及化学	11.8	17.6	0	5.9	5.9	0	29.4	23.5	5.9
物理	21.4	21.4	0	7.1	7.1	0	25	7.1	7.1
化学	15.4	5.1	0	2.6	2.6	0	25.6	12.8	35.9
博物	18.2	27.3	0	9.1	18.2	0	18.2	9.1	0
動物及生理	63.7	5.2	0	3	11.9	1.5	8.9	5.2	0.7
植物	53.2	3.9	0.4	6.9	12.4	8.6	9.9	3	1.7
鉱物	51.6	6.5	0	6.5	12.9	6.5	12.9	3.2	0
法制及経済	30.8	7.5	0	4.8	17.1	2.1	8.9	21.2	7.5
図面	11.5	7.7	0	0	11.5	11.5	23.1	23.1	11.5
毛筆画用器画	19.7	0	2.6	0	25	15.8	14.5	14.5	7.9
鉛筆画用器画	11.8	14.7	0	0	14.7	0	41.2	11.8	5.9
家事及裁縫	11.8	0	5.9	0	2	19.6	11.8	49	0
家事	34.7	0	18	1.4	8.3	9.7	16.7	11.1	0
裁縫	0	0	1.6	0.3	0.3	17.6	19.6	58.3	2.2
体操	19	1	6	0	13	18	24	18	1
簿記	11.5	7.7	0	11.5	7.7	3.8	23.1	11.5	23.1
農業	24.5	0	0	4.9	30.4	15.7	10.8	6.9	6.9
商業	30.7	7.7	0	3.8	26.9	7.7	3.8	0	3.8

(37) 女子高等師範学校『女子高等師範学校一覧（明治 36 年～明治 37 年)』東京女子高等師範学校、1912 年、62 頁。

(38) 同上、70-71 頁。

(39)『東京女子体育大学紀要　藤村学園関係史料Ⅰ』、228-233 頁。
(40) 前掲『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』、326 頁。
(41) 同上、397 頁。
(42) 吉井定枝『藤村学園七十年の歩み』藤村学園、1972 年、63-64 頁。
(43) 掛水通子『明治期における女子体育教員養成機関に関する歴史的研究』、表 23、の卒業生数比較。なお下記の表は、藤村学園関係史料Ⅲ「本校卒業生人名及奉職一覧表」(『東京女子体育大学紀要』第 6 号、1971 年、175-183 頁)、藤村学園関係史料Ⅳ「卒業生に関する調査」(『東京女子体育大学紀要』第 7 号、1972 年、160 頁)、『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』「卒業生数一覧」(1973 年、1165 頁)、『女子高等師範学校一覧』を、筆者が編集したものからの引用。

時代	明 35	明 36	明 37	明 38	明 39	明 40	明41	明 42	明 43	明 44	大 1	合計
東女体音	15	15	53	93	102	63	25	15	12	6	14	413
女子部			29	20	23	25	16	23	8	24	9	177
女高師				21		24		22		21		88
合計	15	15	82	134	125	112	41	60	20	51	23	678

(44) 前掲『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』、529 頁。女子高等師範学校『女子高等師範学校一覧 (明治 36 年～明治 37 年)』、藤村学園関係史料Ⅲ『本校卒業生人名及奉職一覧表』『東京女子体育大学紀要』第 6 号。
(45) 加藤節子『雑誌「女学世界」にみる女子体育』上智大学体育学会、1987 年、53 頁。
(46) 同上。
(47) 塚本はま子『女子の家庭教育』学術図書出版、1901 年、6 頁。
(48) 三輪田真佐子『婦人と体操』国光社、1903 年、10 頁。
(49) 山口理恵子『スポーツの近代化における性別二元化体制』共愛学園前橋国際大学論集 8 号、2008年、45-62 頁。
(50) 前掲『雑誌「女学世界」にみる女子体育』、53 頁。
(51) 西川政憲『今世女訓』国会図書館、松邑三松堂、1901 年、50 頁。
(52) 來田享子『体育・スポーツ史研究の立場から――女性競技スポーツ普及期の奨励論における性差認識を中心に』中京大学、2007 年、1-2 頁。
(53) 塚本はま子『婦人の風俗改良』学術図書出版、1903 年、57 頁。
(54) 進藤孝三『日本女子体育の母 井口あくり女史伝』温故館、1986 年、117 頁。
(55) 加藤節子『雑誌「女学世界」にみる女子体育』上智大学体育学会、1987 年、58-60 頁。
(56) 同上。
(57) 同上。
(58) 同上。
(59) 同上。
(60) 太田利雄『女学生庭球大会を観て』博文館、1925 年、22 頁。
(61) 高橋一郎『戦前期における女子体育服の変容 ：身体イメージとジェンダー』日本教育社会学会大会発表要旨集録 (48)、1996 年、116 頁。
(62) 平本直次著『改正学校体操理論及教授法』大倉書店、1906 年、82-83 頁。
(63) 長岡女子師範学校附属小学校著『小学校体操教授要網』目黒書店、1921 年、75-77 頁。
(64) 前田幹夫『大正期の学校体育の研究――香西小学校の体育研究と実践』不昧堂出版、1994

年、87 頁。

（65）前掲『大正期の学校体育の研究』、97 頁。

（66）同上、98 頁。なお、一斉購入の体操服は、右図のようなものであった。

（67）岸野雄三『近代体育スポーツ年表』大修館出版、1973 年、1415 頁。

（68）同上、34 頁。

（69）同上、103 頁。

（70）同上、81 頁。

（71）同上、103 頁。

（72）同上、105 頁。

（73）同上、154 頁。

（74）財団法人日本体育協会『日本体育協会 75 年史』日本体育協会出版、1989 年、334-346 頁。

（75）同上、p.341、昭和 5 年から 20 年までは開催されていないため計上されていない。

（76）同上、341-343 頁。挙げた人数は、外国人選手を引いた人数である。

（77）同上、323-334 頁、および 356-357 頁。

（78）日本オリンピックアカデミー『オリンピック事典』プレスキムナスチカ、1981 年、449 頁。

（79）椙山女学園公式 HP『歴史の窓-椙山女学園と前畑秀子』
＜ http://blog.sugiyama-u.ac.jp/mshc_nl/2011/06/entry_254.html ＞

（80）前掲『オリンピック事典』、451 頁。

（81）前掲『日本体育協会 75 年史』、342 頁。

2011年度 山本ゼミ共同研究報告書

「近代日本におけるスポーツ文化の形成と学校教育」

２０１２年３月１日　発行
発行者　慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会
＜代表 山本正身＞

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部内
℡ 03-3453-4511（内）23112